
白月に涙叫を

善輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白月に涙叫を

【Nコード】

N6360U

【作者名】

善輝

【あらすじ】

与えられた役割、その為の力を受け止め、愛する人に着き従う青年
苦痛の運命に翻弄されながら、課せられた宿命の路を歩む少女

二人の男女の、月夜に織りなすハイファンタジーラブストーリー

白と瓦礫（前書き）

はじめまして、義輝と申します。

まだまだ至らぬ若輩者ですが、楽しんで読んでいただけたらと思います。

作中では多少のグロ描写、微エロ（多分）が混在すると思われますので、その点を留意していただけたらと思います。

誤字・脱字等ありましたら遠慮なく指摘していただけるとありがたいです。

それでは、この作品が貴方の心に少しばかりでも残らんことを願っています。

白と瓦礫

貴方のことばに、私は笑った

貴方の言葉に、私は涙した

貴方のコトバに、私はまた泣いて、でも、笑うことができた

青年は少女を抱いて座っていた。

冷たい瓦礫の上、温もりのない月明かりの下。硝煙すら上がり疲れた戦災の跡地。命すらも凍りついたその場所で、青年は眉一つ動かさず、腕の中で瞳を閉じる白雪のような少女を見つめていた。

肌も髪も服も全てが、青空を泳ぐ雲や降り積もった新雪のように真白く、美しく整った顔に儚さを添える。荒廃した周囲の情景に比べ、少女は不自然な程に美し過ぎた。煤の一つもついていない、それは彼女を抱く青年の尽力によるものであった。

はじめは恩と恨み。そして誓い。さらにはまごうことなき、唯一の

愛がそこにはあった。

――愛。彼女には、ちゃんと届いて居ただろうか――

そう考え、青年は口を開きかけるが、直ぐに言葉を呑み込んだ。

少女の目は開かない。彼女はずっと、目を閉じたままだ。青年は開くのを強要しようとはしない。開くのも閉じるのも、全ては彼女の意志。彼女の意志を何よりも優先する、それが青年の誓いでありまた愛であった。

「いつまでそうしているつもりだ？」

近づいて来る足音と、芯のある強い女声に青年はゆっくりと顔を上げた。

――自分の鼓動以外を聞いたのは久しぶりだ――そんなことを思いながら。

視界に写ったのは一組の男女。

どちらもよく見知った顔馴染みであったが、青年はその来訪者に何ら感情も抱けなかった。

「何の用ですか」

抑揚のない声で青年は問う。

「先月廃墟になったある街に何隊かの先遣隊が派遣された。だが、その何れもが街に着いたと思われる頃に音信不通になっていくらしくてな」

「その調査に貴女が派遣されたと？」

問いに答えた金の髪の女性の後を青年が引き継ぐ。女性は表情を変えず無言でそれに肯定と答えた。

青年は鼻で笑い、一度腕の中の少女に視線を落として、再度女性と、その隣の少年を見据える。

「貴女が調査の為だけにその姿で現れ、尚且つ騎士団長代理まで引き連れて来たと？」

そんな馬鹿な話はない、と青年は言外に付け加えて言葉を切る。元従盾騎士と呼ばれた少年が一步、青年の方へと歩み寄った。

「俺達の任務は先遣隊失踪の原因究明とその要因の排除だ。お前がここを去ってくれば、それで済む。……わかってんだろ？　ここに居たって、何も変わらない。なあ……チアキ」

「黙れ」

青年が突如無だった感情を、燃え盛る憤怒に色を変えて少年を睨んだ。その眼には、目の前の少年と女性、その向こうのモノへの憎悪の焰が宿っていた。

「その名前で呼んでいいのは彼女だけだ。……ここへ居たいと言ったのは彼女だ。彼女が動くと言うまで、僕はここにいます。彼女が選んだ彼女の居場所を僕は守る」

そう言って、青年は少女を静かに瓦礫の上に横たわらせ、立ち上が

る。

「何処かの誰かが選んだのを良い事に、利用するだけ利用して、苦しめるだけ苦しめて。背けば反逆だと貶めて、辿り着いた居場所さえ奪って……。貴様らにわかるのか。彼女が流した涙の数が！ 引き裂かれた心の痛みが！」

青年の瞳はもはや眼前の二人など見てはいなかった。見えているのは彼らの向こう側。少女からあらゆるモノを奪った、巨大な存在。

「誰であろうと容赦はしない。彼女を苦しめようとするモノ、彼女から何かを奪おうとする存在全て！ この僕が喰らい尽くす！」

白き月の下で、一人の青年が叫ぶ。それは、涙を咬み殺した哀しみの叫び――。

鍵乙女 ―デビューナー―

一台の馬車が野道を走っている。昼下がりの穏やかな春陽に包まれたその道は、森に出来た獣道のように、幾多の人々がそこを通っていったが故に作られた名もなき路。

いつから使われ、誰が初めに通ったのか誰も知らない、けれど、行商人や旅人達の足跡が築き上げてきたものだということだけは語らずともわかることだった。

「オルヴス、まだ着かないの？」

馬車の中から少女が気だるそうな声で、騎手の青年へ問う。

「後小一時間と言ったところでしょうか。この辺りはのどかで、馬もあまり急ぎたがらないようですし」

姿を見せない声の主の方へ律儀に顔を向けながら、オルヴスと呼ばれた青年はにこやかに答えた。

首が隠れ、目にかかる程度の長さの黒髪に、七分くらいまで捲りあげた白いカッターシャツと黒のベルボトム。

一見で騎手ではないことは誰の目にも明らかであるが、その実、青年は馬の機微もわかるようで、その姿は半ば不思議にも見える。

「あなた、私と馬とどっちが優先なのよ」

倦怠感に苛立ちを少々加えた声音で少女がまた青年に聞いた。

「そう焦らなくとも大丈夫ですよ。ああ、もしかして“お花摘み”

ですか？」

「違うわよっ。疲れたの。お腹空いたわ」

不本意なところを指摘されたようで、少女の声は少し捲し立てる様に言葉を次ぐ。

オルヴスはその様子が目に浮かんでいるようで、口元を緩めていた。

「先程の村で作ってきたサンドイッチが荷物の中に入っていたと思います」

先程とは言っても、村を出たのが日も昇る間際の薄暗い時間だったが。

「もう食べた」

「僕の分は」

「……そんなもの最初からなかったわ」

不遜にもそう口にする少女の言葉を、オルヴスは端息混じりに仕方がないと思い、反論はしなかった。

その、なんだか諦められたというか若干呆れたかのような雰囲気を感じ取ったのか、少女の声が弁明しはじめる。

「し、しょうがないじゃない。だってあなたに起こされて直ぐ馬車に乗ったし、乗ってからはずっと寝てて何も食べてなかったし……アンバタだったし」

最後の言葉だけほんの少し上気したようで、またオルヴスは微笑ん

だ。彼自身は騎手をしながら食事を摂るつもりがなかったので、早朝作ってきたサンドイッチは全て彼女の好物のアンバタにしてきたわけだが、それが功を奏したようである。

「全く。あんまり甘いものばかり食べていると虫歯になりますよ」

とはいえ、一応釘は刺すらしい。

「子供扱いしないで。あなたより二つ年上なんだから」

はいはい、とオルヴスは流して馬へ軽く鞭を打った。のんびり散歩気分で歩かせてやりたい所だが、主人はあの様子だし、街は近いので少しばかり頑張ってもらおうとの思惑だ。

——大樹の街セパンタ。古くから末端の村々への交易の拠点として栄えてきた街である。故に街とは言っても、都会然とした、石や鉄などの建築物、整備された広い通り等といった物は存在せず、建物の殆どは木造で背も低く、通りは狭い道が幾重にも重なる網の目のようなものである。それでも東西南北に一直線に伸びる十字路兼街の出入り口と、一回りするのにも一日はかかると言われる広さが「街」としての名目を保っているとも言おうか。

そんなセパンタの西門に、オルヴスが引く馬車はようやく辿り着いた。

「アノ様着きましたよ」

馬車を降り、後ろの荷車へと声をかける。少しして、幌の中から一人の少女が現れた。背中まである艶やかで乱れない水色の髪を、両側面から後頭部にかけてまとめ、後ろで一つに結んでいる。日差しに溶けてしまいそうな真珠の肌と凜とした顔立ちで、服装は華美でもない白のワンピースなのにどんな造形にも見劣りしないと思われる程。

「さて、街へ入りましょうか。この時間なら宿も取れるでしょう」

言いながらオルヴスは手を差し出す。アノと呼ばれた少女は慣れた手つきでその手を取ると、ゆっくりと地面に降りた。

「そうね。ずっと動いてなかったから足が重たいわ」

また眠っていたのだろう。まだ少し眠気が覚めきっていない藤色の眼を擦ってそう告げた。言葉を受けてオルヴスは馬車から荷物を取り出して肩に背負い、馬の手綱を引いて馬車止めに連れて行く。馬車を繋いで戻る際、オルヴスは思い出したように荷車の中に入って、中から白い布のようなものを持ってきた。

「忘れてました。大きな街ですし、念の為」

白い布、それは薄手のフードで、少女の頭をすっぽり覆い、目深に被れば顔が見難いように出来ているものだった。

「失礼しますよ」

一言告げてからアノの頭にそれを被せ、紐を結ぶ。

「これ、視界が悪くなるのだけど」

「僕があなたの眼になりますから大丈夫ですよ」

「そうじゃないんだけど……」

アノは以前にもこのフードを被る事を何度か嫌がっており、「幼く見える」だの「今日の服に合わない」だの「あからさまに隠してるっていう感じが嫌」だの理由をつけるのだが、悉くオルヴスに一蹴されていた。

その経験もあるので逐一アノも食い下がらない。最初から二言三言文句を呟くくらいで、抵抗と呼べるようなことなんて事はないのだが。

「そろそろ参りましょうか。衛兵がアノ様の美貌を見ようとフードの下に目を光らせてますから」

冗談なのか本気なのか、オルヴスは門を警備する衛兵の方へ指を差して微笑むと荷物を持ち上げて歩き出した。

「ばっ馬鹿じゃないの？ そんなことあるわけないじゃないっ」

フードの下の頬を少し赤く染めて反論しながらアノがオルヴスの後へ続く。

そんな毎度毎度のやり取りを終えて、ようやく二人はセパンタの街へと足を踏み入れた。

オルヴスはここセパンタに何度か足を運んでいる為、複雑な街並み

も大体は覚えている。その足取りは迷う事なく、宿のある方向へと歩を進めていた。余談だが、毎回共に来ている筈のアノが全く道順を覚えていない様子で、オルヴスの一步後ろを着いて来ているのはご愛嬌である。

「相変わらずここは賑やかですねえ」

「こういうのは騒がしいって言うのよ」

オルヴスの感想に苦言を呈し、アノはふと顔を上げた。

何やら美味しそうな匂いが何処からか流れて来ている。それに誘われるように首を巡らせた。

目に止まったのは一見の酒場らしき店。店内は少々薄暗いが、街道の露店や商人、客らの声に紛れて男女含めた笑い声が聞こえてくる。時刻はまだ夕方といったところだが、店自体はやっているらしい。

と、アノはそこまで考えてお腹の辺りの違和感に身体を強張らせる。だがそれは彼女も経験則からわかる通り、無駄な抵抗であった。胃の辺りから伝わる音の振動に、フードの下の顔を林檎のように染めながらオルヴスの隣をそそくさと通り過ぎようとする。彼と肩がすれ違うとほぼ同時にとぼけた声が彼女の耳に届いた。

「美味しそうな香りですねえ。これは、香草焼きか何かでしょうか」

アノの肩が跳ねるように反応したが、足だけ止めて振りかえらない。

「少し早いです、夕飯、食べて行かれますか？」

「なっ、何でよ？」

平静を装ったつもりだろうが、本人は声が少し上ずっている事に気づかない。オルヴスは知らぬ顔で言葉と続けた。

「いえ……お腹が空いたと馬車でも仰ってましたし。……“事”の後だと食べられないでしょう」

後半の台詞にアノが先刻とはまた違った肩の強張りを見せる。目を伏せ、深く息を吐き、そうしてから彼女は少し固い表情で顔を上げた。

「そうね。行きましょう。オルヴス、荷物は大丈夫？」

「はい、お任せください。僕も少々空腹だったもので」

「そう」

対照的に柔らかな笑みを浮かべながら、従者はスタスタと進む主の後を着いて行く。

開け放たれたままの扉をくぐると、店内の喧騒がよりはっきりと聞えた。

アノは迷わずカウンターの一番店奥の席に座り、その隣をオルヴスが着く。少しして、カウンターの店主らしき人物が二人にグラスの水を運んできた。

「いらっしゃいませ」

「少しばかり空腹を満たしたいのですが、そのような料理もありますか？」

席には品書きがなく、さりげなく店内を見回す少女を尻目にオルヴスが率先してそう問う。

「ここは旅の方も多く立ち寄られますので。まかないのようなものになります、味は保障致しますよ」

チラリ、とアノの方へ視線を向けて許可を取る。当の彼女はもうもいい、というように目線を逸らしグラスの水を傾けた。

文句ならすぐに飛んでくる。無言なのは、無視ではなく肯定。

そんな素直じゃないやり取りをして、従者は再び店主へと目線に戻す。

「香草焼きはありますか？ 香りに引かれて立ち寄ったのですが」

「ええ。十分程お時間頂きますがよろしいですか？」

「二人分お願いします。あ、それとブレッドを二つずつ」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を受け取り、店の奥へ行く店主。早々にアノのグラスの中身が空になり、見計らったようにウェイトレスが水筒を持って現れる。

「お二人とも旅の方ですよ？ いい時期にいらっしゃいましたね」

水を注ぎながらそう口にする。店主が旅の人間もよく立ち寄ると言っていたし、店員である彼女もその辺りの目は養われているのだから。

「いい時期、という事は何かあるのですか？」

「鍵乙女デヒューナーがいらっしゃるんですよ！ 教会の神父様のお話だと、もう近くまで来ているんじゃないかとの事です」

「――鍵乙女デヒューナー。世界に五つあるという「門」を開閉する唯一無二の力を持ち、その力であらゆる災厄から人々を護ると言われる神の使い。アヴェンシス教会の庇護の元にあり、その役目の為に命を賭している。」

「おや……教会は鍵乙女の動向は秘匿している筈では？」

鍵乙女無くして世界に平穏は無く、それ故にその存在はあらゆる存在から狙われてしまう。それは時に野盗であり、何処かの富豪でありまた国である。だから、教会は鍵乙女デヒューナーの存在は公表したとしても行動・居場所に関わる情報は出さないのだが。

「少し前にここに来た旅の方が言っていたんです。ちょうどその時街の中にフェルが入って来ていたんですけど、その方が一人で倒してくれまして。その方が去り際に、もうすぐ鍵乙女が門を開くから大丈夫って」

一通り話を聞き終え、オルヴスはグラスの水を飲み干し、一瞬だけアノの方へ目をやる。

平静を装っているようだが、少し肩を落としフードの中に手を当てて額を抑えているようだった。

「にしても街中にフェルが侵入なんて、危なかったですね」

フェルとは、全ての命ある存在に仇なす魔物の事。個々によるが、物によっては単体で一国を滅ぼすまでの力があると言われて存在だ。

「はい……あの時は運がよかっただけです。あんな腕の立つ剣士さんはじめて見ました。って、それはもう良いんですよ。だって鍵乙女様がいらっしゃったらフェルの心配なんて要らないじゃないですか」

鍵乙女が門に触れるとフェルが消える。

これは民衆が鍵乙女を信仰する最も大きな理由となっている。その事例を直接見た者はおらず、完全に消え失せるわけではないが、鍵乙女が触れた門の近くにらある村等では、実感として明らかにフェルとの遭遇件数は減るのだという。

「へっ、その鍵乙女様とやらは一体いつになったら現れてくれるのでしょうかなあ？」

と、ウェイトレスの少女の背後から野太い男の声が水を注す。

「教会の方が仰っていたんですよ？　もしかしたらもうこの街に來ているかもしれませんよ」

救いを手放すまいとしてか少女が反論する。男はその願望が無駄であるとしても嘲笑うかのように手に持っていた酒のジョッキを飲み干した。

「元々教会はその辺りの情報はひた隠しにしてるだろうが。大体あの小僧が本当に教会の人間かどうかとも怪しいもんだぜ」

「まあまあ落ち着いてください」

そんな不毛な議論にオルヴスが割って入る。正直なところ彼にこの議論は全く関係がないのだが、うるささに頭を抱えた自分の主人を見て動かざるを得なくなったのだ。

「話していても埒が明きませんよ。なんにせよ、世界中を鍵乙女が巡り門を操作しているのは事実です。確かな情報が伝わらないのはその鍵乙女の身の安全を確保する為。故に皆さんが不安になる気持ちもわかりますが、そこは辛抱頂いて待ってくださいると鍵乙女様も心労が和らぐのではないかと邪推しますが」

「けっ、まるで知ったような口振りだな」

「色んな場所を旅しているとたくさんの方々が同じ事を言いますからね」

言う事は言ったとオルヴスは席に戻る。しかし。

「大体鍵乙女様の心労だと？　それが仕事なんだろうが。大事な大事な使命だろ？　それを心労なんかで疎かにされでもしたら、世界中の人間がフェルに食い殺されちまうぜ。ま、鍵乙女様には優秀な^{フラインダー}従盾騎士とやらがついてるらしいからな。どうせ死にやしねえんだろうが――」

吐き捨てるように語られた男の言葉は最後まで言い切られる事はなかった。

悪態を吐いていた男の口はオルヴスの右手によって鷲掴みにされ封じられていた。オルヴスの頭より二つ分程高く持ち上げられ、何が起こったかもわからないといったように身動き一つ取れていない。

何が起きたかわかっていないのはその男のみならず、すぐ側に居た筈のウェイトレスさえも、その店の誰もがオルヴスの動きを全く捉える事が出来なかった。

「お、オルヴス！ 何やってるの！」

「ああ、申し訳ありませんアノ様」

男の顔面を掴んだまま降ろす素振りさえ見せないオルヴスに、いち早くアノが慌てて詰め寄る。だが、彼は主人のそんな言葉にも全く悪びれた素振りを見せず、うわべだけの謝罪を述べる。そして意にも解さないように、視線を右の手に掴んでいる男へと向けた。

「大事な使命、確かにその通りですね。鍵乙女が動かなければ世界中にフェルが蔓延し、人々の生活はままならなくなるでしょう。それほどまでに大事な使命に、欠片程の心労もかからないと？」

返事を待つように台詞に間を持つが、男がそれに答えられる筈もなく、ただ恐怖と動揺に染まった眼を向ける。

「まあ、少し考えればご理解いただけるでしょうが……酒の席での暴言とはいえ、見逃せませんね、先程の言葉は」

「オルヴス、もういいから」

アノが男を持ち上げたままの腕を抑え、止めに入る。オルヴスはそこではじめて店内の視線が自分達に集中している事に気付いたのか、肩を竦めて見せた。

「そうですね……わかりました」

興味が失せたとも言わんばかりに無造作に手を離し、男を床へ落とす。男の知り合いらしき数人が彼の元に集まったが、意にも介さず、アノの方へと向き直った。

「食事どころではなくなっていましたね」

「全く、誰のおかげだと思ってるの」

周囲に出来た人垣を眺めながら苦笑すると、その中から一人、身なりのいい初老の男性が前へと出てきた。

「失礼。私はこの街の保安官をしている者です」

何の脈絡もなく現れたその人物に多少の警戒を込めた眼差しを込めながらオルヴスが前へ出る。

「何か御用でしょうか」

「いえ、たまたま店の前を通った所何やら騒ぎが起きていたようなので。この街は多くの人々が行き交う故にいざこざもよく起こる。それを取り締まるのが私めの仕事でございましてな。少し、お話を聞かせてもらえますかな？」

「……わかりました。それでは――」

「待ちなさい」

保安官の言に承諾の意を示そうとしたオルヴスをアノが制止し、前へ出る。次から次へと舞い込むトラブルに嫌気が指して来た様子だ

った。

「やっぱりこんなのあるだけ無駄よ。邪魔だし」

言いながら、アノが街に入る前に被らされた白のフードを剥ぎ取ってオルヴスへ返す。途端、それまでざわざわと雑言を交わしていた烏合の衆が水を打ったように静寂を取り戻した。

そこに居る誰もが、アノの素顔を凝視し、言葉を失う。先程まで酔った勢いで騒いでいた男でさえも啞然と開いた口が塞がっていなかった。

「私の従盾騎士が失礼を働いた事、お詫び申し上げます。しかしながらそれは私、鍵乙女アーノイス・ロロハルロント・ポーターを案ずるが故の行為。どうか恩赦くださいますようお願い申し上げます」

その様子を一瞥した後、アノは整然とした態度で周囲の民衆へ頭を下げた。数瞬の沈黙が流れる。

「……鍵乙女様」

誰かがそう口にした、その瞬間。狭い店内を先程の騒ぎを大きく上回る喧騒―歓声に包まれたのだった。

―アーノイス―

アーノイス・ロロハルロント・ポーター。ギティア大陸の東に位置する、大国ロロハルロントの“元”王女にして現在の鍵乙女。元というのは鍵乙女となった時から彼女の身柄はアヴェンシス教会の保護下に置かれ、何人たりとも容易に近づく事が許されない存在となった為である。鍵乙女は文字通り世界の安寧の鍵となる存在で、自らが選んだ従盾騎士と共に世界に五つあるとされる「門」を巡る旅をする。

大樹の街セパンタにはその門の一つが置かれている。街の名前にもなっている、天を衝く大木セパンタの元に、他の門同様、初代鍵乙女となった人物が造ったのだという。

現在の鍵乙女であるアーノイスはその門を目指し、この街へと辿り着いたのだが。

「全く、聞いているんですかアノ様？」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

その鍵乙女は現在、自分の従者である筈の従盾騎士の青年に、領主の屋敷の一室にて少々お説教を喰らっていた。

扉も窓も大きめの物が一つしかないが、赤を基調とし綺麗に整頓された部屋に一つだけある椅子にアーノイスが腰掛け、オルヴスがその前に立っている状況だ。

「確かに騒ぎは事もなしに終わりましたが、外、見てくださいよ。街中全部を上げてのお祭り騒ぎになってるじゃないですか。鍵乙女は民の前に姿を現さずに使命を全うするものなのですよ？」

鍵乙女は本来、民衆に知られぬ間に門へと赴き、その役目を果たす。しかし今回はアーノイスがわざわざ自分の素性を明かし、すでに世界中の人間に知られていると思われる素顔を公表してしまったおかげで、セパンタの街は完全に祭りのような雰囲気になってしまっていた。街の全貌を見渡せる部屋窓からは、日も沈んだと思えない程の灯りに包まれて、人々が歌えや踊れやの大騒ぎの様子が伺える。

「元はと言えばオルヴスが騒ぎを起こすからでしょ？ 私は大人しくしてたっていうのに……」

「僕は従盾騎士ですから。貴方が無碍に扱われて冷静で居られないのは当然です」

あくまで毅然たる態度で自己正当化するオルヴス。アーノイスはその言葉に呆れるやらでも嬉しいやら、複雑な心情を込めた眼差しで溜息を吐いた。

「ですが……すみません。思慮が足りませんでした」

「い、いいのよオルヴス。まあ、街の人たちも歓迎してくれてるみたいだし、宿代もかからなかったし、ね」

とはいえやはり思うところがある様子のオルヴスへアーノイスがフオローを入れる、が。

「拘束したりせずに、真っ先に排除してしまえば良かったですね」

「そうじゃないから！」

その思うところというのは、彼女の予想と違い随分と的外れだった。

「はぁ……全く。貴方はどうしてそう直線的な考えしかないのかしら」

「はははー、アノ様に言われたくはありませんよー」

冗談はやめてくださいとでも言わんばかりに軽く笑うオルヴスだったが、不機嫌さを隠さない主のジト目を向けられて押し黙る。なんだかんだ、主には逆らえない従者の青年。

従者が反省の色を垣間見せたのを見て、アーノイスは一つ咳払いをして言葉が続けた。

「こ、今回は私もその、思慮が足りなかったわ。でもそれは貴方も同罪だから、両成敗って事で、この話は終わり！ いいわね」

「お言葉の通りに」

それにオルヴスが恭しく膝を着く。

「……私も、もっと鍵乙女らしくならなくちゃ……」

頭を垂れたオルヴスには聞こえないようにか、アーノイスは己に言い聞かすかの如く呟き、立ち上がった。

「さて、そろそろ行きましようか。あまり長居してしまうのも悪いし、今夜の内に済ませてしまいましょ」

それは門を訪れての儀式。鍵乙女が世界を巡る唯一の理由。絶対の使命。

「準備はよろしいのですか？」

オルヴスが確認を取る。アーノイスはそれに頷くだけで答え、部屋の出口へと向かう。それに先立ち、オルヴスが扉を開けた。

音もなくそよ風すら感じさせず瞬時に動く従者の動きは、彼女にしてみればさして驚く事でもなく、もはや慣れたものだ。

「それでは裏口から大樹の元へ参りましょう。正門では領主殿が鍵乙女様に民衆へスピーチして欲しいと首を長くして待っていますから」

「それは……御免蒙るわ」

「丁重にお断りしたのですけどね。きっと姿を見たら逃がしてくれませんかあの様子では」

民衆の為に、引いては世界の為に、平等に。それが、彼女の役目なのだ。

―門―

二人は人目に付かないよう、屋敷の裏口より街の外へと出た。街を覆っている塀はオルヴスがアーノイスを抱え、一足で飛び越える。今、門から出て行っただとしても衛兵も酒に酔っていると思われる程の喧騒が未だ聞えるくらいだが、念には念を入れて、だ。

「大樹は北門の道を通り直ぐに向かうだけですわね」

道の向こうは夜という事もあり、月と星の明かりだけで行き先は暗い。しかし、目標とする大樹は街から漏れる灯りで影が伺える。夜闇にさらに一層濃く浮かび上がる天まである巨大な一本の樹。空へ空へと向かって伸びるそれは、まるで道標のようにも思えた。

無言で先へ進むアーノイスとオルヴス。門での儀式に神具も魔具も必要ない。大切なのは鍵乙女という存在そのもの。言いかえれば、鍵乙女以外に門へ干渉する方法はない。

段々と細くなる街道、それが獣道のように代わり、周囲の木々が大樹が見降ろす空を隠した路をまた少し進んで、二人は「門」へと辿り着いた。

そこだけが切り抜かれたように木々も草花もない。円形に象られた広場の中央に先程影でしかなかった大樹セパンタが見える。

「本当、何度見ても驚く大きさね」

樹に近づき、もはや先が見えないセパンタを見上げるアーノイス。

「この樹は千年前、初代鍵乙女が門を創った際に共に植えた種が成長したものと言われています。千年も昔からこの場所に居たんですね」

セパンタの樹冠が今どうなっているのかは誰も知らない。頂点は既に雲を突き抜け、気球を用いたとしても見えない場所にあるのだ。

「そしてこれも、千年前造られた時からずっとここにあるのね」

そう言って、セパンタの根元すぐ近くにある巨大な壁を撫でるアーノイス。

木でもなく、石でもなく、金属でもない堅く分厚いそれは、両開きの四角い「門」。高さは5m、幅は3mといったところ。どう見ても何かの扉にしか見えないというのに、その向こうにも無論こちら側にも何もない。ただ、そこに立たされているだけの扉。霊呪術を用いて造られたその門には炎のような、水のような、風のような、何とも取れない複雑な印が模様のように浮かび上がり、厚く、堅く、冷たく不気味で、近くにいくだけで心が引き締められる清廉な空気を放っているようにも思える。

アーノイスは触れていた手を離し、五歩ほど距離を取った。今一度門を見つめてから目を閉じ、一度深呼吸をする。

「……オルヴス。はじめるわ」

「……了解しました」

アーノイスの宣言を受けてオルヴスは周囲の気配を探り、何もない事を確認してから返事した。

もう一度、鍵乙女は呼吸を整える。そして、静かに、両腕を広げた。

オルヴスは少し離れた場所でそれを見守る。周囲への探りは忘れな
いものの、主からは決して目を放さない。これまでも幾度と行って
きた儀式。それでも、気は抜かない、抜けない。
それほどまでに大事な事なのだ。

静かに、儀式ははじまった。

アーノイスと門、その双方から陽の光とも月の光とも取れる光が生
まれ始める。ぼんやりと灯るのみだったそれは徐々に形をなし、門
は印を、アーノイスはその身体から、四肢から、門と似た刻印の光
を輝かせる。徐々に強くなっていく輝きが閃光となる寸前で止まり、
荘厳な音を立てて門が開き始めた。

何と擦れているわけでもなく、まるでこの世界そのものと擦り合っ
ているかのような声を上げながら門がひとりでに開く。その向こう
は闇。黒い靄が蠢いている、そんな様子だった。

門が完全に開き切ると同時、その靄から幾つもの光の球が飛び出し
た。赤、青、緑、その他同じ色などないのではないかと思わせるほ
どに色とりどりに光る拳大程の球体は次から次へと「門の中」から
飛び出していき、まるで何かに導かれるかの如く天へと昇りその姿
を夜闇に溶かす。

空へ螺旋を描きながら昇り消えて行く光の球の出現が少なくなっ
てくる頃、アーノイスは広げていた両腕を閉じ、胸の前で交差させる。
それに反応するように突如として靄の色が黒から一切の淀みがない
白へと変わった。澄み切った純白だというのにまるで眩しさを感じ
ないそれに人が抱く感情はきつと、安堵だろう。

だがしかし、それは長続きのしない安息の光であるのかもしれない。

靄が完全に白へと変わった途端。門の周囲の空気が震え、木々を揺らす。

あらゆる方向から、何かが向かってくるのをオルヴスは感じ取っていた。だが、アーノイスの儀式に毎回付き添っている彼は特別身じろぎをせず、ただずっと、自分の主の背中を見つめる。そして、大気を震わす正体が悲鳴も似た風切り音を立てて現れた。

それは黒い光球。先程の色とりどりの鮮やかなそれとは明らかに異質な光を放つ、が、明らかに違うとも言えないその球体。そして、突如現れた無数の黒い球体群は真っ直ぐに、門の向こうにある白い靄の中へと吸い込まれて行った、その瞬間。

「うつ……ああっ……!!」

それまで目を閉じ、瞑想していたアーノイスが苦悶の声を上げた。交差していた両手で自分の肩を握り締め、爪を立てて唇を噛む。口元からはすぐに血が滴りはじめ、彼女の身体は何かに怯えるかのようには震えていた。

オルヴスはその様子を見、思わず飛び出しそうになるのを寸前で堪えた。ここで止めてしまつては儀式は完了しない。無数の光を空へと還す、そんな綺麗なだけの儀式ではない。それを彼も知っていた。

闇から現れる闇よりも黒い夥しい数の球体が流れて行く、凄絶な光景。先程の鮮やかな光球の螺旋など嘘のよう。

黒い球体の集合が勢いを増すごとに彼女の震えは酷くなり、遂には膝を着く。まるでそれが合図とでもなって、黒球はその襲来を止まつた。

震える両腕を無理やり動かすようにアーノイスが胸の前で両手を組むと、「門」は大きな音を立てて閉じる。

と同時に、なんとか膝支えられていた少女の身体は糸が切れたように崩れ落ちた。

「頑張りましたね……アノ」

地面に落ちる前にオルヴスが受け止め、頬笑みかける。アーノイスは目を瞑り、既に気を失っていた。

肩と膝に腕を回してその身体を抱きかかえるオルヴス。門は儀式の前と同じように、異質な空気を放ちながらも静かに佇んでいる。

血が滲む唇を自分の服の裾で拭い、オルヴスは抜けだして来た屋敷に戻るべく歩き始めた。

従盾騎士 ―ブラインダー―

大樹の街セパンタを出発して数日――。

二人は次の門を目指して再び旅を続けていた。

「アノ様、前方に山小屋が見えますが如何いたしますか？ この先は一つ峠を越えなければならぬのでこのまま進むと野宿になりますけど」

時は夕暮れ。空は晴れていて風も穏やかなままだが、オルヴスが言う通り、彼らの前方には山道へ続く路とそれに少し逸れて山小屋らしきものが見える。オルヴスは野宿であつても別段問題はないのだが、門の儀式は周期的に行う事になっている為、急ぐ旅でもないのだ。

「寝れる所があるならそっちにしましょう。貴方も疲れてるでしょ」

アーノイスもそれは熟知しているので、そう決断した。

「僕の事はお気遣い無用ですが」

「私がもう馬車に揺られ飽きたのよ。いいから早くその山小屋とやらに行きましょう」

「わかりました」

いつもの微笑を浮かべながらオルヴスは馬を山小屋の方向へと向かわせた。

「割と新しいようですね。誰かが立て直したのでしょうか」

外見は木造の古びた小屋そのものだったが、中は最近補修されたようでもまだ木の香りが残っていた。大きめのベッドが奥にあり、右の手前にレンガ造りの暖炉とそれに使う薪が、反対側には毛布等がまとめて置いてある。

「この暖炉、着火の呪術がかけてあるのね。これはまた随分便利な山小屋なこと」

アーノイスが暖炉の中、丁度中央に刻まれている印を見て呟く。
ものに直接印を刻み、大気や大地に満ちる霊力を使って様々な現象を引き起こす術を総じて呪術と呼ぶ。呪術はこの暖炉のみならず、人々の生活に深く根ざし、支えている。

「可燃物を置くと勝手に火が付いてくれるように刻んでありますね。これはまた随分と高尚な……きっと火系術の才に恵まれた方が作っていたんでしょう。アノ様、うっかり踏んでしまわないよう気をつけてくださいね」

「そんなことしないわよ。ちゃんと柵だって付いてるじゃないの」
呪術は印を刻んであればその通りに術が起こるが、効力のある術を刻むには持って生まれた素質が必要になる。高度な術になれば成程その必要性が高くなるのだ。

「ふむ……少々薪を足して置きますか。僕達が使う分には十分ですが、この山小屋は妙に親切ですからね」

荷物を部屋の隅に置き、小屋を出て行こうとする、が。

「……どうかされましたかアノ様」

歩みを止める、否、止められるオルヴス。視線を足元に送ると、暖炉の前に座り込んだアノイスが彼の片足の裾をしっかりと掴んでいた。

「待ちなさい。薪なんて明日の出発前でもいいでしょ」

「いや、でもまだ陽が落ちるまで時間がありますし……」

「つ、疲れてるでしょ」

「ええと……僕は別に」

あくまで外に出て行こうとするオルヴスをアノイスはどうしてか中に引き留めたい様子。

「お腹空いたから先に食事」

「ああ、せっかくですから何か採ってきましょう。山ですから探せばすぐに見つかると思います」

「うー……わ、私がうっかり暖炉の所に毛布でも落として火事になったらどうするのよっ」

「一秒経たずに飛んで来ます」

恥を忍んで捻りだした口調からして最後の一言だったようだが、問題は無いとオルヴスに結論づけられてしまう。彼ならば実際に有言実行出来るので尚更何も言えない。

万策尽きたようでも未だ手は放さない主の姿を見、仕方なく、オルヴスは溜息混じりに笑って折れる事にした。

「わかりました。薪割りは明日の出発前にする事にします」

「そ、そう」

素気ない返事ながらもようやく手を離すアーノイス。

「ですが食料は今持っている保存食を使うより現地調達した方が後の為にいいと思うんです。ですから、アノ様も一緒に参りますか？」

「そうね。たまには散策するのもいいわ」

「はは……散策じゃなくて狩猟採取なんですけど……」

アーノイスの手を取って立たせるオルヴス。

彼女が独りになりたくない理由。それもわかっている手前、無理を強いる事は彼には出来なかった。

「オルヴス、この真っ赤なキノコ美味しそうじゃない？」

「それはあれですね。口にしたら三分で天に昇れます。地獄にも堕ちれます」

「あ、あれ大きな木の実ね」

「あれはアカミノスバチの巣です。木の実に似せた巣を作り、寄ってきた鳥を逆に補食する危険な蜂です。触らないでくださいね」

「お、オルヴス。このモフモフしてるの何？」

「ええと……眠っている熊ですね。大きいな……4mくらいですかね」

元王族の鍵乙女様は100%の天然自然に触れるのは珍しいようで、気の抜けない時間となってしまったオルヴス。山の中に入るのはこれがはじめてというわけではないのだが、彼女自身の足でゆつくりと散策するのは今までなかったかもしれない、と改めて思い直す。いつも馬車の中で寝ているかオルヴスと雑談を交わすか程度だからだ。

フラフラと出歩くのは彼がまずさせないというのもあるが。

鍵乙女である彼女はいつその身を狙われているかしないのだ。護衛として、従盾騎士として気は抜けない。その事はアーノイスも十分熟知しているだろう。故に、そんな精神の負荷からも守らなくてはと、オルヴスと思うのだった。

「さて、そろそろ戻りましょうか。材料は十分ですし。今夜は熊鍋にしますかねー」

「わ、私……熊は食べた事ないのだけれど……大丈夫かしら」

「美味しいんですよ。手とか」

思わず出会えた巨大な食糧を片手で引きずりながらオルヴスが笑顔でそう語るのを、アーノイスは洗面で見つめていた。

— 声 —

『……………たい……………』

『……………き……………い……………』

『………………生きたい』

ああ、またこの声。

原因も正体もはっきりしているのに、いつまで経っても慣れる気配がないその声、言葉、心。

『生きたい』

わかってる。わかってるから、私に叫ばないで。

『生きたい』

あっちの声は沢山聞こえてくるのに、こっちの声は全く届いてくれない。

『生きたい』

やめて。貴方達の願いはわかってるから。

『生きたい』

お願いだから聞いて。

『生きたい』

—誓い—

「もうやめてよ！」

叫び声と共にアーノイスは飛び起きた。身体は汗だくで起きたばかりだというのに息が上がっている。

山小屋のベッドの上、窓から望む空はまだ夜だった。虫も鳥の声も聞こえず、深い夜だというのが経験からアーノイスにも何となくわかった。

荒い呼吸を整えて何とか落ち着きを取り戻そうとする。だが、余りにも静かな夜という環境が、夢から醒めた今でも先程の声をリフレインされるような気がして、彼女は思わず耳を塞いだ。無駄な事は分かっている。だが、恐怖が彼女をそうさせていた。そのまま、ふと気づいて小屋の中を見回す。満月の月明かりが入って来ているおかげで、室内は少しくらいなら見えた。故に、自分が眠りに着くまではそこに居た筈の存在が消えている事にすぐに気付く。

「……どこ行ったのよ」

独り暗闇で呟いてベッドを下り、小屋の出口へ向かった。本来ならそこまで彼を踏みつけていてもおかしくはないのだが、残念ながらその感触はなかった。

ゆっくりと戸を開き外を見る。人工的な灯りなんてものは一切なく、月明かりだけがぼんやりと昼間見た外を照らして、まるで別世界のようだった。

「眠れないんですか？」

突如掛けられた声に驚いてアーノイスの身体が跳ねる。けれどその声の主がよく知っている人物の声で彼女の心に安堵が戻ってきた。それはまるで酷く久々の感覚にも思えていた。

「お、オルヴス、貴方何してるのよ。そんなところで」

声の主、オルヴスは小屋の前の階段に腰掛けている。別に手に何かを持っている様子もなく、一体全体何をしているのかアーノイスにはわからなかった。

「いえ、特に何をしていたというわけでは。アノ様こそ、大丈夫ですか？ 酷い顔をしていますよ」

言って、オルヴスはポケットから取り出したハンカチで汗の滲むアノの額を拭う。

「や、やめなさいよ。それに、酷い顔とは何よ酷いとは」

少しの間されるがままにしていたものの、恥ずかしさが勝ったのかやめさせて、オルヴスの言葉に膨れたフリをするアーノイス。

「いえ、アノ様は美しいですよ？」

「そういう事を言ってるわけじゃ……」

反論しかけて自分の言葉が先程とちぐはぐになっている事に気づいて言葉を失う。

「それで、どうかしたんですか？」

オルヴスはそれに気づいた素振りを見せずに話を元の場所へ持って行った。アーノイスは少しの間口をつぐんでいたが、オルヴスが何も言わず見つめて待っていて、ゆっくりと口を開く。

「また、声が聞えたのよ。それだけ」

それだけ、と強がっては見たものの、オルヴスにそれは通用しない。そんな事は彼女自身熟知しているが、それでも繕わずには居られない性分なのだ。

「靈魂の声、ですか……今度教会に戻ったらその辺りについて詳しく調べてみましょう。何かいい策があるかもしれません。残念ながら僕の知識ではその辺りの事は上手い解決方法が見当たらないもので」

最近になって彼女の耳に届き始めたという声。オルヴスも詳しい所までは聞かされていないが、どうやらそれは彼女の行う儀式が原因となっている気がするとの事はアーノイス本人が以前語っていた。

「あ、ありがと……でも、いいのよ別に。そんなことまでしなくったって」

オルヴスの言葉に珍しく素直に感謝したものの、遠慮を示すアーノイス。そんな彼女に従者は首を横に振った。

「僕は貴方を守ると誓った、貴方の従盾騎士です。それが僕の使命、ですよ」

そこまで言われては押し黙るしかなく、少女は顔を背けて青年の横に腰を下ろす。

その後少しして、少女は青年の肩を借りて眠りはじめた。もう、声は聞えなくなっているようだった。

―グリム―

「アノ様、アノ様。起きてください」

次の日。アーノイスは獣道に揺れる馬車の中で目を覚ました。

オルヴスは山小屋を既に出発し、アーノイスを荷車の中に寝かせ、馬を走らせていたらしい。

すぐに出発するような時でもオルヴスは滅多に彼女の事を起こさない。だが、今回は敢えて、馬車を止めてアーノイスを起こしに来たのだ。まだ寝惚けが抜けきらない彼女の頭でもその事の次第は理解出来た。

「何かあったの……？」

目を擦りながらも声を小さく抑えてオルヴスに問う。

「ここで動かずに待っていてください。いいですか？　じつとしていてくださいよ」

具体的な答えは出さずにそう主人に耳打ちすると、オルヴスは静かに荷台から出て行った。怪訝な瞳を向けるアーノイスだったが、事態を把握しきれない為、下手を打つ事も出来ず、言われた通りに身を固め、幌の隙間から外と出て行った従者の様子を窺う。

山の中に入っていると思われ、陽の光もあまり入っておらず、太陽の位置からして真昼間だというのに薄暗い。

加えて生き物の声がせず、辺りは変に静まり返っているように感じられた。

アーノイスはそんな様子を把握すると、目を閉じ、嗅覚、聴覚を意識から排する。目に見えず、音に聞こえず、何も匂わない。そのどれでもない時、人はもう一つの異変の可能性を感じようとする。世界に人にあらゆる生命に満ちている「霊力」。命の力そのものと称されるそれは、生物の五感のさらに外の感覚で知覚されるものなのだ。

「これは……」

アーノイスは目を開き、独り呟く。その瞳には少々の驚きと呆れの色が濃く写って見えた。

「さて、かくれんぼはそろそろ止めにしませんか？」

馬車の前に立ち、真っ直ぐ前を見据えてオルヴスが柔らかな口調で、そう虚空に問いかける。

当然のように返答はなく、オルヴスは溜息をついて首を振った。次の瞬間。

オルヴスの見つめていた方向から唸るような音、同時に巨大な火球が出現し、真っ直ぐにオルヴスへ向けて放たれた。

草木を焼き払い、地面を溶解しながら迫りくる閃熱。

「オルヴス！」

荷台からアーノイスが身を乗り出して叫ぶ。それに応えるかのよう

に、ゆっくりとオルヴスに右手が、火球へ向けて翳された。着弾する火炎。しかしそれは爆散するでもなく、またオルヴスも馬車も焼失させるべく突き進むでもなく、ただ、ぶつかったその場所で動かない。

「全く、出てこないでくださいと言いましたよ？ アノ様」

翳した右手で事もなしと火球を抑えながら、主に向けて苦笑を向けるオルヴス。その手は淡い青白の光を帯びていた。軽くその手を振り、炎をかき消す。

「し、仕方ないでしょ！」

「大丈夫ですから。サンドイッチでも食べて待っていてくださいよ」

真剣に叫ぶアーノイスを若干からかうかのように彼はゆったりと歩を進め、馬車と距離を取った。

「もう……いつもいつも」

呆れて悪態を吐きながら、アーノイスは自分が寝ていた所の横にバスケットが置かれているのを見つけ、手を伸ばす。

「アンバタじゃなかったら後でお説教ね」

「いいいいやつはああああ！」

アーノイスが呟いたのと奇声が轟いたのはほぼ同時。

オルヴスの遙か頭上より襲来する、炎の剣を振り翳した一人の男。空を“蹴り”、一瞬で肉薄しその剣を振り下ろす。

「相変わらず騒がしい方ですね。グリム」

「相変わらず企画外な奴だぜ！ オルヴス！」

先程の火球同様、オルヴスの光を纏った手が斬撃を防ぐ。力が拮抗した瞬間に二人の身体が跳ね、距離が置かれた。

「んー、やっぱ切れねえか。せめて火傷くらいは負わせたかったんだけどなあ」

身の丈程もある大剣を両肩に担ぎ、右に左にと揺れる、グリムと呼ばれた男。年はオルヴスよりも一つ二つ下程度。燃え盛るような紅い髪に同じ色の眼。教会の金のタウ十字が描かれた白い服の上に鎧の肩当て、膝当て、胴当てだけを付けた格好だ。

「貴方こそ。詠唱もなしにここまでの火炎を起こすなんて、靈術の基本を無視していますね」

己の持つ靈力に詠唱を重ね、現象を起こす術を総じて靈術と呼ぶ。靈術は呪術とは違い、主に人々が戦う術として使われるものが多く、先程グリムが見せた空中での動きも、靈力を固めて足場とする靈術の基礎の一つである。その程度ならコツさえ掴めば詠唱は不要だが、グリムの起こした火炎という現象はそれに当てはまらない。いくら修練を積んでも、靈術の法則から外れるのだ。しかしそれはオルヴスが纏う光の方にも言えた事ではあるが。

「俺様は特別性なんだよ」

言って、剣を地面に叩きつけて炎を纏わせるグリム。

「続きやろうぜ。ここんところ碌な敵と会っていないんだよ。セパンタの儀式が終わってここら辺はフェルと全然遭遇しねえし」

「僕は貴方の敵ではなく同僚なんですけどね……」

グリムの格好から分かる通り、彼はただの変な襲撃者ではない。オルヴスと同じ教会に属する騎士の一人。

元従盾騎士候補グリム・ティレド。若齢でありながら以前は教会一の腕を持つとされた男だ。

「んだよー、細けえこたあいじゃねえかよおー。久々に会ったんだぜ？ 剣と拳で愛し合おうぜ？」

教団内でも常勝無敗とされてきた彼。だが、それも数年前にはじめての敗北を喫している。鍵乙女アーノイスの御前で開かれた、従盾騎士を決める為の武闘大会。その最後の戦いでグリムはオルヴスと戦い、敗れたのだった。

「お前だけだオルヴス。俺が戦ってて、どうしようもないくらい楽しいのは！」

それは彼にとってこの上なく予想外で、喜ぶべき事だった。

グリムの剣が纏う炎が、感情に合わせるように膨張する。火炎はもはや剣を覆い尽くし、グリム自身の身体さえも包み込んで、空気すら焦がす。

「本当、熱い男ですねえ……」

オルヴスも、彼がこうなってしまうては説得では止めるまで面倒になるので戦闘態勢を取る。腰を落として上半身を逸らし、顎を引いて相手を見据え、両の腕の力をダランと抜いた独特の体勢。

「んだよ。本気でやってくれないのかよ？」

だが、それでもグリムは不満げにオルヴスを睨む。

「この姿のまま、少々お相手させていただきますよ」

オルヴスはそれに、口角を僅かに上げて嘲笑を返した。無論、わざと挑発しているのだ。

「チッ……後悔すんなよ！」

さらに火力を上げたグリムの周囲の地面が赤熱化し、溶ける。

「させてみてくださいよ」

オルヴスの言葉が合図になり、二人が同時に直進し――

「オルヴスー！！」

森を震わす程の怒気をはらんだ絶叫が、止めた。

「うわっ！」

高速で動いた二人に吹き飛ばされた大気が戻る勢いで起きた突風に、荷台から出てきたアーノイスは堪えながらも、視線は自分の従者を睨みつけている。

オルヴスとグリムはお互いの拳と剣がぶつかる寸前で止まったままだ。

「え、ええと……如何なさいましたかアノさ――」

「どうもこうもないわよ！ 何よこれ！ このサンドイッチ、ピクルスが入ってるじゃないの！」

「えっ、それ僕のなんですけど……」

戦いの最中であつた事を忘れ、構えを解き、怒れる主の元へ弁明すべく近づいて行くオルヴス。

彼の主はピクルスが大好きであつた。

「サンドイッチなんて食べないと中身わかんないじゃない！ 分けてるなら名前書いときなさいよ！ むしろサンドイッチは全部アンバタにしときなさいよ！」

「そんな無茶苦茶な……」

流石にこれは予想外だったか、オルヴスも少々頭を抱える。そんな二人の様子を見てか、グリムもようやく固まった状態から剣を降ろしてアーノイスらの方を見た。

「おいおいアーノイス様よお、俺達今戦ってたとこなんだけど」

「ああ、やっぱりあんただったのねグリム。何でこんなところにいるのよ。あんたは目的地の偵察が任務でしょ。私達に追い付かれてどうするのよ」

不機嫌さを隠しもせずにグリムへも未だ怒ったままの視線を向けるアーノイス。

グリムは溜息を吐き、取り敢えず大剣を背中の中の鞘にしまいこんだ。やる気が削がれてしまったらしい。

「俺だってさあ、もう二つも先の村に居たのに教会がさあ、二人に一度戻って来いって伝えろなんて言うからさあ、急いで戻ってさあ、きたんだけどさあ」

「は？　なんでよ？」

「知らねーよ……まあここなら教会もそんな遠くないし、鍵乙女様の大好きなアンバタでも買いに戻ればー？」

戦う事以外は基本的にどうでもいい性分のグリムは頭の後ろに手を組んでその辺りをフラフラとしはじめる。元従盾騎士候補とはいえ、彼は別に敬遠な信者でも鍵乙女を守るという使命に惹かれたわけでもなかった。

「では一度教会に戻る事にしましょうか。わざわざ呼び付けるという事は何か大事な用があるんでしょう」

「待ちなさいオルヴス。その前にこの私の後味の悪さを何とかしなさい」

ピクルスの独特の酸味や塩味が未だ口の中に残っているのだろう。気分が悪そうに顔を歪ませるアーノイス。

「あ、ははは……今代わりを作ります……」

「全く、本当我儘なお姫様だな……」

オルヴスは愛想笑いを、グリムは呆れて呟きを漏らしていた。

―フェル―

「そういえばグリム。セパンタでフェルと戦ったそうですね？」

「あ？　なんで知ってんだよ。まー俺様にかかれば小物だったが、街の警備団やただの掲剣騎士クワイターにゃ荷が重そうだったからな。腹ごなし程度に――」

グリムが合流し、教会へと進路を変える一行。オルヴスは騎手を、アノは幌の中、グリムは「鍛錬の一環！」と馬車に併走していた。

「ご丁寧にアノ様の事を吹聴したそうですね」

「ああー……そんな事もあったっけか……」

山道を抜けて野道を進む三人。何もない原っぱに続く、人々の足跡が作った路がただ一本、地平線の彼方へと続いている。

「そのせいでトラブルを被りました。大司祭様にご報告しておきますね」

「ちよっ待てよー、わざわざ親父に言い付けるこたあねえだろ。フェルっていう化物の襲来に怯える無辜の民草に、一筋の希望を与えてやったただけだぜ？」

「駄目よ。そのせいで騒ぎになっちゃったんだから」

「そういう事です」

冷たい二人の言葉にがつくりと肩を落とすグリム。年頃の少年に有りがちなように、彼は父親である大司祭との折り合いがよくなかった。本来ならば司祭の後を継ぐべく教会にて信官となるのが通例であるのに、本人は現在掲剣騎士の一員として、オルヴスとアーノイスの二人に先んじて門の元へと赴き、道中の危険その他を排除、探知を目的とした任についている事からもわかる。

掲剣騎士とは、アヴェンシス教会の庇護の下に人々を守る為に剣を掲げる騎士たちの事である。本来はそれぞれの街や村の教会に駐在し、その街をフェルから守る事を役目としている。グリムは形だけは掲剣騎士となっているが、前述の通りの仕事をしているので、普通とは違う扱いの場にあるが、教団の構成員には変わりない。それを総括しているのが彼の父親である大司祭となっていた。

「つたく……あの糞親父、俺がなんか小さなミスしても付け込んでここぞとばかりに説教喰らわすからな。やってらんねーっつーの」

「……まあ、あの件はグリムだけのせいではないのですが」

「ん？ 何か言ったかー？」

「いいえ何もーん？ グリム、止まってください」

雑談の最中、ふと前方を見たオルヴスがある事に気づき馬車を止める。何事かとアーノイスも幌から顔を覗かせた。

「どうかした？ オルヴス」

「女の子、ですかね」

す、とオルヴスが道の先を指さす。そこには一人の藤色の髪をした

童女が何をするでもなく立ち尽くしていた。

「こんなところであんな小さい子一人何してんのかねえ。ちよっくら聞いて来るわ」

「いってらっしゃいロリコン」

真っ先に近づいて行こうとしたグリムの出鼻をアーノイスがくじく。突然の言われようにグリムが思わず地面に突っかかり振り向いた。

「あんな姫様？ 俺は別に幼女趣味じゃないの。幼女にコンプレックスとか持ってないから」

「何言ってるのよ。メルシアにいつも引っ付かれてるじゃない」

「ぼっ、あれは幼女とかそういう次元の人間じゃないだろが！」

メルシアというのは教会にいる、ある少女の事だが今は割愛。

二人がくだらない言いあいをしているのを余所に、オルヴスが未だ棒立ちのままの少女に近づいて寄っていった。

「あっ、オルヴスの奴……なあ、あいつの方がロリコンっぽくないか？」

「オルヴスをあんたと一緒にしないで」

「はいはい……いつもながらゾッコンですこと」

そんな二人を尻目に、オルヴスは少女の眼の前で屈み、目線を合わ

せて話す。

「一人で何をしているのかな？」

「あのねー、待ってるの」

少女は突然現れた青年にも怖気づく様子もなく、朗らかな笑顔を浮かべて応えた。

「待ってるって誰を？ お母さんかお父さんかい？」

オルヴスの言葉に首を左右に振って否定する。

「んーんー。鍵乙女さまがね、近くにいらっしゃるって、そんちよーさんが言ってたから」

それを聞き、オルヴスは怪訝な表情を浮かべた。

そこへ、言い合いを終えたのがグリムとアーノイスもやってくる。

「んで？ なんだってオルヴスさんよ」

「あ！ 鍵乙女さまだ！」

オルヴスがグリムの問いに答える前に、少女がアーノイスの方へ駆け寄る。突然の事に少々驚いたアーノイスだったが、無垢な少女の笑顔を見、柔らかな笑みを浮かべて膝を折った。

「えっと……どうしたの？ 確かに、鍵乙女は私だけど……よくわかったわね」

「写真で見たの。おとーさんが、新聞を見せて『これが新しい鍵乙女様だよ』って教えてくれたの。うわー、写真で見るよりもっと綺麗ー」

「あ、ありがとう……」

忌憚ない子供の賛辞に照れるアーノイス。そんな事はどうでもいいグリムは、先程から何か考え事をしているようなオルヴスの方へ声を掛ける。

「で？ 結局何だったんだ？」

「さあ……僕もまだ聞き損ねていまして」

思索に更けるのをやめてグリムの問いに答えると、オルヴスはもう一度少女の側へと行く。

「お嬢さんお名前は？」

「ユレアだよ」

「ユレアちゃんか。いい名前だね。ユレアちゃんは何で鍵乙女様を待っていたのかな？」

そう、今度は核心を突いた質問をする。すると、少女は表情を曇らせて少し俯き答えた。

「村の近くにフェルがたくさん居て、危ないから鍵乙女様に助けてもらおうと思って」

答えを受けて、二人の表情が険しくなる。残りの一人たるグリムは嬉々として自分の拳を鳴らす。

「フェル、ね。よっしゃ、ここは一つ俺様がちゃちゃっと片付けてやろうかね。嬢ちゃん任せな。フェルの百匹や二百匹、マッハで消し炭にしてやんよ」

「あははっ、マッハってなーに？」

「マッハってのはな、すっげー速えって事だ」

「すっげーはええ……？」

グリムが少女と戯れている間に、アーノイスがオルヴスに話しかける。

「ねえ、オルヴス……」

続きを言い淀むアーノイス。それを見てオルヴスは肩を竦めて見せた。

「アノ様が行かれると仰るのであれば行きますよ。グリムも居ますし、フェルならばそれほど時間はかからないでしょうから」

「うん。行きましょう……あんまりこういう事に首を突っ込むのはよくないのは、わかってるんだけど」

鍵乙女は門を開閉するのが何よりの、唯一の使命である。故に、このような小事——と言ってもは当事者に悪いが——に一々構わず、旅を優先するのが第一だ。その為に教会も掲剣騎士を各地に派遣して

いるのだから。

「村の近くに出ている、とわかっていて見過ごせる筈ありませんからね」

しかし、アーノイスがそれを常に適応出来るような人間ではないと、オルヴスはわかっていた。

自分も行くと伝えるべく、彼女は少女の元に向かう。

「……それに、少々気になる事もありますし、ね」

それを見つめていたオルヴスの眩きは、誰の耳に届くでもなく風に溶けていった。

―兄妹―

ユレアの案内で一行は件の村へと向かった。

彼女居た道端からそう遠くはなく、五分程歩くと小さな建物がいくつが集合して建っているのが見え始めた。

「こんなところに村があったなんてねえ。教会は知ってんのかね？」

村というよりは集落と言った方が合っているかもしれない。舗装された道などは存在せず、雑草を刈り取って地べたを道と見立てているようで、小さな木造の家々が適当な感覚で立ち、その周囲だけ雑草が背丈を合わせて刈られ、野菜などを育てたりもしているようだ。

「フェルが近くに出ているというのにわざわざ鍵乙女様を待っていたのです。恐らくは最近出来たか、もしくは閉鎖的な場所か……」

オルヴスの言葉通り、村に入ってもあまり人影は見当たらない。フェルが出没しているというのも関係しているのだろう。

「この前までね、牛さんとか馬さんとか鶏さんとかたくさんいたんだけど、皆逃げちゃったの……」

村を見回す三人にユレアは沈んだ顔をしてそう告げた。

フェルは、命あるものに仇なす存在だ。人間然り、牛や馬といった動物、鶏などの鳥、虫ですら彼らの中では襲撃対象になっている。例えば村の中で飼われていたとしても、己の生命を脅かす何かが近くにいるというのであれば、逃げるのも仕方がない事である。

「大丈夫よユレアちゃん。このお兄ちゃん達がフェルをみーんなや

つけてくれるから。そうすれば牛さん達もきつと帰ってくるわ」

「本当？」

「ええ、本当よ」

アーノイスの言葉にユレアは破顔すると、軽快な足取りで一件の木造家屋の前へ走っていった。

「ここが私のお家！ えっと……ながたびでお疲れでしょう。きゆうくつ？ などところですが、くつろいでいてください」

一生懸命に言葉を絞り出すように歓迎の挨拶を述べる少女。

「へえ、ご立派な挨拶だな。誰に教えてもらったんだ？」

感心し、グリムがそう問う。

「おにーちゃんがね『もし鍵乙女様に会ったらこう言いなさい』って教えてくれたの！」

褒められて嬉しそうな笑みを浮かべて、ユレアは自宅の扉を開いた。

「ただいまー！ おにーちゃん！」

元気な声で帰宅を告げ、家の中に消えて行く少女。

「えーっと……私達どうすればいいのかしらね」

置いてけぼりにされたアーノイスが首をかしげる。

「先程も言いましたが、教会はなさそうですしね」

「ま、取り敢えず入ってけばいいんじゃない？ あの子だってアーノイス様を待ってたんだろうし」

思案するオルヴスとアーノイスを余所にグリムは何食わぬ顔で、開けっぱなしの扉の中に頭を突っ込む。

「ごめんくださーい。鍵乙女と従盾騎士の愉快的御一行ですけどもー」

「いきなり胡散臭く聞えるのは私だけなの？」

「いえ、僕も同感です」

とはいえ、もう進んでしまった事は元に戻せない。二人もグリムに続き、家の前で待機する。

少しして、家の奥から翠色の髪をした青年と、その足元にひつつくユレアが出てきた。

「ああ、貴方方が……」

「ね？ ね？ 言ったでしょ？ 鍵乙女様だよ！」

鍵乙女の突然の来訪に少々面食らった様子ながらも、青年は深々と頭を下げる。

「遠路はるばるようこそいらっしやいました。こんな辺鄙な村にまで足を運んでいただけるなど……感謝の言葉もございません」

「たまたま近くを通りかかったものですから。そこでユレアちゃんが一人で見つけまして」

オルヴスが率先して前へ出て青年を言葉を交わす。

「ね？　嘘じゃないって言ったでしょおにーちゃん」

「ああ。でもユレア、一人で外に出ては駄目だとあれほど言っただろう」

「ごめんなさーい……」

優しい口調でユレアを叱りつけると、青年は三人の方へと向き直った。

「申し遅れました。私はユレアの兄のクオンと言います」

「へ？　兄妹？　びっくりしたぜ、親子かと思った」

「はは、良く言われます」

ユレアは5、6歳と言ったところ。青年はどうみてもオルヴスと同じかそれ以上に見える。グリムが驚くのも無理はない事だった。

「立ち話もなんでしょうから上がってください。狭いところですが、お茶ぐらいお出しできますよ」

「おっ、いいねえ。ちょうど腹が減ってたんだよなー」

「貴方はもう少し遠慮というものを覚えましょうか」

クオンの提案で、三人は家の中へと入る事にした。

招かれ、小さな円形の木テーブルに着く三人。

ユレアとクオンはキッチンでお茶の用意をしているようだ。

「良いわねこういう家。落ち着くわ」

木製のテーブルの手触りや質感を目で確かめるように眺めながらア
ーノイスが呟く。

「姫様は庶民の暮らしに慣れがなさそうだもんねー」

テーブルの上にだらしなく上半身を伸ばしたグリムが明後日の方向
を見ながら悪態を吐いた。

「貴方だってボンボンでしょ。大司祭のドラ息子なんだから」

「だーもう、親父の話はだすなよなあ」

「まあまあ、アノ様とてもう旅を続けて長い。最近ではようやくと
野宿も慣れてきたようで何よりですよ」

いつもながらの不毛な駄話をはじめる二人をオルヴスが宥める。

「へえ、未だにオルヴスの事を使用人みたいにしてんのかと思ったけど」

「ああ、それは変わりませんよ」

「オルヴスっ！」

アーノイスが赤面して立ちあがる。野宿でも寝られるようになった、とはいえそういう環境の変化にも身体がすぐに慣れてくれるようになったというだけであつた。

「それは貴方が私にさせないからっていうのもあるでしょ！……まあ、その、確かに私は不器用だけどやればできるわよ！」

「炊事洗濯買物その他雑務は全て僕の仕事の一部ですからね。仕事を取られてしまつては立つ瀬ないわけですよ」

オルヴスの、擁護しているのかどうなのかわからない言い回しに、グリムはただ興味なさそうに欠伸をしていたが、ふと気付いたように顔を上げた。

「なあ、家事全般は全部オルヴス任せなんだよな？ 洗濯とか」

「さっき言ったでしょ。悔しいけど、そういう事ね」

「じゃあ姫様のパン——」

「オルヴス」

「はい」

「ぶべっ！」

何かを口走ろうとしたグリムの顔面に、主人の許可を得たオルヴスの拳が飛ぶ。容赦のない一撃はグリムを椅子から転げ落ちさせるには十分過ぎた。

「ぐおおおお……オルヴスてめえ、こういう時だけすぐに手え出しやがってえ……卑怯だぞ」

あまりに素早い奇襲にもろに喰らってしまったらしいグリムは顔面を抑えて床を転がる。

アーノイスは既にそっぽを向き、オルヴスは虫けらでも見る様な冷やかな視線でグリムを見下ろしていた。

「大丈夫ですかグリム？」

「効いたぜこん畜生……だが、無事だ」

「ちっ」

「ちょ、おまつ、今舌打ちしやがったなオルヴス！」

にこやかな表情を崩さないままのオルヴスに、一挙動で立ちあがったグリムが食ってかかる。しかし、反応はごくごく冷ややかなものだった。

「死ねば——いえ、せめて記憶が人格を失えば良かったなんて、これっぽちも思っていないですよ？」

「いや、ホントすみません。反省してます。反省してまーす」

「……オルヴス」

最後のやる気のない謝罪が気に入らなかったようで、再度オルヴスに指令を出すアーノイス。

「はい」

「ちょ、待つ、やめろ！ わかった！ わかったから！ いやマジすみません、ごめんなさい！ もう二度と言わないって！」

席を立ち、指の骨を鳴らしながら近づくオルヴスと土下座しながら後退するグリム。

そこへ、お茶の準備を終えたらしいクオンとユレアがやってきた。

「おや、何やら楽しそうですね」

「あははっ、剣士のお兄ちゃんそれどうやって動いてるの？」

「これはすみません。お見苦しい所をお見せしてしまって」

グリムを追い詰めるのを止め、カップを並べるのを手伝うオルヴス。その隙を突き、グリムは席に戻った。

—願い—

「それでは、十日も前からフェルが近くに棲み付いていると？」

ユレアらが淹れた紅茶を飲みながら、オルヴスはクオンに、この村に出没しているというフェルについての詳細を聞いていた。

グリムはユレアと何やら談笑しているし、アーノイスはその双方の中間にあって時折視線をオルヴスやユレアの方に向けながら、カップを傾けている。

「ええ。奴等は森の何処かに身を潜め、夜になると村の方へと降りてくる。今はまだ村に張ってある結界が持っていますが、それもいつまで持つか……」

クオンは沈痛な面持ちで俯き、そう語った。

「結界……この村には霊呪術を扱える方が？」

「結界の方は一応私が。扱える、という程ではありませんがフェルからこの村を何とか匿う程度の物は仕上げました」

霊呪術とはその名の通り、霊術と呪術を組み合わせたもので、呪術のように刻んだ印に霊力を注ぎこんで現象を起こす術の事を言う。しかし霊呪術は定義が広く、それだけに留まらないのだが。単に呪術を使うよりも単に霊術を使うよりも、それは高度な才能を要求する。

「成る程。通りで、この村には匂いがしないわけですね」

オルヴスの要領を得ない物言いにクオンが疑問符を浮かべる。それに気付き、オルヴスは笑って説明した。

「ユレアちゃんと出会った時、僕は彼女の話す村の気配を探りました。人が集まっていれば、そこに霊力が集まっている匂いを感じる事が出来る。でも、それが感じられなかった。それはつまり、その村は存在していないか、隠されているか。どうやら正解は後者だったみたいです」

クオンはそれを聞いて感心していた。

「流石、鍵乙女様に選ばれた従盾騎士様だ。霊力の匂い、ですか。確かに言われてみればわからなくもないが、意識したとしてもはつきりなんて私にはわからない。いやあ凄いな」

「貴方も霊呪術を扱えるなら、感覚さえわかれば感じ取れるようになると思いますよ」

言葉を切り、カップの中身を飲み干すとオルヴスは、さて、と腰を上げた。

「アノ様、グリム。フェルの居場所が掴めました。早々に片付けてしましましょう」

オルヴスの宣言を聞き、それまでユレアと戯れていたグリムが立ちあがる。

「よしきた！ さーてえ、齒応えのある奴はいるかなあー」

「遊びじゃないのよグリム……って言っても無駄よね」

苦言を呈しながらもアーノイスも席を立ち、カップを置いた。

「鍵乙女さまたち……もう行っちゃうの？」

既に出発の準備は出来たと言わんばかりの三人に、ユレアが寂しそうな声音で聞く。

「うん……私達はね、ユレアちゃんのように私達の助けを待っている人がいるから。だから、行かなきゃならないの」

少女の前で屈み、言い聞かせるようにその小さな頭を撫でるアーノイス。

そうして離れようとする、が。その腕は小さな両手に掴まれて引き留められてしまった。

「ユレア、鍵乙女様の邪魔をするんじゃない」

クオンが叱りつけるも少女はただ首を横に振るだけ。

アーノイスは掴まれてしまった腕を振り払う事も出来ず、どうしたらいいか困り果ててしまった。

「すみません、両親が早くに他界してしまって、私あまり相手をしてやれないが故に我儘に……。ほらユレア、手を離しなさい。鍵乙女様が困っているだろう？」

二度目の叱責。しかしながら少女は手を離さない。両親を知らないが故の寂しさが、彼女をそうさせるのだろう。

「……仕方ありませんね。アノ様はここに残っていてくださいます

か？」

その様子を見て仕方ないと判断したのか、オルヴスはそう進言した。彼としては主たる鍵乙女の意志を尊重したいが、このままでは埒が明かないとの判断だ。

「え、でもオルヴス……」

「グリム」

躊躇いを見せるアーノイスを余所にオルヴスはグリムへと声をかける。

「いつてらっしゃいませ」

「はっ、そー来ると思ったぜ。お姫様が動けないんじゃ、お前が動く筈ねーもんな」

彼の意図を理解していたグリムはいつものように悪態をつきながらも、意気揚々と扉の方へ向かう。

「フェルの探知くらいなら貴方でも出来るでしょう？」

「なめんなっ。あいつらの気配くらい小物一匹のがさねえっての！ そんじゃ後でなユレアちゃん。鍵乙女のおねーちゃんに目一杯遊んでもらいな」

言って、グリムは一人家を出て行った。

「い、いいのですか？ 彼一人に行かせてしまっ」

予想外の展開に戸惑うクオンが何とかそう言葉を発する。

「大丈夫ですよ。振る舞いは雑ですが腕の方は確かです。それに彼は事戦いに関してだけは異様に頭が切れる。もし何かイレギュラーがあってもヘマはしないでしょう」

質問に答えながら、オルヴスは再び椅子に腰かけた。

「すみませんが、お茶のお代わりをいただけますか？」

「あ、ああ、はい。今お持ちしますね」

要求されてキッチンの方へ行くクオン。それに入れ替わるように、今度はアーノイスがオルヴスの前に立つ。片腕はしっかりと少女に捕まったままだが。

「ちょっとオルヴス、グリム一人に行かせて良かったの？」

掲剣騎士にフェルの討伐へ行かせる。形としては間違っていないが、引き受けたのが自分である為、何処となくバツが悪そうなアーノイス。

「アノ様こそ。ユレアちゃんを引き剥がして行っても良かったんですか？」

「それは……」

そんな彼女にオルヴスはいつも通り笑って言葉を返す。

「『鍵乙女に言葉は要らず。彼の者は心の声のみを聴き、その願いを叶う』。教会の聖書の一節でしたね。今回のそれにふさわしいと思います」

しかしながらアーノイスはまだ煮え切らないような顔をしたまま。オルヴスは一つ溜息を吐くと、ユレアには聞こえないようアーノイスの耳元で囁いた。

「貴方が此処に来ると言ったのはフェルを倒す為ですか？ それとも少女の願いを聴きいれたからですか？」

それだけを告げてオルヴスは席に戻る。丁度クオンが新しいお茶を淹れて持って来た。

「あの……鍵乙女さまっ」

黙りこんでしまったアーノイスの手をユレアが引く。

「どうしたの？ ユレアちゃん」

固くなってしまった表情を何とか和らげて少女の方へと向き直る。そんなことにも気付かない様子のユレアは笑顔で彼女に言った。

「一緒にお風呂入ろ！ 剣士のおにーちゃん、フェルなんかマツハでやっつけるって言ってたもん。きつとすぐ帰ってくるよ」

「マツハ……ね。そーね、うん。えーっと」

「あまり広くはないのですが……それでよろしければ」

浴室を使う許可を得ようと言葉を選ぶアーノイスにクオンが先だつて答える。

「お風呂はこっちだよおねーちゃん！」

兄の許可も得て元気が出たのか、狭い家の中を走り始める少女。

「あつ、ちょっと、そんなに引っ張らなくなつて大丈夫——きゃっ」

「ユレアー、ちゃんと浴槽を洗ってからお湯淹れるんだぞ」

「はーい」

クオンの言葉への返事はもう既に壁を1, 2枚過ぎた声だった。

「すみませんね。お茶も出して頂いているのに」

相変わらずのペースでお茶を啜りながらオルヴスがそう言う。

「いえ、フェルの討伐なんて無茶を頼んでいるのに、その上妹の我儘にまで付き合っていただいて……何だか申し訳ないくらいですよ」

クオンは苦笑いで頭を掻くのだった。

— 印 —

「えーっと、どうしよう」

クオン、ユレア兄妹の家の浴室。その脱衣場で、アーノイスは一人途方に暮れていた。

ユレアはというと、「おねえちゃん早く来てねー!」といったの間にやら服を脱ぎ捨て、早々に浴室へと消えてしまった。

アーノイスも了承はしたものの、ある事情により未だ衣服を脱げずにいる。

彼女は元々れっきとした皇族であり、着替えや風呂に至るまで世話役が側に居た事もあって、同性の前で裸になる事が別段恥ずかしい事ではない。それも相手は自分より一回り以上年下の少女である。これが少年であればオルヴスに任せた所なのだが、そうするわけにもいかず、流されるままに承諾してしまったのだ。

「ふう……仕方ない、わよね」

一呼吸吐き、身に纏っていたワンピースをはだける。純潔の真白い肌が顕わになる、と同時。その白い腕、足、身体に絡み付く赤黒い「紋様」が認識出来た。

これが、彼女が躊躇っていた理由。鍵乙女の烙印。門を開く為の鍵そのもの。通称「アヴェンシス世鍵」。世界にあらゆるものの開閉を自在とするその力は、神が与えし力だと言われている。過去の文献などにも烙印の紋様は確認されておらず、また知っていたとしても通常の霊呪術のように操る事が出来た人間は皆無で、何の力も発揮しないただの模様にしかないのだ。

アーノイスがこの烙印がされた裸体を人目に晒すのはこれが三度目。

一度目は、幼いある日、突如この烙印がなされた時に妹と母に。二度目は、教会の“巫女”に鍵乙女であるという照明をする為に。そして、今。

考え過ぎと言えはそうかもしれないが、それでも、彼女はこの身体を他人の眼に晒す事に抵抗があった。紋様は美しくも禍々しさも内包している形、色。

世界には己に霊呪術をかけ、力とする術もあると聞くが、そんな人間は彼女の知る限り一人だけで、その人物も今は彼女の心の中にしかない。

「君は、どんな気持ちだったのかしらね。チアキ……」

最後にそう呟いて、アーノイスは浴室へと入っていった。

「おねーちゃん遅いよー！」

既に浴槽に浸かっていたユレアが膨れた顔をする。

「ごめんごめん。ソーだユレアちゃん、こっちおいで。おねーちゃんが髪、洗ってあげる」

椅子を前に出し、ユレアを誘うアーノイス。少女はすぐに笑顔でその椅子に座った。

「シャンプーは、これね」

手にシャンプーをつけ、ユレアの髪を優しく洗い始める。

「ふーんふふーん」

鼻歌を歌いながら、上機嫌に足を踊られるユレア。

「私ね、妹が居て、ペルネっていうんだけど、昔はこうしてよく髪
の洗いっこしたのよ」

懐かしそうに目を細めながら手を動かす。

「鍵乙女さまの妹かあ、どんな人なの？」

「んーとねえ……しっかりもので、なんでも出来て、それですつごく可愛いよ。料理も上手で、特にお菓子作りはうちのパティシエが困るくらいだったわ。さーて、そろそろ流すわ。ユレアちゃん息止めてるのよー？」

言って、桶のお湯を被せて洗い流す。ユレアは小動物のようにぶるぶると頭を振って水気を飛ばすと、アーノイスの方へ向き直った。

「今度は私が洗ってあげるね！」

椅子を渡し、シャンプー片手に立ちあがる。

「それじゃあ、お願いしましょうか」

少女の申し出を断るわけもなく、アーノイスは椅子に座った。

「おねーちゃんは髪もきれーだね。あれ？ おねーちゃん、この赤くて黒いのなーに？」

小さな手で一生懸命アーノイスの長い髪を洗う最中、少女は烙印に気付いたようでそっと指で触れる。

「ひゃんっ！」

「わわっ、ごめんなさい！」

いきなり背中に触られて驚いたのか、悲鳴をあげるアーノイス。それに合わせてユレアもびっくりして謝った。

「ごめんね、ちょっとびっくりしただけだから。えっと……これはね、鍵乙女の印、なんだってさ」

「しるし？」

心の苦しさをアーノイスは表に出さないよう必死に声を絞った。この紋の異様さは誰よりも自分が一番よく知っていた。

「それとね……私の約束の形、でもあるんだ。約束って言っても、誰かとしたわけじゃなくて……いや、私としてはしたんだけど、うーんなんて言うかな」

全てはある幼き日の出来事。その出会いがなければ日々がなければ、自分の約束がなければ、今こうしていなかったかもしれない。そう、アーノイスは思い返す。

「鍵乙女さまの、大事なものなんだね」

そんな心の内を感じ取ったのか否か、わからないがユレアはそう口にした。

「そうね。今の私にとって、一番大切なのよ」

その言葉の端はどこか痛々しく、悲しげに聞えた。

―炎舞―

「フェルちゃんフェールちゃんっ、どっこかなあ」

その頃。フェル討伐を一人で任されたグリムは村の奥の森の中を探索していた。

意気揚々と己が大剣を振り回して闊歩する姿は、不真面目で不謹慎だが、本人は至って本気である。

誰よりも強く、何よりも強く、そうありたいと願う彼はその理由を「その方が楽しいから」と答える。強くなればもっと強い奴と戦える。彼はそう言い、故に度々、自分よりも強いと唯一認めているオルヴスに突如襲撃をする、なんて事も彼の中では不思議でも可笑しくもなんともない。

「おっ、この匂いは」

何かに気付いたらしく、今度は走り始めるグリム。そして、そのまま一本の大木の枝に飛び乗ると、視線を下方に巡らせあるいつてんで止まった。

「目標発見、てな」

まるで宝物を探し当てたかのように口元を歪ませる。その目にはフェルの一段が写っていた。

1mはあろうかという暗い青緑の体軀をした蜘蛛の姿をした群れ。その中心には熊とも獅子とも取れない、四速の巨大な獣が座り込んでいる。大きさは頭から尾までで10m、肩の位置は7m程だろうか。全身は燈赤の針のような毛に覆われ、尾は蛇のようで太く長い。目は赤、口からは紫の牙が除いている。

フェルの強さは基本的にその大きさに目測出来る。その場にいる蜘蛛程度の大きさ一匹で掲剣騎士一人と言った所。しかしながら中央に座す獣はもう大きさでは判断できないところまで成長している。フェルは喰らった命の数だけ強大になると言われ、ものによっては一体で国をも簡単に滅ぼすという。

「ひい、ふう、みい……あ、面倒くせ。取り敢えずちよいちよいいな。ちよいちよい」

フェルの数を数えていたらしいが途中で投げ捨て、立ちあがって大剣を肩に担ぐ。

小さなフェルが巨大のそれに近くに集まるのは不思議な事ではない。弱い存在は強い存在の庇護下にありたいと思うのはごく自然な事である。だが、彼らが他の動物らのようにそこで社会を形成しているのかは謎だが。

「あのデカイのは最後にとっておくとして……ま、取り巻きからやつちまましてうかね」

グリムの姿が枝の上から消える。

「グリム・ティレド、行くぜえええ！」

続き、天から絶叫。解放した霊力が火炎となりグリムを包む。そのまま、地表目掛けて落下した。

落下点の周囲に居た数体の蜘蛛が一瞬にして蒸発し、白い光の粒子が空へ逃げて行く。フェルは死んだとしても軀を残さない。光となつてただ空へと還るだけだ。

突然の襲撃者にフェル達は一步後ずさるも、それが人間——生命体だと認知するとすぐに牙を剥き出して金属が擦れるような声を上げた。

その中で一際、燈赤の獣が大地を震わせる咆哮を放つ。

「まあ待てよ。お前は後回しだっつの。まずは前座！ 行ってみようか！」

獣の咆哮に促されたように数体の蜘蛛がグリムへと飛びかかる。同時、炎の塊がそれらを“轢いた”。

一瞬にして獣の横を通り過ぎ、背後に回る。炎が解け、剣を担いだグリムの姿が顕わになった。先程居た場所からそこまでに、一本の灰の路が出来あがっている。

「遅すぎるぜえ、お前らちゃんと動けよなあ……でないと」

グリムの足元に再び業火が巻き起こる。瞬く間にそれは彼の身体を包み、まるで焰の鎧を作りあげていた。

「すぐに消し炭になんぜ！」

閃熱が駆ける。恐れを為さず飛びかかった蜘蛛が、グリム本体に触れることすら敵わず蒸発した。

急停止、急加速。その二つを繰り返し、フェルごとその場一体が焦土と化していく。

フェルは引く事を知らないのか、次々とグリムに襲いかかって行くも、その全てが次の瞬間には跡形もなく消え去っていく。

「おらおらどうした！ 楽しませろよお、弱い物いじめは趣味じゃねえんだが……っ！」

あくまで直進を続けていたグリムが突如後ろへ飛び跳ねた。そこへ振り下ろされる巨大な四指の鉤爪。

「ちょ、待っ、危っねえー。なんだよ、我慢しきれなくなったのか？」

火炎の鎧の一部を解き、眼前の自分と同じ色の瞳を見つめるグリム。彼が避けたその場所は獣の手により大きく破碎され、地割れが彼の足元まで及んでいた。

「だから待ってって言っただろ？　まずは前座の蜘蛛ちゃん達から……ってあれ？」

辺りを見回す、がそこに既に小型のフェルの姿は一匹もなく、残りは眼の前の獣のみとなっていた。

「なんだよ、ちょっとジョギングのつもりだったんだけどなあ。ま、仕方ねえか」

言って、戦闘はじまって以来、グリムがはじめて構えを取る。大剣を右手に肩に担いだまま、腰を落として左手を前に翳し、標的を睨む。

一方フェルも姿勢を低く保ち、いつでも飛びかけられる体勢に移っていた。

「いいねえ……百か？　二百か？　お前が喰った靈魂の数だよ。まあいくらだっていいさ。その分、俺様が楽しめる」

グリムの眼が爛爛と獣を睨む。闘争本能に染まり切った色をしてい

た。

音が鳴る。グリムの飛び火で燃えた樹が割れる音。それが、合図になった。

激突するフェルの爪とグリムの大剣。その衝撃と剣に込められた爆炎が辺りを包みこんだ。

—急襲—

「そういえばオルヴスさん。貴方は何故従盾騎士に？」

グリムが戦闘をはじめの数分前。

アーノイスとユレアが風呂に行っている為、オルヴスとクオンは大学の男二人がお茶を啜っているという何とも侘しい事になっていた。

「何故？ とはまた難解な問題ですね。鍵乙女は世界の要。それを唯一直接守る存在が従盾騎士です。世界の殆どが教会の教えを信じている中、そんな大役に憧れるのは普通の事ではありませんか？」

自嘲気味に笑いながらオルヴスは答える。その答えに、クオンは可笑しそうに笑う。

「憧れる、ですか……確かに従盾騎士というのは大きな名誉ですよ。腕に覚えのある者なら、あるいは英雄を夢見る少年なら、皆がこぞって目指すでしょう。でも私には、貴方がそのどちらでもなく見え、また貴方が鍵乙女を守りたいと思っているようには見えない。今の答えもそうです。貴方は鍵乙女ではなく……アーノイス様を守りたいのではないのですか？」

クオンの穿った言葉にオルヴスは笑みを崩さず、また返答もしなかった。その無言が肯定なのか否定なのか、はたまたそのどちらでもないかはクオンも測り切れなかった。

「鍵乙女様は本来、門を巡る旅をするのをまず第一にし、それ以外の補佐。そう、今回のように民衆が求める助けの為に教会があるのでしょうか？ まあ、この村に教会はありませんから、私達に実感は

ないのですが……。それでも、世界がそういう仕組みなら、いくら直接頼まれたとはいえ、こんな小さな村に足を運び、あまつさえ村人の少女の願いまでも聴いてしまう。教会には鍵乙女という存在からさらに“女神”なるものまで存在していると教えがあるそうですが……」

「アノ様の行動がおかしいと？」

話しの続きをオルヴスが引き継ぐ。しかしその台詞をクオンは笑って否定する。

「違いますよ。最も、つい先程まで私は鍵乙女様というのはもっと機械的なのとか……私達とはまるで違う未知の存在だと思っていましたが、実際にお会いしてみたところ、基本的には私達とそう変わらない人間に思えます。だから、頼まれごとを引き受けるのも、少女の我儘を聞き入れてくださるのも、おかしいとは欠片も思わない。変だとすれば、どちらかといえば貴方の方ですかね」

クオンはあくまでオルヴスの方に話を持って行きたいらしい。目の前に従盾騎士という世界に一人しかない人物がいれば当然の反応とも言えなくもない。

「鍵乙女としての彼女の意志は今グリムさんがお一人で行かれたフェルの討伐の方になりました。しかし、貴方はアーノイス様自身の意志を確かめた上で現在の措置を取った。そこが少し気になっただけですよ」

言葉を切って、彼はお茶を口に運んだ。

「良く見ていますね貴方は。まあ、そうですね。僕の事に関しては

ご想像にお任せします、とでも言っておきましょうか」

クオンの鋭い言葉に対してもはつきりとした返答も態度も示さず、オルヴスは受け流す。そう言われては仕方がない、とクオンも諦めたよう。

「それにしても、グリムさんは大丈夫でしょうか……フェルは一体でも戦いの術を知らない人間たちでは相手にならない。ましてや、あの森にはフェルが群生している。そんなところにお一人でなど」

「グリムは強い。元々持つ強大な霊力に加え、特異な体質まで持ち合わせている。精霊クラスのフェルでもない限り死にはしませんよ」
言って、オルヴスはカップを口元へ運ぶ——否、運ぼうとして止まった。

「どうかしまし——うわっ！」

大きな地震が起きたと思われる程の揺れがクオンの言葉を遮る。カップが音を立てて揺れ、紅茶が零れる。

「なにっ！？　どうしたの！」

風呂からあがってきたアーノイスとその足にしがみつくユレアも驚いた表情で窓の外に何かを探す。そんな中、揺れがおさまったのを確認し、一口お茶を飲んだオルヴスが何でもないと言うように答えた。

「グリムが戦いはじめましたね……それと」

オルヴスの視線が窓の外を眺め、そしてクオンへと移る。彼は絶望した表情で顔を抑えていた。

「フェルが村の近くまで来ていますね。結界が見破られましたか」
それだけ言ってオルヴスは席を立つ。

「アノ様はお二人をお願いします。数体が近くにいますが、まだ村には入って来ていないようです。僕が片付けてきましょう」

「おにーちゃん……」

事態の重大さを感じ取ったか、ユレアが兄の元へ近付く。クオンは額に脂汗を浮かべたまま、無理矢理笑顔を作って妹の頭を撫でた。

「大丈夫さユレア。鍵乙女様に従盾騎士様がいるんだ。何も心配は要らないよ」

クオンにしがみ付くユレア。

普通の人間ではフェルに太刀打ちできない。小さいものが一匹ならまだしも複数。村の近く、となれば出来る事は隠れるか、逃げるか。

「待ってオルヴス、私も――」

守らないと。そう思ったアーノイスが振り向いたが、そこに既に従者の姿はなく、不作法に開け放たれたままの扉が小さな音を立てて揺れているだけだった。

—魔狼—

「これは……なかなかの大きさですねえ……」

村はずれの一角。フェルの気配を感知したオルヴスは単身、その眼前に立ち尽くしていた。

彼の前に立ちはだかるは四体の巨人。足や腕は大木のそれよりも遙かに太く、頭は天に届こうかという程。その頭頂には各々一本なり二本なりの角が生え、頭髮は一切なく、肌は青銅、双眸は丸く孔のように白く瞳がない。手や足の先には人のものとは思えぬ爪が生え、全身に黒褐色のボロ布のようなものが巻かれていた。巨大な鬼。一言で表すならそれが最も正しいと思える。

「まあ、何でも良いですけどね」

鬼は既にオルヴスに気づいている。それでも尚、彼は普段の様相を崩さず、静かに標的を見据えた。

次の瞬間、鬼の一体が大きく吹き飛ばされ、倒れる。先程までその鬼の顔面があった場所に、黒い影——オルヴスが立っていた。靈力を足場として固め、立っているのだ。

「ふむ……この程度では割れませんか」

右の拳を握り開き、感触を確かめるように呟く。それを隙とみた他の鬼の手が彼を捕えようと伸びる、が。それらは全て虚空を掻いた。オルヴスの姿は既に倒れた鬼の顔面の上にあり、先程の攻撃など何事でもなかったかのよう。

右腕を引き、拳を作る。手には淡い光を纏わせ、視線は足元の鬼の

眉間へ。

「まず一つ」

振り下ろされる拳。粉塵が空を覆う程に舞いあがり、地面が陥没する。鬼の頭は脳漿ごと飛び散り、その身体は光の粒子となって天へと帰った。

「おっとこれは……やり過ぎましたね。村が無くなってしまいます」
瞬間で移動し、元に鬼と相対していた場所に戻る。

「オルヴスー！」

と、背後から声。

「アノ様？ 何故ここに」

戦闘中である事を意識していないのか、普通に振りかえるオルヴス。アーノイスはクオンの家から全力で走ってきたのだろう。息が上がっており、肩で呼吸をしていた。

「何故じゃないわよ……全く、貴方がフェルなんかと戦ったら周りが、って、オルヴス危ない！」

砂塵の向こうから二人に迫る影。視界を埋め尽くす程の大きさの腕がオルヴスを叩き潰さんと襲いかかる。

オルヴスはそれを振り向きもせず片腕で止めて見せた。生じる空気の圧に吹き飛ばされそうになったアーノイスをもう片方の手で捕まえて引き寄せる。

「大丈夫ですか？」

「う、うう……全くもう……ほら見なさい！ 貴方が戦うと周りが大変になるのよ！ いい、すぐに隔離するから！」

宣言してオルヴスの腕を離れるアーノイス。そして。

「隔絶せよ！ 風を絶ち、地を隔て、世界を閉じよ！ パレート・オフェリア！」

オルヴス、フェルらの足元に突如刻まれるタウ十字型の閃光。それらの頂点が結ばれ、立ち上る光の壁が天の果てまで昇った。薄い光の膜がオルヴス達を“隔離”している。

「これでよし……。さっさとやっちゃいなさい！ オルヴス」

鍵乙女の烙印はあらゆるものを開閉する力を持つ。これは、己が指定した範囲の空間を他の空間と隔絶し、閉じる術。その証拠なのか、自らに刻まれた烙印の内、左腕の印を仄かに光らせるアーノイス。服の上からでも十分にわかる光だが、門での儀式の際程ではない。

「ええ、勿論ですよ」

だが鍵乙女の業は強力であるが故に心身への負担が重い。それを知らぬオルヴスではなかった。

「少し、本気でお相手させていただきますよ」

鬼の方へ向き直り、いつも崩さなかった笑みを消すオルヴス。同時に彼の周囲の空気が歪む。そして、その歪みから生まれ出ずる漆黒の、炎とも水とも風とも取れぬ不定形の黒く濃い靄。それは一瞬の内にオルヴスの姿を包み――霧散した。

中から現れたのはオルヴスその人、の筈であるのにその姿はつい先ほどまでの彼とは似て非なる存在。

背中まで伸びたたてがみの如き、逆立つ銀の髪。肌は闇よりも黒く変色し、指の先には深紅の鉤爪。両頬には白い逆さ十字の刻印が浮かび上がり、目は満月をはめ込んだかのような黄金色をしていた。

「……魔狼」

その様子を遠目で見ていたアーノイスが思わず呟く。何者にも屈せず、与せず、ただ唯一、己の意志でのみ彼女に着き従う孤高の存在。彼のその姿を知る教会の人間には“魔狼”そう呼ぶ者も少なからずいる。見る者の畏怖を刻みつけ、敵と認識された存在は二度とその姿を現す事はない。

三体の鬼が、銀灰の魔狼の放つ威圧感を感じ取ったか、地を震わす咆哮を上げた。

音圧で地面が割れるような隔離世界の中、オルヴスの姿が消える。声が、途切れた。

アーノイスの眼にはオルヴスが消えたその瞬間から気付かなかった。見えたのは、隔絶された空間の向こうで、三体の巨人の内の一体が消滅するその光景だけ。

いくつもの寸断された鬼の両腕両足胴体頭部。どうやったのか、なんてはじめて魔狼を目の当たりにしたアーノイスは聴いたものだが「爪で切っただけですよ」なんて当然のように青年は応えており、

それ以降彼女は彼の強さについて疑問を持つのをやめた。

彼がそうしたのだから、そうなのだ。それしか彼女にはわからない。

残り二つの鬼の背後に現れたオルヴスは、無造作に静かに、右手を左胸の前に翳した。

空間に突き立てられる五指の爪。硝子か何かに爪を立てた時と似た不快音を鳴らしながら、ゆっくりと爪が虚空を裂く。

刹那の間を挟み、彼の眼前が“分断”する。それはそこに立っていた筈のフェルも関係なく、閉ざされた世界の中をただ六つに断ち切った。

為す術もなく千切れ崩れ、空へ帰るフェルを見て、アーノイスは術を解いた。

術を行使した反動でふらつき、地面に転びそうになるも、その身体はいつの間にか傍らに辿り着いていたオルヴスの手に支えられていた。

「あ、ありがとう……」

いつの間に魔狼の姿から戻ったのか、顔を上げたアーノイスの前にいるのは、いつもの笑みを浮かべた彼女の従者の姿であった。

「いえ。アノ様こそ。わざわざ術を使っていたくだなど……お手数をおかけしてしまって」

「いいのよ。大体、結界もせずにあんなのされたら私が巻き添えで死んじゃうわっ」

体勢を整えるのに取っていた手を話して毅然と言い放つアーノイス。少々の無理は押しているが、ずっと彼の手に支えられたままなのは

恥ずかしい、というのが本音である。

それをわかっているのかいないのか、オルヴスは辺りを見回しはじめる。

「……静かですね。グリムの方も終わったのでしょうか」

「さあ？ そのうち戻ってくるでしょ。さ、ユレアちゃん達のところに帰りましょう」

そう宣言して早々に歩を進めるアーノイスにオルヴスは数歩遅れてついて行った。

―異変―

一仕事終えた故の達成感からか、アーノイスは何処となく上気した顔でユレアの家の前まで来ていた。

それに対し、オルヴスは彼女の後ろで顎に手を当てて何か考え事をしている。彼の感知能力はまさに狼の嗅覚の如く敏感で、探知可能な範囲も常人のそれとは格が違う。

故に、本来ならば村にフェルが片足を突っ込む前にその存在を感じ取る事が出来るのだが。今回はそれが出来なかった。気を抜いていたわけではない。かといって結界のせいかと問われるとそうでもない。事実、結界の外で戦闘を始めたグリムの霊力は知れたのだ。人間やその他の動物と違い、自分の霊力を制御せずに垂れ流しにしているフェルの存在を見紛う事など、これまでオルヴスには経験がなかった。

「……………」

そんな彼を無言で見つめるアーノイス。

視線に気付いたオルヴスが、笑顔で相對する。

「どうかなさいましたかアノ様？ 黙ってこちらを見つめたりして」

「べっ、別に見つめてたわけじゃないわよ！ ただ……貴方今日ちよっと変じゃない？」

冗談めかした、いつものおどけりにも素直に反応してしまうアーノイス。いつものように微笑の煙に巻かれるかと思いきや、今回はそうではなかった。

息を一つ吐いて真剣な眼差しを向ける。

「おや、気付かれましたか」

当然、とでも言うように腕を組み自分の従者を睨んだ。

「何？　なにか気にかかる事でもあるの？　言ってみなさい」

話を聞いてあげる、なんて優しさのある雰囲気は微塵もなく、自分がこうして気付いているのに秘密にするなんて許さない。そんな台詞が聞えてきそうな形相であった。

「やれやれ……敵いませんね」

流石に観念したのか、オルヴスが苦笑混じりに口を開く。

「いえ、少々違和感のようなものを感じただけですよ。フェルの存在を意図的に隠されているような……そんな、ね」

「クオンさんの結界の力じゃなくて？」

「それでしたらグリムの霊力も感じられない筈です。だが、彼の炎の匂いは感じられる。アノ様にもわかると思います」

目を閉じ、少しの間をおいてからアーノイスは頷いた。

「そう、ね……でも、ここで話しても仕方ないわ。そうでしょ？」

少し逡巡する様子も見せたが、ふっ切って家の扉に手をかけるアーノイス。彼女とて気にならないわけではないし、むしろ質問を投げかけたのはアーノイスなのだが、そこはそれ。主従の主であるが故

に彼を引っ張って行くという意志の表れでもある。

それをオルヴスも感じ取ったのか、何も言わず、彼女の後に着いて行こうとし――駆けた。

「下がってくださいアノ様！」

突然眼前にオルヴスが現れるのは慣れがあるとはいえ、尋常ではない雰囲気の中で平穩を許さない。

息を呑み、言われるがまま扉から手を離して数歩後ずさるアノイスを確認し、オルヴスがドアを蹴破った。

「――っ！」

オルヴスの肩越しに室内の様子を垣間見たアノイスが、声に鳴らない悲鳴を上げる。

朱。赤。そして黒。

木製の柔らかな家の質感など、そこには欠片も残っていなかった。彼等が先程までくつろいでいた筈の空間を染め上げる色は、血、肉、死の色だった。

「馬鹿な……」

オルヴスが驚愕の声を上げる。その黒い瞳に写るのは青紫色の豹に似た化物。無情な鉛色をした双眸、その下の鋭利な牙の羅列に貫かれているのは、紛れもなく、彼らをここに誘った少女の、首。もはや食い散らかされた後だったのか、首から下はもはや、確認出来る形では存在していない。豹の顎と前足に生々しく残る血だまりに恐らくは肉片と思われる何かが散在、もしくは小さな肉塊として転がっているのみだ。

飽きたのか空腹を満たしたのか、豹は死に首をオルヴスらの方へ無造作に投げ捨てる。為すがままにゴロゴロと彼の足元まで転がってくる様はまるで作りの悪いボールの様。

アーノイスが恐る恐る覗き込んだ“少女”は、恐怖と絶望の表情を凍りつかせた瞳を彼女に向けていた。

アーノイスは震えた。人の死を見るのはこれがはじめてではない。だが、それでも何度そんな場面にあっても、慣れる事は彼女には出来なかったからだ。ましてや、自分を頼ってくれた少女の。固まる身体を、戦慄く唇を、アーノイスはゆっくりと動かす。

「……ディエ……」

「アノ様!？」

「下がりなさいオルヴス!」

悲鳴にも似た叫び。だが、その声は震えていて尚、有無を言わさない噴気を放っていた。

「……ディエ・オフエロア」

紡がれる言霊。呼びかけに応じ、鍵乙女の烙印が光を放つ。

光が彼女の身体を離れ、九つの光球となり、扇状に展開された。

「消えなさい!」

紫の獣を見据え、右手を翳す。九つの球体は各々を光条として発し、標的を一瞬の内に包み込む一本の光流となり、貫いて尚突き進む。前方にあった標的を家屋ごと消し飛ばし、地を抉り、木々を消失さ

せる光の矢。

光の放出が数秒程続いたと思われる頃、突如として光は消え、アーノイスはその場に膝を着いた。

「はあっ……はあ、はあ」

先程烙印の力を使った時は比べ物にならない程憔悴した顔で、額には汗を浮かべている。
巻き込まれないよう退避していたオルヴスがその隣へと現れた。

「アノ様っ、大丈夫ですか！」

珍しく焦燥を隠さずにオルヴスがアーノイスに声をかける。
彼女は手を借りて立ち上がり、自身が消し去った前方の遥か先までを見るように目を細めた。

「やった……かしら」

「……ええ。アノ様のお力です」

オルヴスの言葉を聞いて彼女は再び崩れ落ちる。床に倒れないよう支えるオルヴスに、アーノイスは呟く。

「ごめん……オルヴス。ちょっと、休む、わ……」

そう言葉を絞り出し、彼女は意識を手放した。

―火葬―

「これで、最後ですかね」

村の中心となる広場。そこに一人立つオルヴスとその眼前にうず高く積まれた百体程の死体の山。それは全てこの村の家々から出てきたものだった。どれもまだ新しく、つい先程命をフェルに命を奪われたと思われる者達の骸。百体、とはいったがそれも概算で、中には原型が留められておらず一体として判別できなくなってもものが少なくなかったからだ。

「ふいー、全く、鍵乙女様の力っていうのはすげえな。やりすぎじやねえか？」

オルヴスの背後からグリムがやれやれと言った様子で歩いて来る。フェル討伐から帰ってきた彼にオルヴスは、先程アーノイスが放った烙印の術がどこまで届いたかの調査を頼んだのだった。

「向こうの方の山が一つなくなってたぜ。フェルは一匹だったんろ？ お前がやった方がよかったんじゃねえかオルヴス」

「貴方だって森林に穴開けてきたでしょう。人の事言えた義理じゃありませんね」

「村の端っこ陥没させた奴に言われたくねえっつの。まあ……そんな心配も時既に遅しってか」

やるせなさを吐きだすように唾を吐き、オルヴスと共に前方の死体の山を見つめるグリム。その視線にはこれまでのようにふざけた感

じはなく、少しの憂いを帯びていた。

「……僕のミスです。フェルの気配を感じ取る事が出来ないとは。気が抜けていたのかもしれませんがね」

オルヴスはそう言って、額を抑える。少女の頼みを果たしにここまで来たというのに、結果、その少女すら助ける事が出来なかったのだ。

「俺達、何をしにこの村に来ちまったんだかな」

そんなオルヴスより前に出て、死骸達の前でしゃがみ込む。

「こんなものしかなかったけど、ねえよりマシだろ」

言って、グリムはポケットから小さな一輪の赤い色が鮮やかな華をひとつ手向けた。

「アノ様にこれを見せるのは辛い。グリム、頼みます」

踵を返し、アーノイスを寝かせている馬車の方へ向かうオルヴスがそうグリムに告げる。

村の全ての人間が殺されていたというのに、自分達の馬車馬だけが死んでいなかったというのは、何という皮肉だろう。

「……ああ」

言葉を受けてグリムは立ち上がり、担いでいた大剣を地面に刺す。そこから走る火炎が地を走り、死者達を円形に囲む。

「ごめんなユレアちゃん、熱いだろ。せめて綺麗に葬ってやるから、少しだけ我慢してくれな」

立ち上る葬火。いつもグリムが起こす火の荒々しさはそこにはなく、ただ静かに、時折吹く風に少しだけ揺れる。誰が見ているわけでもないというのにその炎は厚く、空へ送られて行く死者達の最後の姿を隠しているようでもあった。

やがて遺骨までも灰と為し、グリムは火葬を終え、村の出口にて待つオルヴスの元へと戻るのだった。

「御苦労さまですグリム」

「やめてくれよ。俺は、何も出来ちゃいない」

「……そうですね」

振り向き、来た時とほぼ変わらない筈なのに暗く写る村を眺めるオルヴス。だがそれもすぐにやめ、馬車の手綱を引いた。馬が一声鳴き、その歩を進めはじめる。

「行きましょう。もう、僕達に出来る事はありません。彼らの靈魂が安らかに眠るのを願うだけです」

そう宣言するオルヴスにグリムは何も返さず、彼らは無人と化した村を後にした。

―消失―

オルヴス達が村から見えない所まで離れた頃。火葬が行われた現場に一人の男が立っていた。

長身痩躯で髪は短く、若草のような翠色をして、顔の半分を覆い隠す真鍮色の仮面をしている。

「あのクラスのフェルでは不足か……魔狼と謳われるだけの事はある」

深く、落ち着きのある声で独りそう呟く。

「ですが、呪印^{カース・イヴォル}交霊を使っているようには見えませんでした」

その声に女の声が反応する。男の周りには誰もいないのに、だ。

「もう隠れずとも良いぞ……ユレア」

呼びかけに応えるかのように、男の隣の空間が黒く裂け、巨大の鎌の刃が覗く。続いて、その鎌を手にした美女が現れた。先程までこの村に居たユレアと同じ名前、髪の色。だが、その姿は成年に達すると思われる女性のもので、左の眼には眼帯をしていた。彼女は持っていた鎌を片手で一度回し、再度裂いた空間の中にそれをしまいこむ。

「お前にも視えなかったとなると、本当に使っていなかった、ということか。恐ろしいな魔狼。して、あのグリムとかいう剣士の方はどうだった」

「詠唱もなしに火靈術を起こす力はかなりのもので、荒削りながら元来の靈力もかなり強いと思われます。術の方は己の靈力をそのまま火と為している、と私は見ました」

感情の消えたような表情と声で、淡々と言葉を並べるような話し方だ。

「その“眼”でか？」

言って、仮面の男はユレアを、その眼帯の奥を指差す。女はそれに頷きで答えた。

「ならばそうなのだろう。それにしても……ククッ」

喉の奥で笑いを押し殺してユレアを眺める。

「どうかなされましたか？」

変わらない精巧な人形のような顔で疑問符を浮かべるユレア。男は一つ嘆息して視線を逸らした。

「幼いお前も可愛らしったが、やはり今の方が美しいな」

「お、お戯れを……」

てらいもなくそんな事を述べる男に、ユレアは頬を少しだけ染めて下を向く。

「それに加え『おにいやーん』だものねえ、あなたのご主人様もイチコロだったかしら？」

と、二人の背後から一人の成熟した、眼鏡をかけた女性が現れ、さらにその背後には顎に髭を蓄えた壮年の大男。双子らしき砂色の髪をした少年と少女が手をつないで着いてきていた。

「貴様ら見ていたな。まあいい。首尾はどうだ」

女のふざけた調子にはあまり付き合わず、そう告げる仮面の男。

「ちゃんと見てきたよ！ えーっとねーボク達のところはおっきな門があつてー、そのすぐ近くでずっと騎士が見張ってたよ！ ねー？」

「ねー！ あ、それとその前の街は検問が厳しかったの！ ねー？」

「ねー！」

質問には真っ先に双子が答えた。快活で騒がしい様子だが、男は別段気にした風でもない。ただその簡単な報告の内容を頭の中で推察しているようだった。

「ワシのところに騎士はおらんのだ。世界の護る“門”ってのは随分と杜撰な警備じゃのお」

続き、大男が簡素な説明をする。

「あたしの所も同じ様なものね。全く、か弱い女性をあーんな山奥に行かせるなんて。ご主人様ったら鬼畜じゃなーい？」

同じく眼鏡の女もそう答えたが、言葉を終えるか終えないかの間に、その細い首には鈍く光る刃が添えられていた。

音もなく現れたその凶器に仮面の男と鎌の保持者を除いた三人が驚愕する。

「主への愚弄は許しませんよ、ナツ」

氷のように冷たい殺気を帯びた台詞を放ち、いつの間にか手にしていた鎌の刃を一層近くナツと呼んだ女の首に近づけるユレア。

「止さんかユレア。おぬしは少々気を張り過ぎじゃ」

止めに入る大男。しかしユレアは今度はそちらに鎌の先端を向ける。

「私に命令して良いのは主だけです。それをお忘れなきよう」

その眼は冗談や虚勢は含まれていない。次に何か言えば問答無用でその刃を振り翳す、そんな気配を隠そうともしていない。

「ユレア」

しかし、その様子は彼女の“主”の一声でおさまった。すぐに鎌を闇へと戻し、主の前に跪く。

「はっ」

「お前の気持ちは嬉しいが、少しは我慢を覚えてくれ。良いな？」

「申し訳ありません」

仮面の男は薄く笑みを浮かべながらそれだけ言い、ユレアを立てさせた。様子から仲間同士でありながらこの一触即発の雰囲気。リーダ

ーとおぼしき仮面の男もそれはわかっているだろうに、特に責めた言い方はしていなかった。

「やーれやれ。ユレアちゃんはロリっ子のまんまの方が可愛げがあったんじゃないー？」

「そう言うなナツ。ユレア嬢は心配性なだけじゃて」

「心が広いのねボーヴおじさんは。心配性って言うか、どっちかって言うとメンヘラでしょー。ま、そこが可愛いところもあるし、だからこそいじりがいがあるのよねえ」

「やめておけやめておけ。お主じゃユレアにはどう足掻いても勝てまいて」

「自分なら勝てるとも言いたそうね？ お、じ、さん。まあでもやめとくわ。怒らせると怖いもの。怒られるのはあたしもやーよ」

「怒られるその前に切り刻まれるのがオチじゃて」

「うわーん！ ごめんユレアちゃん！ もういじらないから許してえ」

好き勝手にお喋りをはじめた二人だが、当の本人たるユレアはどこ吹く風で目を閉じ黙っている。そこへ双子が走り寄ってきた。

「ユレアさんユレアさん」

「ユレアさんユレアさん」

同時に呼びかけられ、ユレアは腰を落として双子と目線を合わせる。

「どうかした？」

纏う雰囲気は冷静平然としたままだが、口調だけは少し柔らかい。

「えっとね……ケンカはダメだよ」

「仲良くしよーよ……ね？」

先程の不穏な空気を間に受けてしまったらしく、どこか悲しそうな四つの目がユレアに請う。

「ええ。わかってる」

それは双子の意を汲んだ答えなのか、主に今さっき言われたからなのか。

「じゃ、約束！」

「約束！」

双子が突き出した小指に両手で答えて指きりをした。

「……さて、戯れはこの辺りでいいか？」

それぞれの様子を眺めていた仮面の男がそう告げる。皆が話を止め、彼の言葉を待った。

「では、行くとするか」

パチン、と指を鳴らす。同時。村が“消失”した。まるでそこにははじめから何も無かったかのように家屋や火葬され

た者達の灰までもが消え、何もない原っぱへとその姿を変えた――
否、戻した。

「次はどちらへ？」

「そうだな。“時紡ぎの魔女”も見ておきたい」

「了解しました……クオン様」

その台詞を最後に六人は歩き始めた。
消えた村跡に風に揺れる、赤い手向けの華だけを残して。

少年と死神

それは、今は遠い幼き頃の記憶――。

少女は泣いていた。

村はずれの小高い丘。宿を飛び出した少女が偶然見つけた場所で、村からそう遠くはないけれど、誰もいなくて静かな場所。少女はその場所で独り、泣いていた。

少女は怯えていた。漠然と自分に押し掛かる未来に。己の両肩に覆いかぶさる人々の期待、希望、憧憬その他畏怖と尊敬と願望を織り交ぜた祈りが怖くて仕方が無かった。どうして自分にそんな目が向けられるのを少女はよくわかっていた。ほんの数カ月前までは自分もただ祈るだけの人々の側に居たのだから。だが。実際に自分自身がその役目を負う事になって初めて、自身の想いが如何にその当人を苦しめるのかを知った。

けれど、逃げられない。それをわかっていたから、少女は独り、この場所で泣いていた。誰もいないとわかっていても声を殺し、涙の痕を残さないよう必死に隠しながら。

「何をしているんだい？」

と、少女の背後から人の影が伸びてくる。突然現れた影と声に少女は悲鳴を上げる事も忘れて思わず飛び退き――転んだ。

「あ、ごめんなさい。えっと、大丈夫？」

それは少女とそう変わらない背格好の少年であった。村の人ではない事はその漆黒の上等な生地を使った衣服を見ればわかった。村の子供はもっと動きやすそうで汚れても構わなそうなものを率先して

着せられていたから。少女が咄嗟にそんな事を思うのは、羨望の眼差しが宿の窓から村の情景を覗いていたからだ。そんな彼女の想いの中で、彼はどうにもちぐはぐだ。

「な、何ですか貴方は。何者です!？」

目尻に残る涙を強引に拭って、毅然とした態度で少年に相對する少女。それが虚勢である事は誰の目にも明らかだったが、少年は恭しく一礼を返し、笑顔で言った。

「これは失礼しました。僕はチアキⅡヴェソルⅡウィジャ。ウィジャ家の嫡男です。チアキとお呼びください」

「え？ 貴方が……」

名乗りを上げた少年に思わぬ反応を示した少女は、しまったと言わんばかりに自分の口を両手で塞ぐ。この場所は彼女にとって独りで独りの少女で居られる唯一の場所だった。だから、相手の名前に聞き覚えがあってもそれを言ってしまったら、また少女の居場所はなくなる、そう思ったのだ。

そんな彼女の事情を知ってか知らずか、少年は少女の行動を怪しまず、丘から覗く森と村の風景を眺めながら口を開く。

「いい場所ですね。ここは。静かで、風も心なしか柔らかい」

「そ、そうね……」

追及が無かった事を良しとし、少女は少年の話に合わせた返答をした。頭の中では、自分の正体がバレていないか、先程までの泣き顔

を見られていないか、そればかりが気にかかっていた、というのが事実だが。

「ですが、そろそろ日が暮れます。村からそう遠くはないとはいえ、少しばかり森を歩かないといけない。暗くなる前に帰った方がいいと思うけれど」

「あ、貴方が帰ったらね」

少年がどうしてこの場所に來たのかは謎だが、もし一緒に村に帰った時に教会の人や従者などに会ったら素性が割れて、この場所も知られてしまうかもしれない。それだけは絶対に避けたかった。

「それは困る……僕はもう少しこの場所に居ないといけない。だから、先に帰った方がいい」

しかし、少年は少女の思惑通りには動いてくれない。けれど、彼がしばらくここに居る用事があるというなら、早々に帰った方がいいか。そう思った、矢先。

「それじゃ、私は帰るわ。ええと、チアキ、だったわね。貴方も早くここから――」

台詞の続きを、少女は忘れてしまった。音もなく、突如として現れた“それ”のせいだ。

彼女も話には聞いていたが、実物を見るのははじめてだった。そいつは少年の背後で、無機質な目を彼に向けながら、木々程もあろうかという大きな身体を浮かせていた。

「ひっ――！」

「おや、これは……困ったな」

人骨のような頭部。その下は黒紫色の霧のようなものに覆われ、そこから人間の骨と思われる両腕がだらんと伸びていた。足はないが、代わりとでも言うように背中からさらに二つの腕、計四本の腕がそれにはあった。

死神。そう少女は思った。まるで本の中に出てくる死神そのものにそれは見えた。

腰を抜かし、地面に座り込んでしまう少女を余所に、少年はそんな異質な存在を目の当たりにしても、先程までと変わった様子を見せない。ただ少しだけ考えるように小首をかしげている程度だ。

「えっと君、早く逃げた方がいい」

「に、逃げるって言っても……」

少年はそう言うが、少女は既に全身が恐怖に震えて指一本動かせずにいる。言葉を喋れたのが奇跡だったくらいだ。

「……仕方ないな」

死神が咆哮を上げる。少女はもう生きた心地がしていなかった。フェルは人を襲う、化物。それは地震や雷等の自然災害と同じで、あってしまっただけは人間にどうにもできない相手だと、そう教えられてきたからである。

だが、少年は違った。そんな天災を前にしても平然として、自分の何倍もの大きさを誇る死神をジッと見つめていた。

「大丈夫。僕が守るから」

少年の言葉を皮切りに、フェルの四本の腕が、少年を捉えんと動き出す。突き出された手が地面を砕き砂塵を巻き上げた光景を最後に少女は目を瞑った。

耳を塞いでも、死神の咆哮が響き渡る。自分が消えてしまうように縮こまる少女。怖くて怖くて何も考えられなくなる。少女は祈ろうとした。だが、そこに祈るべき存在は居なかった。何故なら、その役目は、祈られるのは自分自身とされてしまったから。絶望する。縋るものがないというのはこんなにも寂しくて恐ろしいものなのだと。少女は改めて実感した。

「デイロデクト」

そんな中。少女の耳にはっきりと、少年のそんな呟きが聞えた。意味のわからない単語。発音も聞きなれないその言葉。だが、その響きはどこか彼女を安堵させた。

同時、先程よりも一際大きな轟音と突風が巻き起こった。座り込んだままでそれに耐える少女。

風が止んで少しすると、少女はもう、死神の叫び声が聞こえなくなっていることに気づき、恐る恐る目を開けた。

「大丈夫？」

「わっ、わわっ！」

視界に入りこんだのは少年の黒い双眸。驚いて悲鳴をあげながら立ち上がって距離を取る。

「ぶ、無礼者！ 私を驚かすなんてどういっても、り……」

「よかった。立てるみたいだね」

朗らかに笑う少年。呆氣に取られ、辺りを見回す少女。そこに、先程まで居た筈の死神の姿はない。

「あ、あれ……さっきのは……」

「安心して。もういないから」

少年のその言葉に少女は再びへたり込んでしまう。

「もしかして、貴方が」

「うん、そう。本当は人が気付かない内に済ませるように言われてたんだけど、参ったな、見られちゃったね」

信じられない気持ちで少女は少年を見上げた。黒くて綺麗な髪に同じ色の瞳。珍しい色だが、自分と歳も変わらなそうな少年が、先程の化物と戦った事は簡単に頷けない。けれど、でなければ自分は今生きていないだろう。先程の事を夢だと思うには流石に都合が良過ぎる。

「んーと、この事は秘密にしておいてくれなかな？」

困惑する彼女を余所に少年は何やら話を進めていた。どうやら、少女と遭遇したのは偶然だったらしい。有り得ない状況なのに努めて普通の、それもどこか控えめな少年の言葉に少女は笑った。

「ええ、良いわよチアキ。その代わり、私がここに居た事も秘密ね」

そう交換条件を出して約束を交わす。別にそんな事をわざわざ言わなくたって、彼が言うようには思えなかったが念の為だ。

「さ、帰りましょ。暗くなると危ないんでしょ」

先程の恐怖はどこへやら、少女は軽い足取りで先を進む。
と、ふと思いついたように少年の方へ振り向いた。

「そういえば、さっきの言葉、なに？」

絶望の中でも確かに聞えた少年の言葉。それが気になっていた。

「さっきの？」

「ディ……なんとか」

ああ、と得心がいったように少年が頷く。

「ディロデクト。古い言葉で“護りたまえ”って意味なんだってさ。
詠唱だよ」

「ディロデクト（護りたまえ）、か。いい言葉ね」

気に行ったようにその詠唱を反芻する少女。そんな彼女に少年もまた質問を投げかける。

「あ、そういえば君の名前、聞いてなかったんだけど」

「えっと……そうね、アノって呼びなさい」

「そうね、って名前じゃないの？」

「名前よ。いいから貴方は私をアノって呼ぶの。いい？ わかった？」

「わかったよ、アノ」

それが、アーノイスとチアキという少年の出会いだった。

世鍵 ―アヴェンシス―

「……ここは」

アーノイスは目を覚ました。写るのは先程までずっと見ていた馬車の幌ではなく、白に複雑な文様が施された部屋の天井。なんて事はない。今はもう慣れ親しんだ、現在の鍵乙女アーノイスの部屋だった。全体的に白く清潔感のある色調の部屋で、床は紺色のカーペット。その他今彼女が横になっているベッド、クローゼット、一組のテーブルとチェアが完備され、生活には困らないが簡素な部屋であった。それもその筈。鍵乙女は一年の殆どを世界の門を周る旅を続けている為、この部屋で寝起きする事はそうない。

「いつの間に着いたのかしら……」

部屋の窓から外を眺める。空は青く日が高い。眼下には広大な街が広がっていた。セパンタのような乱雑な巨大さではなく、整備された道に整頓されたように立ち並ぶ建物。建物自体も四角く整えられている。

アヴェンシス教会総本山。自治都市アヴェンシス。アヴェンシス教会が最初に建てられた場所で、千年の月日の中で多くの人が集まり、自治をはじめたのが期限とされている。今となっては大国の首都並みの巨大さを誇る世界最大級の都市の一つだ。

アーノイスはその街の中心に位置する、城と見まごう程の大きさの始祖教会グロリアの最上階の一室に居た。そこは代々の鍵乙女が過ぐすとされている部屋で、当代の鍵乙女他は巫女と従盾騎士以外、立ち居る事の出来ない場所だ。無論、彼女がいない間の管理は修道女達がやっているのだろうが。

ここに来てしまった以上勝手には動けない。考えなしに教会の下に降りてしまえば、瞬く間に信者に囲まれてしまうからだ。それを知らぬアーノイスではない。

ベッドの端に腰を下ろし、そのまま上半身を横に倒した。

「また、あんな夢……」

先程まで繰り広げられていた過去の鮮明な光景を思い返す。もう、記憶の中でしか会う事のない少年。

「……デイロデクト」

彼に教えてもらった古い言葉。そして。

『護ってくれるって、言ったのにー!』

彼を思い出す度に脳裏にリフレインする、幼き日の自分が泣き叫ぶ声。アーノイスは横になったままでその声を振り払おうと頭を振った。

「デイロデクト。ウィジャ家の扱う霊呪術で、霊力を極限まで凝縮、定着させる事によって他の物理、霊力問わず障断する光と為す。維持には多大な霊力消費が掛かり、術を発祥した当家ですら扱える者は少なかったという……だったかな」

そんな彼女の横に、いつの間にか金髪の童女が居た。ぶかぶかの白衣に身を包み、首からは教会のタウ十字のネックレスを首から下げている。何かを思い出すように指を顎に当てて斜め上を眺めていた。

「め、メルシアっ！　いつから居たのよ！」

その存在に全く気が付かなかったアーノイスはベッドから飛び起きると、その少女――メルシアの前に仁王立ちして睨みつける。

「なんだ。烙印術使って目が覚めない鍵乙女を看病して上げてたというのにー」

だがメルシアはそれに驚くでもなく頬を膨らませて臍を曲げた。

「あ、ああ……えっと、ごめんなさい」

「うむ。わかればよろしい」

アーノイスの謝罪の言葉に、尊大に胸を張る少女。既に成年間近の女性が年端も行かない少女へ、素直に頭を下げているというのはなんとも珍妙な光景ではあるが、それも致し方のない事。

それは鍵乙女、従盾騎士そして巫女しか立ち寄る事の出来ないこの部屋に居る事もそうだ。

鍵乙女アーノイス、従盾騎士オルヴスそして巫女であるのが彼女、メルシアだ。

巫女は鍵乙女の補佐、世話役としての役職、というのが名目だが、それは建前。メルシア本人は基本アヴェンシスを離れない上に、教会発足して以降、巫女となったのはメルシアのみだからだ。『巫女メルシアは千年の時を生きる魔女』と、教会は公表していないが、噂話は世界に知れ渡っている。事実、彼女の知識の量は尋常ではなく、教会の最高議会である審判団ですら知りえない事を“記憶”している。

一節には初代鍵乙女の旅路にも加わっていた仲間だとも言われ、世界の行く末を見守っている、と言われているが、真実は定かではな

い。

「呼吸脈拍霊波動に異常無し、と。問題なしだ」

アーノイスが寝ている間に検査術をかけたのか、そう言って部屋の出口まで行くメルシア。

「もう動き周っても大丈夫。私は研究室に戻るから。何かあったら読んでくれ。それじゃ」

「あ、待ってメルシア」

アーノイスの呼びかけも時既に遅く、メルシアは光に包まれて部屋から完全に消えてしまう。瞬間移動。彼女が自ら術式を組み上げて作り出した霊呪術の一つだ。巫女はいつも始祖教会地下にあるという通称研究室にて、世界中の文献などを読み漁っては、新たな術をつくりだす研究に没頭している。

「あー、もう」

溜息を吐き、眉尻を下げるアーノイス。だが、ここに居てもやることはない。教会に呼び出された理由をメルシアから聞いたかったが、当人は教会地下。鍵乙女でも瞬間移動の術は知らない。

「オルヴス……どこに居るかしらね」

いつもいつも側にいるが、巫女が居たからか、彼女の従者の姿は見えない。

最低でも街の中にはいるだろうから、彼女がここで彼の名前を叫べばすぐに飛んでくるのだろう、が。

アーノイスはそれをせず、自分の足で部屋を出て行った。用はある、が今は旅の時とは違い安全な教会内。加えて緊急でもないのに彼に足を運ばせるのは気が引けたのだ。

鍵乙女の部屋は教会の最上階に位置しており、部屋を出てすぐ長い螺旋階段が続く。一つの小さな塔を下りたかと思うくらいに階段を下ってようやく、広い廊下に出る事が出来る。

とはいえこれも基本的に立ち入りが許されているのは大司祭クラスの間で、今はオルヴスが使う従盾騎士用の部屋とまるで使われていない巫女の部屋、そして禁書が保管されているという巨大な書庫しかない。書庫にアーノイス自身入った事がないのでわからないが。

そんなわけで、その階で唯一入った事のあるオルヴスの部屋の扉をノックする。

二回。無音の廊下にノックの音が虚しく響き渡るが、中の部屋からは返事がない。まあ、オルヴスが入れば部屋の扉に触れる前に気配を察知して出てくるのだから、ノックが出来た時点でアーノイスは期待していなかった。

「んー……街中行っちゃったかしらね……」

彼の事だから、大方旅の準備を整えているのかもしれない。もしくはグリムに突き纏われて災害という名の訓練を修練場で繰り広げている可能性もある。従盾騎士という立場なのだがどうにも教会の教えに熱心というわけでもない、とアーノイスは見ている事から、礼拝堂もないだろう。

「修練場、行きますか……」

若干気落ちした声でそう呟く。本当はこの部屋、もしくはせめてこの階に居てくれればよかったのだが、ここから下にいくとなると、下に進む程人と会う事が多くなる。となれば、そこにいるのは敬遠なる信者達で、まさに聖書の体現者たる鍵乙女はすれ違う人見かける人全てから声をかけられてしまう。それが、アーノイスは未だに苦手だった。元々王族であるのだから、周囲からの視線は慣れている筈、と彼女自身思っていたが、こればかりはどうにもならない事だった。

再度軽い溜息を吐き、階段を下っていくアーノイスだった。

―始祖教会―

「あ、ああ、鍵乙女様！ お目覚めになりましたか」

ああ、ほら来た。

アーノイスは心の中でそう愚痴る。心配してくれるのはありがたいが、行き過ぎても困るものだと思つづく思う。

事、彼女の目の前に現れた、ティレド大司祭については。

大司祭、という名の通り彼は教会の審判団以下の全組織の総括（事内政方面で）を担っている人物で、真面目で実直、信仰心に厚い信者のお手本のような存在と民衆に認知されている人物であるが、アーノイスの評価も全くの同意見だった。

「驚きましたよ。ダズホーン団長が急遽鍵乙女様をこちらへお呼びするよう通達されて、その上到着した貴方様が従盾騎士オルヴスの背に乘せられておいでになるものですから。ともかく、ご無事で何よりです鍵乙女様」

捲し立てるように心境を吐露した後、恭しく一礼する大司祭。

「大司祭様の祈りが私に届いたのやも知れません。ご心配をお掛けしました」

それに鍵乙女として返答するアーノイス。それはもう手慣れた様子だった。

「それでは失礼致します」

「あ、ああ、お待ちになってください！」

会釈をして通り過ぎようとするアーノイスを大司祭が呼び止める。

「グリムの奴を見かけませんでしたか？ 報告書を出すよう言っているのにもう三カ月分も放ったらかしでして……」

心苦しさと怒りがないまぜになっている表情を見て、アーノイスは笑いそうになるのを堪えた。

ティレド大司祭、との名前通り、彼はグリムⅡティレドの父でもあるのだ。上司としての怒りと父としての怒りが混在しているのだろう。

「見ていませんね。見掛けたら伝えておきましょう」

「そんな、鍵乙女様のお手をわずらわせるなど！」

「見掛けたら、ですから。期待はしないでください。それでは」

「あ、ありがとうございます。お引き留めして申し訳ありません」

大司祭であつたり信者であつた父親であつたり、忙しい人だとアーノイスは思いながら、その場を後にした。

その後も司祭や修道女、礼拝に来ていた信者の人々から拝まれ会釈を返してはを続け、頬が引き攣って来た頃、ようやくアーノイスは目的地だった修練場へとやってきた。

修練場とは、主に教会傘下の掲剣騎士団クァイターが日々の鍛錬に使う場所で、新人の掲剣騎士は皆一度ここに集められて二年の鍛錬を終えた後、各地の教会へと派遣されるようになるのだという。修練場は全てで十一あり、始祖教会の一階にそれぞれがかなりの広さを誇って設置されている。

その中でも一つ、特別修練場と呼ばれる場所がある。

それが現在アーノイスが辿り着いた第十一修練場だ。他の修練場と違うのはまず、天井がない、つまりは屋外に設置されている事が一つ。通常の二倍の広さとなっている事が一つ。さらに地面は石造りで舗装されているのだが、そこに巨大な呪印が組まれている事だ。防破と修復の呪印。通常の修練場にそんな大層なものはない。では、何故ここが特別そうになっているのか。理由は簡単だ。使うと必ず修練場を完膚無きまでに破壊する人物が現れたからだ。それも二人セットで。

掲剣騎士同士や世界各地の強者が集まっただけの闘技大会でも使われるその場は、周囲をぐるりと囲う高所の見物席があり、アーノイスはそこから修練場を覗く。下手にその二人が居て、万が一訓練をしているとなると、巻き込まれてしまう恐れがあるからだ。

だが、その心配には及ばなかった。

セットの内一人はいるが、もう片方はいない上に戦っているわけではなく、場内の中心で何やら立ち話をしているようだ。

一人は赤髪の青年、グリム。それに応対しているのは先程大司祭が口にしていた、掲剣騎士団団長、ダズホーン。精悍な顔立ちに鋭い眼光。無精髭は頭髪と同じ深い茶色をしている。筋骨隆々とした体躯で、腰に剣を差し、羽織っている銀のマントには黄金のタウ十字が大きく刻まれている。それが、全掲剣騎士を率いて立つ男の姿だ。

どちらにせよ、彼女にはあまり関係ない。オルヴスがいらないのなら、グリムに大司祭からの伝言を伝えて行こう、と思い観覧席を降りようとする――が。

「そうか。その村は全滅していたってのか」

重く響く男の台詞に、アーノイスは固まってしまった。

―訓練―

「ああそうだよ。誰一人生きていなかった。ユレアちゃんも、クオンも、俺達以外はな……」

修練場の中央でグリムは叫ぶ。それを聞く男は、眉ひとつ動かさず、黙して静かだが鋭利な視線を向けていた。

「俺が弱いからか？　俺の強さが足りないから死なせちゃったのか？」

独白に近い後悔の言葉を吐くグリム。数瞬の沈黙を挟み、ダズホー
ンが口を開く。

「じゃあお前がフェルを倒せたのは何故だ？　お前が奴らよりも強かったからだろう」

「俺がもっと速くに倒せていれば助けられたかもしれない！」

「その場にはオルヴスが居た筈だ。お前の理論じゃ、オルヴスを責めるのが筋になるんじゃないかねえか？」

苦しげに心の内を叩きつけるグリムに比べ、ダズホーンは酷く落ち着いた様子で答えていた。

「あいつは鍵乙女を護るのが仕事だ。俺とは違う」

「そうだな。お前は掲剣騎士だ。世界中の人間を守る兵士の一人だ」

「ああそうさ！ でも守れなかったんだよ！」

「なら村に留まってフェルがやってくるのを待てばよかったってか？ それだとなグリム。お前の過去の二の舞だ」

ダズホーンの言葉にグリムが苦渋の色を一層濃くする。先程のように叫び返す事も出来ずにただ嘯み締める。

「先にフェルを叩きにいったお前も、鍵乙女を最優先にしたとてオルヴスも、間違った判断はしてねえ」

「じゃあ、なんで……」

力なく項垂れるグリム。

一瞬の隙。そこを突き、ダズホーンの剣が抜かれ、一閃がグリムに襲いかかった。

響き渡る金属同士の衝突音。確実にグリムの首元を狙った刃は、いつの間にか抜き放たれていた彼の太剣が防いでいた。

「……何の真似だ」

憤怒に包まれたグリムの押し殺した声と共に、火炎が彼を包み込む。

「お前は強い。このオレよりも確実に。オルヴスもそうだ」

「何が言いたい」

突如斬りかかれた事と不明瞭なダズホーンの台詞にグリムは苛立ちを隠さずに、呼応して炎がその勢いを増した。

「お前がその村の外で待機していたとしても、他の家の人間は殺されていたかもしれねえ。無理矢理オルヴスを連れて二人で外に出ていた時にゃ、鍵乙女も守れなかったかもしれねえ。まあ、オルヴスはそれだけはしねえだろうが」

「んだよ。俺は頭は良くねえんだ。わかりやすく言いやがれ」

「だから守れなかったんだ」

爆炎が巻き上がる。修練場の殆どの空間を包む程の炎が撒き散らされた。

「ダズホーンてめええ！」

怒り一色に染まったグリムの雄叫び。

「お前の悪い癖だ」

それに混じり、冷ややかな声が、彼の背後から届いた。己の内にある霊力を高め、灼熱から身を守るダズホーン。

「お前は一つしか見ていない。見えていない。そして冷静さを最初から捨てる」

後ろを取ったにも関わらず、先程の様には斬りかかってこないダズホーンに、グリムは何もせずただ言葉を待った。

「頭を使いやがれグリム。出来る出来ねえじゃねえ。出来なきゃ守れねえ。いいか。驕るな、見誤るな、違えるな。お前程の強さがあればあらゆるものを守れる。だが、力は強さだけじゃねえ。それを

忘れるな」

数秒の静寂が流れ、霊力の放出が収まったのか、グリムの起こした火炎が風にかき消される。

「お前と奴の違いだ。奴は鍵乙女を守る。お前はごまんといる人々を守る。あいつを追いかけただけじゃお前はこれ以上“強く”はなれねえ」

「ケッ。わーったよ」

「何がだ」

「あんたの言ってる事は相変わらずわかりづれえ」

「そうか」

先程までの怒気は既に落ち着いたか、グリムはいつものふざけた調子に戻っていた。

にも関わらず、再度大剣の先をダズホーンに向ける。

「でもあれだな。やっぱり、俺は戦わないとどうにももやもやしちまう性質らしい」

言って、剣の先に軽く炎を纏わせる。ダズホーンはやれやれと息を吐いたが、グリムの要請に答え剣を構えなおした。

「まあいい。たまには付き合ってやろう」

「鍛錬をするのは構わないですけどね」

二人の間に走る緊張と裂帛の気合の糸を気にも留めず、オルヴスがそこに割って入った。

街で買い物をした帰りに寄ったらしく、両手いっぱい紙袋を抱えている。

「少しは周りを見てからはじめて頂けますか」

言って、見物席の方を振り返るオルヴス。つられて視線を動かす二人の目に、アーノイスの姿が写る。

「大丈夫だってー。何の為にあのロリババアがここに術かけてると思ってるー」

グリムの言葉を遮り、オルヴスが彼の背後の方向を顎で指す。アーノイスが居たのと反対の見物席——がある筈の場所。そこは明らかに炎の焼け跡となっており、席の一部が完全に焼けて大穴が開いていた。恐らく、先程のグリムの暴発させた炎によるものだった。

「いやびっくりしましたよ。買物から帰ってきたら大司祭様にグリムを連れてくるよう頼まれて、靈気を頼りに修練場に来てみれば……」

オルヴスがいつもの笑みを一層深くしてグリムを見る。だが、その眼は欠片も笑っていない。

「僕の主人がこんがり焼けてしまうところでしたよ」

「あ、あはは……すげーなオルヴス。流石だぜ！ いやホント、鍵乙女様も無事で何よりだった……つうか……ごめんなさい」

「ダズホーン団長。これ少し預かって頂けますか？」

半ば押しつけるように紙袋を渡し、グリムの前に戻るオルヴス。

「訓練の邪魔をしてしまったようですねグリム。お詫びと言っては
何ですが、僕がお相手しますよ」

言い切り、その姿を黒い“魔狼”のものへと変化させる。ダズホー
ンは荷物を受け取ったまま、大人しく見物席の方へと下がって行っ
た。

「えっ、ちょっ、何でいきなり本気モードっ」

「安心してください。“訓練”ですよ」

「待て待て待てジャスタミニッツ！」

「聞えませんかええ！」

消える黒い影

同時にグリムの眼前に現れ、襲いかかる五本の爪を大剣が受ける。
しかし勢いまでは殺しきれず、中空に跳ね飛ばされるグリム。

「オーケーオーケー……いいぜ、やる気なら好都合だ！」

珍しく戦うつもりのある攻撃をオルヴスから受け、たちまちグリム
のテンションが跳ね上がる。

「喋ると下を噛みますよ」

背後に回ったオルヴスが一声かけるとともに蹴りを落とす。ガードした剣ごと地面に叩きつけられ、土を巻き上げる。

「お前もなあ、余裕ぶっこいてると……消し炭になんぜ！」

落下点から土煙りを払い、炎の柱が立ち上りオルヴスを包む。だが。

「遊んでるつもりですか？」

意にも介さず、炎渦を振り払い、黒い影がグリム目掛けて落ちる。しかしあたらず、突きだした左手が砕けた地面にめり込み、修練場全体がひび割れる。

「まだまだあ！」

その隙を突き、グリムが肉薄する。振り下ろす大剣と払う爪がぶつかり、粉塵を払って拮抗、弾けて離れた。

「いいぜいいぜ……上がってきた上がってきたあ！」

グリムに呼応して炎の鎧が形成される。対するオルヴスも、己の両手に青白い霊力の光を纏わせた。

同時に飛び出す青黒と燈赤の閃光。爪と大剣を振りかざし、衝突を繰り返しながら天に上がる。二つの力が激突する度に巻き起こる衝撃波が大気を吹き飛ばし、辺りを震わせる。

もはや常人には光の残滓も映らない程の速度で攻防を繰り返す二人。

「ダズホーン団長！ 止めなくていいの!？」

反対側の見物席からやってきたアーノイスが、買物袋を脇に置き、座って戦いを見届けるダズホーンに問う。彼女には戦う二人の姿は見えておらず、絶えず巻き起こる衝突音と衝撃の突風に耳と髪を抑えていた。

「たまにはいいでしょう。オルヴスは滅多にグリムの奴の相手をしてくれませんか」

そんな鍵乙女の様子を見ても、止める事はしない様子のダズホーン。アーノイスは諦めて、その横に座り、見えもしない戦いを窺おうと目を凝らす。

「……今どうなってるの？」

しかし見えないものは見えならしく、黙して二人を見守るダズホーンに問いかけた。

「……グリムが右腕に三発、左腕に二発、両足に五発、頭部に一発の打撃を喰らっています。オルヴスはまだ被弾なし。火は受けているが効果がない」

「よく見えるわね……にしても、ここで戦ってるのを見ると、昔を思い出すわ。いや、見えないんだけどね」

ダズホーンの説明を受けて、自分の従者が優勢なのが少々喜ばしいか、少し微笑んでアーノイスが言う。

「闘技大会の事で？」

「ええ、そうよ」

従盾騎士を決める為に開かれた闘技大会。もう数年も前の話になる。圧倒的な戦闘力で優勝を果たしたのはグリムであった。しかし、彼は優勝すると直後に現れた一人の青年の決闘を受けて、今、この場で行われているような人外の戦闘を繰り広げた後、その青年に敗れ、従盾騎士の座を快く譲ったのだった。

「決闘に勝ったからとはいえ、突如現れた侵入者を従盾騎士として任命するなど、こちらとしては度肝を抜かれましたがね」

「その事について文句は言わせないと、あの時言った筈よ」

その現場に立ち会ったダズホーンは勿論、大司祭も審判団も、侵入者――オルヴスを従盾騎士とする事を良しとはしなかった。だがそれをアーノイスは強引に認めさせた。

当時はオルヴスに対する批判の声が後を絶たなかったが、彼の圧倒的な実力、柔らかな物腰、そして何より彼女アーノイスに対する忠誠を診て、人々は彼を従盾騎士として認識するようになっていった。

「あいつは強い。それだけは確かです」

「あら、そんなの当然よ。私の騎士ですもの」

そう、アーノイスは言い切るのだった。

―行程―

散々グリムに“訓練”を施したオルヴスは、アーノイスと共にダズホーンに呼び出され、始祖教会掲剣騎士団会議室に赴いていた。アーノイスも目が覚めたので、彼らを旅から呼び戻した用事を話すとの事だった。

「一週間程前、セパンタの次のコルストの町、その門のを警備していた掲剣騎士が襲撃された」

教会の関係者を狙った襲撃。一昔前で有れば、門の民衆への認知が足りなかった事もあり、事件は良く起きていたらしいが、ここ数年は特に報告はなかった。

世界に棲む人間が門の必要性を認識しているからである。門の効力が薄い所では未だに教会の教えに反発を示す者たちもいるらしいが、教会はそれほど問題視していない。

「それだけでなく、セパンタを除いた門でも不審な人影を見たという報告も上がってやがる。ルナギオル“世門”がどうなっているかは知らんがな」

世門。初代鍵乙女がはじめに造ったと言われる門で、世界で最も孤独と言われる無人の孤島、レツアーンにあるとされている最古最大の門。鍵乙女の旅路の行程には含まれず、現在は象徴としてあり、存在は教会上層部のみの秘匿とされ、島にはメルシアのかけた強力な結界が施されているという徹底ぶりである。

「で、まずは世門の調査から――」

「いつてええええ！　メルシア！　慣れてねえのに消毒液とか使うんじゃないよ！　目に入ったらうが！」

「グリムがじっとしてないからじゃないか！　って、あ！　取るなグリム！」

「うっせえ！　こんなだったら自分でやった方がマシだったーの！」

「その二人に行ってもらおうと思ったんだがな……」

騎士団団長に呼ばれた筈なのだが、怪我の治療をしながら何故か痴話喧嘩をはじめている巫女と騎士。

団長殿は呆れて物も言えない様子。オルヴスは考え事をはじめ、アーノイスはまだ喧嘩を続ける二人をぼうつと見ていた。

「私がやると言ってるんだ。素直になるんだ」

我儘を言う子供――姿も子供だからそのまんまなのだが――のようにグリムが高々と持ち上げるガーゼと消毒液に飛びかかろうとするメルシア。

「どうせならお得意の呪術でパパッと治してくれよなあ。わざわざこんな使わなくなつてよお」

「なんだ治癒術が使いたいのか？　君に素養は多分ないが、術式は組み方だ。私が手取り足取り教えてやろう」

「いやそれだったら普通に救護班に頼むわ」

「むっ、それはダメだ!」

消毒液が入ってしまい、若干涙ぐみながらグリムはメルシアの両手から逃れようと両腕を高々と上げながら悪態を吐く。

「なんでだよ! お前に消毒液点眼されるよりは万倍マシだ!」

「そんな事言って救護のこの女の子に手を出す気だろう!」

「出さねえよ! お前は俺を何だと思ってんだよ!」

喧騒は絶えず続き、終わりそうもない。当てられたアーノイスが流石に見ているのも飽きてきた頃、ようやくオルヴスが口を開いた。

「世門の方は団長にお任せします。アノ様、僕達は先にマイラに向かいましょう」

「マイラに? ヘイズじゃなくて?」

襲撃があったと言うコルストに直接向かうのでは得策ではないと判断したオルヴスは、アーノイスに、順番でいえばコルストの次の次に当たる、普段の順番で言えば最後の門がある町だ。ヘイズはその前。

「ええ。一つ飛ばしでマイラに向かった後、ヘイズ、コルストと向かう事にしましょう」

門のある場所は全てアヴェンシスとほぼ等距離に存在し、五角形を描いている。故にアヴェンシスから各門への接続はあまり変わらない。一度戻った以上、次への経路が一直線ならばどこからへ行こう

と問題はないのだ。

「オルヴスがそう言うなら……問題ないですね？ 騎士団長」

オルヴスの提案に従い、ダズホーンに確認を取るアーノイス。

「それが得策です。しかし先遣隊をマイラへ向けて置きましょう。何かがあるか、わかったもんじゃない」

「頼みます。では、僕は失礼します。マイラへ向かうと成れば、砂漠を越えなくてはなりませんからね。準備をしてきます。出発は明朝ということだ」

「待つてオルヴス。私も行くわ」

宣言し、会議室を後にしようとするオルヴスにアーノイスが続く。

「構いませんが、街中に出る事になりますよ？ よろしいので？」

「私が行くって言うてるの。しっかり警護しなさいよね」

不遜にもそう言い切るアーノイスにオルヴスは苦笑を返した。

「承知しました。では、参りましょう」

そうして、二人は会議室を後にした。

― 舞踏 ―

――深夜。

アーノイスは一人、鍵乙女の部屋を抜け出して昼間も足を運んだ第十一修練場へと着ていた。

昼間、オルヴスとグリムが散々破壊したその場所は、仕掛けられた巫女の術により、元通りの姿に戻っている。とはいえ、人気のない深い夜、月明かりだけが頼りのこの時間帯の風景は、どこか寂しげに映った。

羽織っていた外套を落とし、アーノイスは徐に二三步前へ出て、両腕を水平に広げる。

浮かび上がる、全身に刻まれた世鍵の烙印。夜という薄暗さが、その白い光をより一層際立たせる。

そして――彼女は踊り始めた。

その昔、まだ王女だった時に教養として習っていた舞踏。別段、アーノイスに思い入れがあるわけではないが、彼女は時折、殊更ここアヴェンシスに居る時はこうして夜、誰もいない空間を使い、言葉に出来ない想いを踊りにしていた。

烙印に霊力を通して浮かび上がらせるのは、鍵乙女としての試練に耐える為の鍛錬として、自主的にしている事だ。

鍵乙女の烙印術は、その身体に膨大な負担がかかる。この間の村での一件でもそうだ。ただ一つ烙印術を使っただけで、彼女は昏睡し、いつの間にか馬車に乗せられ、同じくアヴェンシスの自室に寝かされていた。

これから先、いつ烙印術を使う事になるともわからない。その度に倒れてオルヴス達に迷惑をかけるのは彼女の望むところではない。そうでなくとも世界を巡り続ける旅は消して楽なものではないのだ。アーノイスは、彼女が鍵乙女であると自覚したその時から、時間があれば身体と術の鍛練をしてきた。

緩やかに、時折激しく、静かに、時折荒々しく乙女は踊る。

世界を救う、鍵乙女。人々を護る、鍵乙女。それを背負うのは、選ばれてしまったたった一人の少女。

目の前の村一つすら、何も出来ず人任せで、結局は護れなかった。後悔と懺悔と憤りを、彼女は舞いで表す。

やがて少女は踊り疲れ、その動きを止めた。

膝に手を付き、上がった息を整えようとする。汗が滴り落ちて地面に染みをつくる。それを拭いてもせずに顔をあげ、まだ荒い息のまま真っ直ぐに背後の見物席の方向を見据えた。

「……そこにいるんでしょ。オルヴス」

「おや、気付いていましたか」

声を掛けられた事に驚きもせず、真っ暗な見物席からオルヴスが出てくる。近づき、持っていたタオルと水をアーノイスに渡した。

「まあ、貴方の部屋の前通るから……気付かれないとは思ってなかったけどね」

それを受け取りながら、特に咎めるつもりはないと告げるアーノイス。

「というか、居るか居ないか見えなかったし……ありがとう」

グラスの水を飲み干し、汗をタオルで拭いてオルヴスに返す。

「でも、黙って見物してるなんて趣味悪いわ。別に見ても面白いものじゃないわよ」

「すみません。ですが、アノ様の舞いは動きには命が籠っていて、見ていると心が安らぐんですよ」

面と向かってそんな事を言ってるのけるオルヴスに、アーノイスはそっぽを向いて上気した頬を隠した。

「本当、貴方は時々何を言ってるのかよくわからないわ。大体、出発は明日の朝でしょ？ 寝て置いた方がいいんじゃないかしら」

「それはアノ様も同じなのですが……」

「私はいいのよ。別に起きなくたって気付けば馬車の中に運ばれてるんでしょうから」

「あ、はは……」

「でも、そうね。毎度毎度女性の寝込みを襲うのは感心しないわ」

「え、だってアノ様、起こされるとものすごく機嫌悪いじゃないですか……」

困ったような顔をして頬を掻くオルヴスを見て、アーノイスは笑っ

た。いつもいつも余裕のある笑みを浮かべているくせに、少しからかうと素直な反応を返してくる彼との他愛のない会話が、彼女は嫌いではなかった。

「冗談よ冗談。いや、感心しないのは本当だけど……ともかく、貴方がそういう事しないのはわかってるわよ」

悪戯な笑みを浮かべてアーノイスはオルヴスの横を通り過ぎて教会へと向かう。

「湯浴みは準備出来てるの？」

「ええ。今頃ちょうどいい温度になっていると思われます」

「そ。御苦労さま。お休みなさいオルヴス。明日もよろしくね」

「おやすみなさいませアノ様」

背を向けたまま、主人が教会の中へ戻っていくのを礼をして見送るオルヴス。

扉が閉まる音がして、ようやく彼は顔を上げた。そのまま数秒。そしてその顔から笑みを消した。

「黙って見物なんて趣味が悪い——だそうですよ？」

と、夜闇に向けて独白する。同時、オルヴスの背後の空間が裂け、鈍く光る刃が彼に襲いかかった。

半身逸らすだけでそれを交わし、振り向くオルヴス。そのすぐ横には巨大な鎌の刃が地面に深々と突き刺さっていた。

「寝込みを襲うのも失礼だそうですが」

「貴方は女性ではないし、眠ってもいないでしょう」

空間の裂け目から、冷ややかな女性の声が返る。そしてゆっくりと、その割れ目から大鍊を手にした女が現れた。

「気付かれていたとは。魔狼の二つ名は伊達ではありませんね」

女は鎌を抜き、回転させて闇に消すと、碧色の隻眼でオルヴスを写した。左の目は眼帯に覆われて見えない。

「奇跡的な再会だというのに随分な挨拶ですね、ユレアちゃん——いえ、ユレアさんと呼びました方がよろしいですか？」

「……何の事でしょう」

無表情を崩さずに平然とそう答える女をオルヴスは鼻で笑う。

「姿形は変える事が出来ても、靈気だけは変えられない。そういうもののなんですよ。まあいい。それで？ 何の用ですか」

オルヴスの問いにユレアは黙秘を通す。その代わりに彼を値踏みするかのような視線を、足元から頭頂までを一瞥した。

「やれやれ、黙っていられると困ってしまうんですがね。お冷で良ければすぐにお注ぎしますよ？ 喉も潤えば舌も滑りやすく——」

カース・イヴォル
「呪印交霊」

そそくさと水の準備をしようとしたオルヴスをユレアの言葉が止める。オルヴスに顔から笑みが消えた。

「どこでそれを？」

「答える義務はありません。貴方も、呪印交霊をされていると聞きましたので。本日はそれを確かめに参りました」

「も、という事は貴方の知り合いの方も施されているので？ 人の事を言えた身ではありませんが、あまり利口とは思えませんね」

そう、オルヴスが言葉を切るとほぼ時を同じくして、ユレアが大鎌を闇から振り抜き彼の首を狙う。

咄嗟にオルヴスは左手での防御を試みる、が、刃が触れる寸前でそれを止めて身を屈め鎌を避けた。

「これは……！」

「主への愚弄は許しません」

「その鎌……魔具ですね」

「答える義理はありません」

特別な儀式により造られた道具が、世界各地にはあるという。その中でも特に強力な術が掛けられているものを神具または魔具と称す。それらは単体で膨大な霊力を内包しており、時にはそれを巡り国同士の戦争にまで発展するという、それだけの力を持つものなのだ。

ユレアはその魔具である鎌を、オルヴスへと突きつけた。

「そういえば一つ、問いたい事があります」

「呪印交霊の事とアノ様の事以外でしたら、何でも」

そんな状況であっても尚、オルヴスは余裕のある態度を崩さない。
しかしユレアも気にせず言葉が続けた。

「貴方は何故、鍵乙女を守るのですか？ 名誉だからですか？ 力が有り余っているからですか？」

その台詞に、再びオルヴスは苦笑する。馬鹿馬鹿しい、と一笑に伏しているようにも見えた。

「残念ながら外れです。ですが正解はお教え出来ませんね」

「そうですか……ならば」

言って、ユレアは右手で鎌を盛ったまま、左手を眼帯に宛がう。

「視せて、いただきます」

そのまま、眼帯を剥ぎ取ろうとした、その時だった。

「あーらあら。駄目よおユレアちゃん。それは使っちゃだーめ」

そんな、妖艶な女の声が夜闇に響き、オルヴスとユレアの間に白い
何かが落ちる。

「きゅきゅ?..」

距離を取った二人の間で、そのナニカは、小動物のような愛くるしい鳴き声をあげ、オルヴスを見た。

猫とも犬とも狸とも取れない、白い饅頭に動物の耳をくつつけたような頭。目はつぶらで小さな丸い赤。口元は線一本で書かれているだけにも見える。何かのマスコットに誰かが書いたようなそんな顔。だというのに、その頭部はオルヴスよりも遥かに高い場所にあった。

「きゅきゅきゅ？」

何故か疑問符を語尾につけた鳴き声でオルヴスを見下ろすそれ。異様なのは、その位置にある顔を乗せている体軀だ。

彫刻のような造り物の白さの人間の身体。細身ながら妙に筋骨隆々とした身体が、無駄に愛くるしい頭部を乗せている。

「どーお？ あたし自慢のクッキーちゃんよ。可愛いでしょ？」

「……可愛い、ですか。カルチャーショックです」

クッキーという名前らしい謎の生物の真上に、眼鏡をかけた女が一人。新たな侵入者を睨みながらも、オルヴスは“可愛い”と称された謎の生命体がどうも気になり、視線が上に下にと移動した。

「ナツ！ 貴方がどうしてここに」

「あーらあ、怒っちゃやーよユレアちゃん。貴方のご主人様の命令で来たんですもの。『ユレアが無茶しそうになったら止めてくれ』って。やーん、愛されちゃってるー」

仲間のユレアに若干の殺意を向けられながらも、ナツはふざけた調

子を崩さず、今度はオルヴスへと視線を戻す。

「というわけだから色男さん。うちの可愛い盛りのユレアちゃんとの密会はこちらまでって事で。クツキー、帰るわよ」

「きゅきゅー！」

主人に命じられた謎の生命体が、快活な返事をしてユレアを肩に乗せて上昇し、ナツが反対側の肩に立った。

「それじゃあね。アデュー！」

「きゅきゅー！」

オルヴスにウインクを見せて、二人と一匹の侵入者が飛び去って行く。それを追う事もせず、オルヴスは彼女らが夜空に吸い込まれて行く様をじっと眺めていた。

「……いや、本当に……カルチャーショックとはこの事ですね」

あれが本当に現在の常識で可愛いと言われるのかかし——などなど、ぶつぶつと疑念を呟きながら、オルヴスは落として割ってしまったグラスの後片付けをはじめたのだった。

—ひとり—

始祖教会は、その大国の城並みの大きさ故か、中に有している浴場も相当な広さがある。教会での任に従事している者達だけが使用出来るそこは、一度に大人数が仕えるようにとの設計が為されているのだろう。浴槽は一つだが、入口から反対側は湯けむりもあり殆ど見えない程だ。造りは簡素で余計な装飾も殆どないが、床面の素材が大理石であったりと、目立たない贅沢さがそこにはある。王女であったアーノイスも、とにかく広いこの湖のような大浴場には驚いたものだった。これが男女で分かれて二つある、というのは教会の世界に対する権限の強さの一端であるのだろうか。

湯に浸かる前に桶で身体にお湯を流して慣らし、それからそつと身を沈めていった。

「ふう……」

思わず溜息が出る。鍵乙女とはいえ、いや、鍵乙女であるが故に、修道女達も使うこの風呂場はあまり自由に使う事が出来ない場であった。第一の理由はやはり、彼女の全身に刻まれた世鍵。二言目には鍵乙女は世界を担う高貴な存在だから云々という、如何にも宗教的な理由がつくのだが、アーノイスはそちらはどうでもよかった。

そんな事をふと思い、顔を鼻が出来る限界まで湯船に潜る。王女の時は風呂に入る時ですら一人ではなかったのに、今では独りが多かった。流石に慣れたが、時折昔を思うと寂しくなるものまた事実であった。

「む、アーノイスじゃないか」

そんな沈んでいた彼女の背後から突然、少女の声が降ってきた。万が一にも誰かが居るとは思っていなかったアーノイスは驚き、振り向く。メルシアだった。

「メルシア！？　なんで居るのよっ」

「いや、研究に夢中になってたらいつの間にか夜も更けてきて……眠たくなってきたので風呂にでも、と思ったんだ」

言いながら、アーノイスの隣に座るメルシア。

「私は巫女だからいいよな？」

前述の理由だが、巫女である彼女は以前にアーノイスの世鍵の確認をした事がある為、該当しないとえばししない。そもそも、この人物にしきたり云々が当て嵌められるのかわからないが。

「わ、私は……別に、構わないわ」

それを考え、アーノイスは了承した。驚かされたのは別として、誰か側に居てくれる事は、彼女としてはどちらかというと歓迎すべき事だった。ましてや、鍵乙女の事情にも詳しい巫女の立ち場たるメルシアだからだ。

「むー、なんだかよそよそしくないか？」

「そんなことないわよ」

「嘘だな。アーノイスのその顔は、何か考えてた顔だ」

外見は年端もいかない少女だというのに、メルシアの話し方や先見の眼はまるで相応しくない。はじめて会った時から何年も経っているが、千年の時を生きている、というのも眉唾じゃないかとアーノイスは改めて思った。

「鍵乙女って……ひとりなのかな、って思って。ちょっと……ね」

「鍵乙女は常に世界に一人だ。でも、孤独ではないと思う。現に、アーノイスにだってオルヴスがいるじゃないか」

「え、いや、その……オルヴスとお風呂は入らないじゃない……？」

「ふえ！？ あ、いや、そ、そういう意味で言ったんじゃない……」

何か勘違いしたのか、耳まで真っ赤にしてお湯の中に顔半分を沈めるメルシア。彼女が誤解した方向と自分の言葉の他方面的な意味を今更わかったのか、負けず劣らず頬を紅潮させるアーノイス。

「い、いやいやいや、そっちの意味じゃないからね！ 違うんだから！ ええと……ほら！ メルシアとこうして一緒にお風呂に入るのって、はじめてじゃない？」

「ああ、そうだな……ああ！ そういう事か。私はてっきり二人はもうそんな段階直前まで進んでいたのかと……いやいや。ともかく、あれだな。一緒にお風呂に入れるような人が全くいないものなのか、とそういう事か」

「そうそう！ 全く何勘違いしてるのよ」

何とか誤解でかみ合わなかった話を元に戻す二人。全くもって妙な勘違いを起こすものである。

「ひとり……か。独りと言えど独りだと思うが、鍵乙女を求める人々や支え護る為に尽力する掲剣騎士だっている。私としては、やはりオルヴスが一番アーノイスの事を思ってくれていると思う」

そうメルシアは言う。しかしアーノイスはそれを聞き、少し沈んだ顔をした。

「うん……オルヴスは優しいわ。いつも私を気遣ってくれてる。だけれど……」

「それは従盾騎士だから当たり前なんじゃないか、って考えてるんだな」

心の内を言い当てられてアーノイスは頷く。メルシアはさらに言葉を続けた。

「オルヴスが従盾騎士として鍵乙女である自分を気遣ってくれているなら、結局は他の掲剣騎士や民衆と同じ、自分は独りだと、そう思っている」

アーノイスはもう一度顎を引くも、さらに深く沈む。その眼はまさに孤独に怯える少女のそれだった。

「難しい問題だな、それは」

「私はいつもオルヴスに頼り切りだわ。分かっている筈なのに、旅の時はいつも余裕がなくて、私は不器用だし迷惑かけるんじゃないか、

って」

「それで主従たろうとしている。矛盾だな」

「そうね……」

包み隠すことなく突き立てられるメルシアの言葉。さらに落ち込んでいくアーノイスに、メルシアは再び声をかけた。

「私も人の心はよくわからない。だけど、そうだな。今のままでダメだと思っているなら、出来る事からやってみればいいんじゃないかと私は思う」

「出来る事……?」

少しだけ顔を上げるアーノイス。メルシアは微笑んで言った。

「まあ、あれだ。一先ず明日の朝は自分で起きてみるとか」

「……そう、ね。ここで寝泊まりしてるわけだし、私だってそのくらいやれば……」

「そうだ。旅の時とは違ってこうしてお風呂も入れたし。アーノイスは低血圧だから朝は辛いかもしれないが」

メルシアの言を遮り首を横に振るアーノイス。その眼にはまだ不安や孤独感は拭いきれていない色が残っていたが、同時に決意の色があった。

「まあ、その……すごい当たり前の事で今更って感じがしないでも

ないけど……やってみる」

「うむ。何かあったらまた話すと良い」

「じゃあ、その時はまたお風呂一緒してもらおうかしらね」

「鍵乙女様は寂しがり屋だな」

その後、他愛のない話をしながら夜は更けて行く。
二人分の笑い声が広い浴場に溶けて行った。

―早起き―

「よし、これで準備万端ね」

始祖教会最上階、鍵乙女の部屋。その中心でアーノイスは一人、両手を腰に当てて満足げな顔で頷いていた。

綺麗にベッドメイキングが施された寢床の横に、両手で抱える程の大きさの布袋が一つ。部屋の隅に至るまで埃一つなく、一組だけあるテーブルも輝く程に磨かれている。

アーノイス自身も顔を洗い、髪をいつものハーフアップにし、服も寝間着から着替え済みだ。

昨夜の風呂場でメルシアと話したのをきっかけに、とにかく今日の出発はオルヴスに運ばれないよう準備をして、部屋へ迎えに来るであろう彼を迎えようと決めたのだった。

「私だってやればできるのよ、ってね」

序に修道女達に普段任せきりなこの部屋も、ここから旅立つ時ぐらいは片付けて行こうと思い、掃除も済ませた。

「んー、ちょっと早かったかしら」

既にはオルヴスが現れるのを待つばかりなのだが、一向に彼が現れる気配もない。

時間を――と、時計を探すか、この部屋に時計は置かれてなかった事を思い出し、逡巡する。

そして思い立ったように荷物片手に部屋の扉に向かった。

「こないなら、こっちから向かってやるのもいいわね。たまには私が起こしてあげるとしましょう」

そして意気揚々とオルヴスの部屋の前へ行くアーノイス。いつもならノックをしようとしたところでオルヴスが出てきてしまうので、そつとドアノブに触れて開ける。

黒を基調とした、窓はないがアーノイスと似た作りの、それよりも少し狭い部屋。色調がそう思わせるのだろうか。何度も立ち入った事があるが、自分の方の部屋の色に慣れているせいか、こちらは若干の違和感は禁じえない。

「おや、アノ様。どうかされましたか？」

「なーんだ。起きてたのね」

部屋の隅に置いてある椅子に腰かけて、何や本を読んでいる部屋の主の姿がそこにはあった。

少々落胆しながらも、寝坊はしない優秀な彼に感心しつつ、アーノイスは荷物を床に置いて、オルヴスの向かいの席に座った。

「どうしたじゃないでしょ。貴方、出発の準備は出来てるのかしら？」

アーノイスの言葉を聞き、呆氣にとられたような顔をするオルヴス。そこではじめて彼女は、違和感を感じた。

何故、オルヴスが旅支度をしていないのか。何故、こうやって起きているのに自分は馬車まで運ばれていないのか。

謎を頭の中で反芻するも答えが出ずに難しい顔をするアーノイス。そんな主人の顔を見て状況を判断したらしいオルヴスが、苦笑い混

じりに口を開いた。

「えーっと、アノ様。どちらに行かれるので？」

「え？ 何言ってるの。貴方がマイラから行こう、って言ったんでしょ。ほら、今日は私起こされずにちゃんと準備してきたんだから。感謝しなさいよね」

可笑しな事を言うとしても言いたげに胸を張るアーノイス。そんな姿を見、オルヴスは申し訳なさそうに片手でこめかみを抑えた。

「えーっと……扉に挟んでおいた紙はご覧になりましたか？」

ああ、と思いだしたようにアーノイスが服の袖から、折られたままの紙切れを取り出す。文面は開かなければ見えないようだが、端のほうには“オルヴス”と差出人の名前が書かれていた。

「何よ。今更書置きだなんんて。言いたい事があるなら面と向かっていいなさい」

恐らく自分を起こさないよう、昨晚の内に挟まれていたと見るその紙をアーノイスは突き返した。短い付き合いでもなく、起こすような緊急でもない用を、どこか距離感のある方法で伝えられるのが彼女は氣にくわなかったのだろう。

「ああー……そうですね。では単刀直入に」

コホン、とオルヴスが咳払いする。わざわざ襟を正すような間が、アーノイスに若干の緊張をもたらしたが、そこはそれ。表情には出さない。だが。

「マイラへの出発は明日に延期になりました。後、今はちょうどお昼の時間です」

そんな彼の言葉に、絶句するのだった。

「こちらの紙にはそれが書いてあったのですが……まあ、そうですね。これからは面と向かってお伝えする事にします。ああ、それで昼食は如何なさいますか？　いっお部屋から出ていらっしゃるか？　からなかったので、教会の給仕の方には頼んでいないのですが……」

オルヴスの台詞の途中で、アーノイスは半ば倒れるようにして机に突っ伏してしまった。

―主従―

机に突っ伏して魂が抜けてしまったアーノイスに、オルヴスはなんとか昨晚の出来事を話し、先遣隊がマイラに到着した後、万全を持して旅立つ事になった、という事伝えた。

事情を知ると、はじめは自分の空回り加減に落ち込んでいたものの、ふと気付いたように顔を上げてオルヴスを睨んだ。

「オルヴス、もしかして昨日修練場に来てたのは、その侵入者がいるってわかったから？」

「ええ、まあ。少し離れて様子を見ようと思っていたら、ちょうどアノ様が出てこられました。焦りましたよ」

軽く笑って言うオルヴスに対し、アーノイスは怒りテーブルを叩いて立ち上がった。

「どうして早く私に言わなかったの！」

その突然の剣幕に、オルヴスも言葉を失ってしまふ。

「早く言ってくれれば……私だって貴方の邪魔をせずに済んだのに……」

アーノイスは昨晚の自分の行動を後悔した。大切な旅路の途中。わざわざ呼び戻された理由をもっとよく考えるべきだったのだ。それを、いつものように、アヴェンシスだからと軽率な行動であった。

「邪魔だなんて、そんな。僕は貴方の騎士ですよ？　主に余計な心

労をかけずに物事を解決するもの甲斐性の内です」

「貴方が強いのも、頭がいいのも、分かってる。でも……もっと楽な方法があるなら、私に遠慮しないで。昨日みたいに、何かあるってわかってるなら先に伝えて頂戴」

アーノイスは思う。昨日の侵入者は何を狙ってきたわけでもなかったらしいが、それがもし、自分の命を狙ったりして来ていたものだとしたら。それが、手段を選ばないような存在だったとしたら。考えれば考えるほど、昨日の事は運が良かっただけの話なのではないかと思ってしまう。

そうでなくとも、警備も万全の筈の教会総本山であるこの場所に立ち入れなかったという大問題なのだ。

オルヴスは事も無げに言っているが、アーノイスは樂觀出来ない。

「本当は私が、そういうの気付ければいいんだけど……私だって、貴方には余計な苦労はさせたくないって思ってるんだから」

心の内を言い切ると、椅子に力なく座り込み、俯いた。

そんなアーノイスに優しく語りかけるように言葉を紡ぐオルヴス。

「ありがとうございますアノ様。そのお気持ちだけで、本当に救われます」

いつもの頬笑みを一層深くしながら、真摯な眼差しを、顔を上げた、アーノイスの何処か泣きそうな瞳に向ける。

「でも、あまり思い詰めないでください。でないと僕の仕事がないってしまいますしね」

「う、うん……」

この話は終わり、とでも言うようにオルヴスが立ちあがった。

「それではお昼ご飯にしましょうか。何かご希望はありますか？」

「貴方が作るの？」

「ええ。厨房お借りしてきますよ」

「ええと……じゃあ、アンバタで」

普段通りの注文をするアーノイスにオルヴスは苦笑する。バターはまだしも餡は日持ちしない為、旅の間は町に立ち寄った時、その後数日程度しか食べられないので、こうやって街に滞在している時は食べる物と言えばアンバタを要求するアーノイスであった。

「わかりました。では、食後にアンバタのラスクを準備しておきますね。主食はでは軽いものを用意しましょう」

「お願いするわ」

少々歯噛みするように告げるアーノイス。自分が作ると言えればいいのだが、彼女は料理に自信がなかった。先天的に不器用なのを彼女も自覚しており、簡単な料理でもどこか失敗してしまう。下手に自分がやるとここで言ってしまうと、結果また彼に迷惑をかけると考えたのだ。

「ああ、そうだ」

一先ず部屋を出て行きかけたオルヴスがアーノイスの元に戻り、ポケットから何かを取り出してテーブルに置いた。

「……これは？」

ピンポン玉程度の大きさのガラス玉を手取るアーノイス。光に通すと赤であったり、青であったり、緑であったり複雑な色を覗かせる。

「今朝メルシアさんが出立前に渡されまして、常に持ってるって言われました。アノ様預かっておいてくれませんか？」

「ええ、構わないけれど。一体何かしらね」

ガラス玉のとりどりに変化する色を楽しむようにコロコロと掌の上で転がしながら、アーノイスは聞いた。

「さて……詳しくは調べていませんが、微弱な霊力は感じます。まあ、持っていると言われたので、そうしておきましょう。何か考えがあるのかもしれませんが。では、少々お待ちくださいませ」

曖昧な答えを返しながら、オルヴスは部屋を出て行く。

「メルシア……どうしてるかしらね」

ガラス玉を弄びながら、アーノイスはそう呟くのだった。

―指南―

昼食後、明日まで待機となつてしまひやることのない二人は、無人の第十一修練場へと来ていた。

グリムがいないので、オルヴスは居ても、修練場を破壊するような事態にならない為、今現在他の修練場で掲剣騎士達が鍛練に励んでいても、ここは静かなものだった。

事の発端は、またしても、いつも通り、アーノイスの突拍子もない一言。

「私に稽古つけてよオルヴス」

その昔、彼女がはじめて世界の門を巡る旅に出る前の頃に、一通りの基本戦闘指南及び護身術の基礎を教えた事はあったが、彼女が自らそういう、戦闘に関する訓練を要求する事はなかった。あまりに唐突だったので、オルヴスは何の事かと聞き返したが、アーノイスはどうやら本気のようなだったので、食後の運動に、と了承し修練場にやってきたのだった。

「では、まず基本からおさらいしますよ」

動きやすそうな軽装に着替えたアーノイスを前に、普段着のままデコーチに預かるオルヴス。

「戦闘でまず第一にしなくてはならないのは霊力の解放です。霊力とはすなわち生命力精神力そのもの。それを己の内から引き出し、全身に巡らせる事で通常とは比べ物にならない身体能力を発揮できるようになります」

指示を受けて、瞑想し、自分の内にある靈力を身体に巡らせていくアーノイス。視覚的には捉えられないが、オルヴスにはその靈氣の高まりが十分に感じられた。

「これは基礎の基礎となる技術ですが、安定して瞬時に靈力を展開できるようになるには主に数年の修業が必要と言われています。…アノ様、旅の間もこっそり練習していましたね？」

「そんなことないわよっ」

「はい、今靈氣が乱れました。どんな状態でも安定出来るようにしておかないと意味ないですよ」

「ぐっ、わかってるわよ！」

一瞬、思ってもいないところを突かれて動揺したアーノイスが集中を乱す。物腰は柔らかだが、中身は割と鬼畜だったりするオルヴスだった。

「靈力は高めれば高める程、身体の力は増して行く傾向にあります。全身に巡らせずとも、例えば眼に集中すれば視力が高まり、腕に集中すれば腕力が増強されます。理想形としては状況に応じて自由自在にこれを操る事ですが、一朝一夕に出来る事ではありませんね」

と、オルヴスが徐に地面に片手をつけ、一呼吸で粗く砕く。そこから、彼の身の丈はあろうかという岩盤を無理やり引き剥がして持ちあげた。

「さて、普段でしたら決して割れなさそうなこちらの岩ですが、き

ちんと靈力を纏わせる事が出来ていれば、ひびを入れる事くらいは出来る筈です。叩いたら痛そう、と普通は躊躇しますが、それでは駄目です。あ、アノ様。いくら練習を積んでいるからといって今回は烙印術の使用は禁止ですからね？」

「何言ってるのよオルヴス。練習って何のことかしら？」

あくまで惚けた顔をするアーノイスにオルヴスは苦笑いを返しつつ言う。

「知ってるんですよア。アノ様、馬車で移動している間に烙印術の練習をなさっているでしょう？」

「そ、そんな事ないわ。だって騎手だってずっと貴方に任せて寝ているじゃない？」

「烙印術は多大な靈力を使います。大きな術の発動はしないとはいえ、微弱でも絶え間なく使用していればすぐに疲労が溜まる。だから寝ては訓練、訓練しては寝てを繰り返しているんですよ？ できれば、烙印に靈力を通すのではなく自分の身体に靈力を通す、そんな細かい事が出来るわけありませんからね」

「もう、貴方の気のせいよ！　ともかく、その岩を割ればいいのね？」

話を打ち切るように、構えを取ってオルヴスの持つ岩を見据えるアーノイス。
オルヴスも話を蒸し返すような事はせず、岩を立てて地面にめり込ませた。

「はい。僕が感知する今のアノ様の靈氣濃度ならば、思い切り叩けば割れます。では、思い切りどうぞ」

言って、数歩後ろに下がる。

それを確認して、呼吸を整え、アーノイスは助走。踏み込み、渾身の掌底を岩に向けて放った。

「はっ！」

打撃点を中心に岩が八方に亀裂を走らせ、瓦解する。

「どう？ オルヴス」

少々驚いたように賞賛の手を叩き慣らしながらオルヴスが崩れた岩の所へ歩いて行った。

「素晴らしいですね。いや、ここまで綺麗に割れるとは。靈力の集中が上手くいっているようです。それに、ちゃんと掌底でやるように言ったの、覚えていたんですね」

「ふふん。ちゃんと覚えてるわよ。『殴り慣れてないでしょうから掌底の方が威力が出しやすい』だったかしら？」

「その通りです。では、次は靈力の足場形成を試みましょうか」

「任せなさい」

その後も戦闘基礎指南を続ける二人。やがて夕方になり、たまたま通りかかった大司祭にオルヴスが少々説教を喰らうまで、二人の訓

練は続くのだった。

巫女　―メルシア―

一月後――ギティア大陸南部。

ダズホーンの命により、グリムとその協力を了承したメルシアは一路、孤独の島レツアーンに向かっていた。

ルナギオル

一介の掲剣騎士に任すわけにもいかない、世門の調査の為だ。孤独である事を強く護る為に、教会傘下の掲剣騎士ですら入る事を禁じられているその場所に行く為、大人数での行動は出来ず、しかしながら未知の危険があるかもしれないとの事で、掲剣騎士団中最も実力のあるグリムが護衛に、そして門を知りつくすメルシアが適任なのだ。

「おらあ！　蜂の巣になりなあ！」

天高く舞い上がったグリムが上空から無数の火炎弾を放ち、地面に群がるフェルの一群を焼き穿つ。全ての敵を消滅させたところで、グリムは降り立ち、大剣を鞘へしまった。

「うむ。相変わらず豪快な戦い方をする」

「こまけえ技なんか使ってやれっかよ。こんな雑魚どもに一々構ってられねえつつうの。こっちの方はまだフェルが多いみてえだしな」

メルシアの言葉に軽く伸びをしながらグリムが答える。

「ふむ。だからって毎回毎回街道を破壊していいのか？　もう穴だらけで見る影もない」

「ああ？　じゃあお得意の修復術でもかけといてくれよ。俺はそう

いうのできないから」

「断る。自分で壊したなら自分で直すべきだ。人はずっとそうやって生きてきたんだ」

「ああん？ お前な、戦わねえんだから霊力だって有り余ってたんだろーが」

「気にするな。敵は全部グリムがやっつけてくれる。邪魔するのも悪いし」

「あーのーなー……！」

不遜な物言いをまるでやめないメルシアにグリムが若干業を煮やしたか、その顔を睨む。

足元の――ではなく、頭上の。

「邪魔する気ねえなら人の頭乗っちゃってんじゃねえ！」

「おわっ、とと。おい暴れるなグリム。落ちる」

肩に足をかけ、赤い髪のを両手で抱えるように掴んで放さないメルシアをグリムはなんとか引き剥がそうとする。しかし無駄な努力で、磁石のように引っついて離れない少女に、グリムはすぐに諦めた。

「まったく、暴れるなじゃねえよ！ 歩けよお前！ なんで頭に重し乗っけながら戦ってたんだよ俺は！」

「大丈夫。どんなに激しく動かれてもなんとかしがみついたらな。」

……
“吸着”
ステイック

「何お前靈術使ってんの！？　ねえ！　人の頭乗ってるだけでしょあんた！」

「お前と離れたくないんだ。仕方ない」

靈術を使い、より強固にグリムの頭にひつつくメルシア。旅をはじめてからずっと、あたかも当然というようにそのポジションを維持し続けていた。

「……はあああ」

故にこの問答も何度したか、グリムはもう数える事をしていない。なのでもう殆ど無駄な抵抗とわかりきっていたが、普通に受け入れてしまっただけはそれで、と思っているグリム。

深い溜息を吐きながらも、グリムはメルシアの両足を持って軽く跳ねて体勢を整えた。中途半端に捕まられていると逆に歩きづらいのだ。

「で、どっちに行けば良かったんだっけ？」

「しっかりしろグリム。こっちに真っ直ぐでいいんだ。道なりでいいからな」

「はいはい。しっかり掴まってるよロリババア」

肩からぶら下げられている小さな足をしっかり掴んで走りだすグリム。普通なら馬を使って行った方が効率がいい、がグリムは最低限の荷物だけ持ち、鍛練の一環と称して走って目的地を目指すのがス

タイルだった。無論、走る速さは馬と同等かそれ以上。膨大な霊力を持つ彼ならではの修業方法ではある。

「むっ！ ババアじゃない！ お前より身体は小さいぞグリム！」

「たーたくなっつの！ つーかフカシこくな。お前俺がガキの時からその外見だろうが」

「心だって乙女だ！」

「はいはい……なんてったって千年処——痛ってえ！ 噛むな！」

「えふいかひーのないほはえはわふいんあ！」

「何言ってつかわかんねーっつの！」

くだらない言い合いを続けながらもグリムは先を目指し、メルシアはそれから離れずに二人は世門へと至る道をひたすら進んでいた。

―寒村―

グリムとメルシアは日が暮れる寸前、第一の目的地としていた小さな村に辿り着いた。

海に面し、背の低い木造の古めかしい家々が集まって立っているだけのようにも見える。

近くの町や村との交易も特になく、忘れられた村と思えるのが第一印象のような場所。

しかし、ここはアヴェンシス教会に取って重要な場所であった。

「うっわー……時化した村だなあ……」

「ふふ、そう思うか？」

村人がちらほら見えるというのに、ひどい感想を隠そうともしないグリムを嘲笑うメルシア。その不敵な笑みに疑問符が浮かぶ。

「あん？　なんかあんのか？」

「いや、貧しくみすぼらしく何も見る所がないと思っているならそれでいい」

「お前、何が言いた――」

『ここは教会が作った名もなき寒村だ』

グリムの言葉を遮り、脳に直接響く、グリムにだけ聞える声を発するメルシア。共鳴という^{リゾネイン}霊術の一つによるものだった。他には音として聞えないよう、グリムにだけ響かせる“声”。わざわざそれを

かけているという事の意味を、流石のグリムでも瞬時に理解した。

『人から隠れ、欠片も興味を持たせないようにわざと寂れた村を演じている。わかるか？　ここにいる村人全てが掲剣騎士だ』

黙して“声”を聞いていたグリムが、眼を見開く。道端を歩く老人。取ってきたのだろう海産物を仕分けている女性や担いでいる男性。多いとは言えない村人達を見て、グリムはある事に気付いた。誰一人、子供がいないのだ。

『気付いたみたいだな。彼らはこの廃れた村でギリギリの生活を営む村人のフリをしている。後、ここの人間は外部からの旅人を歓迎しないよう命令されている。部外者に滞在してもらいたくないからだ』

言われて、グリムは成る程と行った表情をする。自分に向けられる視線がどこの街に行った時よりも鋭く、冷たいものだったからだ。

「うへえ、俺ここ居たくねえ……」

「まあそういうな。宿屋は一応ある。まずは部屋を確保しようじゃないか」

「こんな村じゃ宿なんて儲かんねえだろうによ」

演技ではなく心底思っている事を吐露しながら、グリムはメルシアを乗せたまま、ボロボロの看板を下げた宿屋を見つけ、入って行った。

「……らっしゃい。悪いけど部屋は空いてねえぞ。他当たりな」

中に入るなり、カウンターで新聞を読みながら、店主らしき男がぶつきらぼうにそう吐き捨てた。客を見向きもせずこの対応。居心地の悪さは異常だな、とグリムは感心した。

「おいおい、私にも部屋はないというのか？」

グリムの頭に乗ったメルシアが手を伸ばし、店主の新聞を奪い取る。一瞬、男は不機嫌そうな眼をしたが、メルシアを見て、顔色が変わった。

「みっ巫女様！」

「しっ！」

他に客の姿が見えるわけではないが、慌てる男を一喝するメルシア。

「ああ……部屋がねえのは本当でさあ。一週間程前から妙な客が居座ってまさあ」

「何、一人か？」

「ええ」

「おいおい、一人ならもう一部屋空いてんだろ」

「生憎この宿屋は一部屋のみでさあ」

「……マジかよ」

グリムはもうなんだか不便だとか居心地が悪いとかそういうレベルの村ではない気がしてきた。こんなところに一週間も居座ってるなんて正気の沙汰じゃない人間も居たものだが。

「あらあ、妙な客とは心外ねえ。傷つくわあ」

奥の扉から一人の妖艶な女性が姿を現した。露出の激しい衣装に身を包み、眼鏡を掛けている。

「あたしとしてはこの村嫌いじゃないけどねえ。宿屋の店主はぶっきらぼう、外の店で商品を買っても値段以外の質問はガン無視、村の人たちは挨拶すら返してくれない。もう、ゾクゾクしちゃうじゃない？」

「一応相部屋にならできますがね？」

「他を当たろうグリム」

「マッハで賛成する」

女の変人丸出しの台詞を村人同様完全に無視し、店主の提案も一蹴して踵を返すグリム。

「あらあらあ、そんなに冷たくされると興奮しちゃうわよ？」

「店主、明日また来る」

もはや何も応えず、メルシアだけが店主に一言を残して、二人は宿屋を後にした。

—魔女—

翌日。

結局、メルシアの霊呪術で造ったお手製即席洞窟で一夜を過ごし、風呂だけを民家で借りた二人は、昨日のメルシアの宣言通り、再び宿屋を訪れていた。

「昨日の変なのは？」

「朝から姿が見えませんか。昨日は何か言っていましたか、流石にいれなくなっただんじやありませんかね。宿代だと見た事もない金貨を置いて行きやした」

「金貨？」

店主の言葉に反応したメルシアが聞き返す。店主は小さな小包の中から一枚、その置いてあったという金貨を取り出し、見せた。

「ええ。見たこともねえ代物でさあ。造りは上等なんでしょうが、換金できるんですかねえ？」

「これは……店主、その金貨一枚もらって良いか？」

それを眼にした瞬間、メルシアの表情が一瞬強張った。

「ええ。構いやしませんか。なんですか？ 値打ちものですか？」

「……いや。価値はもう殆どない。だが……」

言葉を言い淀み、受け取った金貨を巫女服の袖の中にしまうメルシア。

「今はよそう。では、行くぞ」

「了解です」

「あ？ どこにだよ」

メルシアの宣言に、店主もカウンターから出て一本の剣を手にした。タウ十字、教会の紋様が刻まれているものだった。一人、流れを読めていないグリムがメルシアに問う。

「海だ。グリム」

「はあ？」

訳がわからないといった顔をするグリムにメルシアは笑みを返した。

「いいから行くぞ。ほら歩け歩け！」

「つたく、ちゃんと説明しろよなあ……」

渋々、グリムはメルシアの指す方向に歩いて行った。

「……海、だよな」

「ああ、海だ」

眼の前に広がるはだだっ広い砂浜とそれ以上に広大な海。話が見えず呆然とするグリムを尻目に、メルシアが彼から飛び降りる。

「さあ行こう」

「は？ 行くなってどこに」

「来ればわかる」

言って、メルシアは靴を履いたまま、海へと足を踏み出した。彼女の足が海へ触れるか否か、突如として海上に浮かび上がる円形の青く光る霊呪陣。そこに、メルシアは乗った。

「はあ……成る程ねえ」

感心したグリムがメルシアに続いて陣の上にそっと足を乗せる。

「これは私が許可した者しか乗せないようになってる。そしてこれが、世門に続く唯一の路、というわけだ」

「ああー……そういうばそんな理由で来てたんだったな」

空を眺め、思い出すようにグリムが言う。

「全く、何で目的忘れてるんだ。じゃあ店主。ここの警備頼んだぞ」
相変わらずのグリムに仕方ないなと溜息を吐き、路の警備の為に連

れてきた宿屋の店主に命令を下し、次の一步を踏み出すメルシア。海に落ちると思われたその足は、また突如として現れた霊呪陣により海面と中空の隙間で浮かぶ。

「成る程ねえー、そういう事だったの」

突然、上空から降る、声。即座に反応したのはグリム。高く昇った日を背に立つ女を睨み、大剣の柄を握る。

「ふむ。やはり来たか」

青天の霹靂たる女の出現も、まるで予期していたと言わんばかりのメルシアの台詞に、女は怪訝そうな顔して、地表ギリギリまで下りてくる。近づいてきた襲来者に宿屋にいた掲剣騎士も剣を抜く。

「まるでわかっていたみたいなお振りね、お嬢ちゃん？」

「お嬢ちゃんとは心外だ。こう見えてもお前よりもずっと永く生きている身だぞ」

「あら、そうねえ。“時紡ぎの魔女”さん？」

「久々に呼ばれたよその名前は」

千年の時を生きる魔女。そう、彼女は時折呼ばれる。それを伝説化した呼び方が“時紡ぎの魔女”である。

それは経典にも乗る神話の一部、空想とも現実とも信じる者に委ねられる様な語りの中で言われている事であり、真実は定かではない。

一触即発の雰囲気の中、沈黙を破ったのは掲剣騎士だった。

「先に行ってください巫女様！ こやつは我々が抑えます！」

剣を振りかざし、女の方へと近づく。巫女と掲剣騎士二人がいるこの場に堂々と降り立って尚、敵意にも似た態度を崩さない不気味な存在にも関わらず、男は戦う意志を示していた。しかし。

「弱い人に……興味はないわ」

冷やかな、声。同時、砂浜の中から巨大な白い手が現れ、騎士の男を掴み、無造作に投げ飛ばした。

「おいおっさん！」

グリムが叫ぶものの、返事はない。

「てめえ！」

大剣を抜き放ち、砂浜に叩きつけて炎を巻き起こすグリム。その視線の端には、吹き飛ばされて動かない騎士の姿。

「落ち着けグリム！ 霊気は無くなっていない！ 恐らく気を失っているだけだ！」

「話に聞いてた通りね。熱い男の子だわ……クッキー」

女の呼びかけに応え、砂地から出ていた白い手が、地面を掴むように指を突き立て、埋まっていたその身体を引き抜いた。

小動物のような饅頭のような愛らしさがあるのかもしれない顔。それを支える人大きさを遥かに超えた、筋骨隆々とした体躯。

全体的に造り物の白さをしており、つぶらな紅い瞳が、その異様さをさらに引き出す。

「な……」

「貴方の相手はこの子がするわ」

「きゅきゅ?」

5mはあろうかという巨体の上の顔が、小首をかしげながらグリムを見る。感情の読み取れないただの丸い玉のような眼が、同じ色した少年を写している。

「こいつと……戦え、だど?」

どんな敵が相手でも、それこそ自分より実力が上とはっきり認知しているオルヴスが相手の時でさえ一歩も引く様子を見せなかったグリムが、苦渋の表情をした。

「ええ、そうよ」

「こいつはゴーレムか?」

「ええ、そうよ。可愛いでしょ。クッキーっていうの。名前、覚えてあげてね」

「……趣味が悪いな。グリム、さっさと焼き払ってしまえ。………
…グリム?」

呼びかけても返事のないグリムを怪訝に思い、メルシアが疑問符を

浮かべる。

「おい、どうした？ 戦闘だぞ？ お前の得意分野じゃないか？」

「……ねーだろ」

「は？」

「こんな愛らしい生物と戦えるわきゃねーだろおおお！！」

それは、咆哮だった。両の拳をいつになく力強く握り絞め、腹の底から声の限り叫ぶ。あまりの音量に海が逆立ち、砂が彼を中心に同心円で動いた。

「……………は？」

盛大に自信満々にぶちまけたその言葉に、メルシアはただただ呆れる事しか出来ない。

「おっまえあれの可愛さがわかんねえのか！？ あの愛くるしい顔、目、耳！ それに加えてムキムキの巨体！ 言わば造形美と肉体美の結晶つと言っても過言じゃ——」

「何こんな時だけ普段使えない様な難しい言葉を並び立てられるんだお前は！ 大体あれが可愛いとか趣味悪いだろ！」

「あんだとお！？ やるかてめえ！」

「敵とやれ敵と！ お前の眼の前にいる白いのだよ！」

「僕にはできないいいいいー!」

まるで関係のないところで論争をはじめる二人に、女は少々気圧されながらも、ずれた眼鏡の位置を直し、二人を見据えた。

「あ、あなた達……ちよつと、状況わかってるのかし——」

「何だお前! そんな趣味があるとは私は知らなかったぞ! 私に隠し事してたのか!？」

「知るかつ! 俺は今眼が覚めた気分だ! これは一目ぼれなんかじゃねえ……もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ」

「クッキーが可愛いのは仕方ないけど、でも、そのお……」

「良い顔して何わけのわからない事言ってるんだ!」

まるで自分の言葉が届かない。それを少し悲しみながら、女は額に手を当てる事数秒。冷ややかな声で、小さく呟いた。

「……クッキー」

「きゅきゅー!!」

自らのゴーレムに命を下す。応えた白い生物は任せたと言わんばかりに快活な返事をする、その巨体をねじり、その巨大な拳を振り上げた。

「ほら聞いたか? 声だつてめちゃくちゃ可愛い——」

「きゅう！」

グリムの身体よりも巨大な拳が、彼を襲う。完全な不意打ちに対応出来なかったグリムはまともにそれを喰らい、空の彼方へ吹き飛ばされた。

若干の間を置き、天高く舞ったグリムの身体が重力に引かれ、沖合に落ちる。

「グリム！」

「ごめんなさい？ でも、気を抜いてたあの子が悪いのよお？」

「くっ」

眼を閉じ、瞬時にグリムの霊氣を探るメルシア。

「よし、生きているな」

確かにその存命を感知すると、メルシアは一人、女とゴーレムの前に立ち塞がった。

「あらん？ お嬢ちゃんが戦うつもりかしら？ やめておきなさい。怪我したらどうするのよお。それよりも彼、助けに行った方がいいんじゃない？」

年端も行かない少女が取り乱しもせず居た事を怪訝に思う女。しかし、メルシアの口元に浮かぶのはどこか余裕のある微笑であった。

「不意打ちでその程度の威力。笑わせるな。私のグリムはそんなに柔じゃない」

挑発的なメルシアの言葉に、女は舌打ちをする。

「言ってくれるじゃない……後悔しても遅いわよ!」

右手を高々と上げ、己のゴーレムに指示を出す。白い巨体が、小さなメルシアを叩き潰さんと組んだ両拳を降り下ろした。

しかし。その拳は届くことなく、メルシアに触れる1m程手前で何かに遮られ、止まった。半透明のシャボン玉のような光る膜が、メルシアを覆っている。

「私は自分の気に入った奴以外に触られるのが一番嫌いなんだ」

「何、この子っ……クッキー!」

「きゅきゅきゅう!」

女の叫びに合わせ、白い化物がメルシアを覆う膜を破こうと拳を叩きつける。弾かれては殴りを繰り返す、が効果はない。

「お嬢ちゃんだのこの子だの、誰に向かって口を聞いている」

不敵な笑みで笑うメルシアの周囲に、七色の光を放つ帯が現れる。

「私は巫女、時紡ぎの魔女。“刻まれた時よ開け。永久の牢獄に囚われし記憶、我許すが故に我に満ちよ”」

詠唱と共に、光りの帯が展開し、そこから七つの“本”が現れる。七色それぞれに染まった、霊呪印が刻まれた内の一冊——緑の本をメルシアは手に取った。

「お前程度なら、一冊分で十分だろう」

片手で、その“本”を無造作に開く。同時、眩い緑色の光が放たれ、辺りに満ち、纏わりついていたゴーレムを弾き飛ばす。

「くっ、一体何を！」

あまりの光量に顔を抑える女。

やがて光が収まると、女は眼を開けようと手をどかし――息を飲んだ。額から脂汗が噴き出すのが彼女にもわかった。それは畏怖。先程まで眼の前に居たのは年端の行かない童女だった筈、それなのに、そこから感じられる霊気は、凡そ比べ物にならない。

「ふむ。やはりこちらの姿の方がしっくりくるな」

それはメルシアの声。だが、少しトーンが低い。

女は眼を見開いた。そこに居たのは童女ではなく、成熟した女性。金糸のような長い髪を風に流し、琥珀色の瞳の高さは、自分と同じくらいの高さだった。

「それが、正体というわけ？」

圧倒的な霊気を放つ眼の前の存在に気圧されながらも、女はそう言葉を絞り出した。

「正体も何も、私はメルシアだ。服を見ればわかるだろ？　ううむ、だがやはり胸の辺りがきついな。丈はなんとかなるが……やはり普段からもう少し長い物を着ておくか」

短くなってしまった、巫女の正装である白い服を眺めながらメルシアは呟く。

自分をまるで意識していない一挙一動だというのに、女はそんなメルシアの小さな動きに精神が削られる想いだった。彼女の放つ靈気の重さ、厚さが恐ろしいからだ。

「ああ、すまん。久々にこの姿になるとだな。どうも靈力の制御が上手くないんだ。許せ」

ス、とメルシアは片手を上げ、指を一本、女の方へ向けた。

「一応、名前を聞いておこうか。エトアールの亡霊」

「はん。ナツ、よ。あらあら、ここの騎士達は気付かなかったみたいだけど、貴方はエトアールの名前、知ってたのね」

「無論だ。私は記憶する者だからな。さて、グリムが戻る前に終わらせたい。あいつはどうにもそのゴーレムに執心だからな」

女――ナツは渴いた声で笑った。

「嘗めるんじゃないわよ……クツキー！」

これまでより強く、ゴーレムへの命を下す。白い巨体は紅い眼を光らせ、猛然とメルシアに突撃していった。

「……“^{ツアル}嘆き”」

メルシアは指先をゴーレムに定め、単一の言葉を呟く。指の先に現れる緑光の術陣。そこから巻き起こる突風がゴーレムを包み、その

動きを止める。うねり、纏わりつく風に必死に抵抗しようとする白い化物。しかし指一本動かせず、動けば動く程にその風の糸に絡まっていく。

「千切^{レビ}れ」

重ねた言葉に陣が光った。ゴーレムを捉えていた風が文言通り、その巨体が無作為に引き千切る。巨体のゴーレムよりさらに大きな腕とも思える風の塊が襲いかかって行く。為す術もなく、悲鳴すら上げられず、ゴーレムの白い体が霧散し、風が止んだ。

「クッキー……」

「まだやるか？ 私としては、今お前を巻き込まずに済んだのは奇跡だ。感謝しろ」

言われて、ナツははじめて自分の頬に触れた。そこには先程の風が掠ったのであろう一筋の傷が出来ている。

「！……来なさいチョコ！」

呼びかけに応え、遙か上空から一体の鳥が降り立った。顔と色は先程のクッキーと一緒だが、その姿は怪鳥と呼ぶにふさわしい巨躯。色はクッキーと同じく白い。それに飛び乗るナツ。

「覚えてなさい時紡ぎの魔女！」

「ああ。記憶しておくよ。少しだけな」

捨て台詞を残し、ナツが飛び去る。

「おうっ、ゲホゲホっ！」

「おお、グリム、無事だったか？」

その頃になりようやく、沖合まで吹き飛ばされたグリムが戻ってきた。どうやら泳いで来たらしく、水を飲んだのか軽く咳き込んでいる。

「まったく、いきなり殴るなんて過激な奴——ってあら？ クッキーちゃん何処行った!？」

上げた視線の先に砂浜しかない事を確認したグリムが右に左にと視線を忙しなく動かすも、彼の望むものは既にそこにはない。

「逃げたよ」

「あん？ まさかお前、つつか、うおっ！」

メルシアの言葉にはじめて彼女の方を向いたグリムが驚いたように二三歩後ずさった。

「む、なんだ？ お前はこの姿見るの、はじめてじゃないだろう？」

近づくメルシアの三倍の距離を逃げるグリム。メルシアがキョトンとした表情で見やる。

「いきなりその姿見たら誰だってびっくりするっつーの！ ……っかなあ」

顔を伏せ、ピ、とメルシアを、詳しくはその胸部の辺りを指差す。

「若干見えてっから」

小さい姿のメルシアはかなりダボダボの服を着ていた。それはこの大人の姿になった際、服に困らないようだったが、先程彼女が語っていた通り布が少なかったよう。今現在それが、先程彼女の放った風の霊術により少しずれ、胸部のとっかかりでギリギリ布が保たれている状態だった。

「な、ななっ！ 仕方ないだろ！」

胸元を隠し、グリムに軽蔑の視線を向ける。

「いいから元に戻れや。下手に服たくしあげると次は下が見えんだろうが」

「変態だなお前は！」

「健全な男子たる証拠だ！ いい加減にしねえと襲うぞてめえ」

「……そんな度胸ない癖に」

「んだとお！」

食ってかかるグリムを無視し、メルシアは光から本を呼び出して閉じる。同時に彼女の身体も光に包まれ、やがて元に戻った。

「うむ。これで文句ないな」

無くなった胸を張り、跳ねてグリムの頭に飛び乗る小さなメルシア。グリムはバランスを崩しながらもなんとか堪えた。

「そうだな。お前に襲われるなら吝かじゃないが、その、はじめてそういうのする時はだな、ムードとか欲しいな……とかな」

「はいはい……マセたガキだな」

いつもの調子で頭上のメルシアをからかうグリム。彼としてはこちらの姿の方がしっくりきているらしい。

「誰がガキだ！」

「はいはい！　じゃあ乙女なババアだなあ！」

「ババアでもない！」

相変わらずの痴話喧嘩を繰り広げながら、グリムは海へと歩を進めた。その先には、先程展開していた陣がしっかりとある。

「これ真っ直ぐ行けばいいのか？」

「うむ。気をつけろよ。私の機嫌を損ねると海に落ちるからな」

「別にいいよ……もうずぶ濡れだからな」

「頭を下げるなら乾かしてやらん事もない」

「いや、それなら俺でも出来るわ」

言って、自分の足元から軽く炎を起こすグリム。すぐに服や体に着いた水分が蒸発し、蒸気を上げる。

「あっつあつ熱い！　こらグリム！　私も焼くつもりか！」

「だーいじょうぶだって。レアにしといてやる」

「食べるのか！？　食べてもいいがそっちの方向は嫌だ！」

「馬鹿かてめえは！」

数歩進み、グリムがふと思いついて足を止めた。

「ん、どうした？」

「宿屋のおっさん忘れてたわ」

「……………あ」

―炎 雷―

宿屋の店主をちゃんと起こし、軽く治療を施して、二人はようやく目的地へと近づいていた。

「うむ。そろそろだな。近いぞ」

「とは言ってもだなあ」

相変わらず頭に乗ったままのメルシアの言葉に、グリムは辺りをぐるりと見回す。が、目に映るのは見渡す限りの青い海。日差しが眩しく、先程居た海岸はもうどの方向かもわからない。霊呪陣はあるが、来た道の途中で消失している。

「世門は最重要地だからな。不可侵の結界が張ってあるのさ。お父さんだって知らないんだぞ？」

「へえ、成る程ねえ。つーか、お前何人の糞親父をお父さん呼ばわりしちゃってんの？」

「いずれは挨拶に行かなければと思っているさ」

「そうじゃねえよ」

グリムの言葉を意に介さず、メルシアが飛び降りて陣の上に立った。

「さて、レツアーンに上陸――の前に」

台詞を切り、真上、青い空と雲しかない空間を見つめるメルシア。

つられてグリムも見上げるが、何も見えない。

「招待出来るのはここまでだ。そろそろ出てこい」

そう、上空に向かって少し声を張り上げて言うメルシア。

何の返答もなく、流石にグリムがメルシアの頭を心配した頃。丁度彼女が見つめていた空間が“裂け”た。

「気付かれていたか。いやはや流石だ。時紡ぎの魔女よ」

どこか芝居がかった、それでいて背筋を冷たくなぞる暗さを纏った男の声が響く。空間の裂け目、そこから現れたのは深緑髪の仮面の男、それと鎌を手にした眼帯の女だった。

「ずっと見ていたな。どうせあのナツとかいうのも仲間だろう？」

メルシアの言葉に男は応えない。ただ静かに、海の上、グリムらと同じ高度に降りてきた。

「もう一度言う。お前らに見せられるのはここまでだ。失せろ」

睨む彼女に反応し、眼帯の女が持つ鎌がピクリと動く。しかし、それを男は手振りで制止した。

「我も興味本位でここまでついてきたわけではない。どうしてもレツアーンを見たいんでな。そこでどうだ？ 交渉と行かないか？」

「交渉だと？」

グリムが大剣の柄に手をかける。先程の女と恐らくは仲間。ならば、

何が起こってもおかしくはない。

「ああ。我々はこのを見せてもらう。その代わり……」

男の口元が凄絶な笑みを形作る。間を置き、凍てつく声音で言葉が紡がれた。

「担保として、貴様らの命は救ってやろう」

「あー、やっぱそうなるのな」

宣言を受けたと同時に、グリムが大剣を構える。

「さっきは戦えなかったからなあ。今度は俺にやらせろよメルシア」

「気を抜くなよグリム」

交渉をまるで聞きいれるつもりのないグリムとメルシア。その反応が予想通り、果ては楽しいとでも見えるか、仮面の男は笑みを一層深くする。

「話にならなかったか……ユレア、手は出すな。どちらにも、だ」

「御心のままに」

男の命令に眼帯の女は鎌を終い、数歩後ろに下がった。

「本当は“魔女”か“魔狼”と手合わせして見たかったが……まあ、貴様にも多少は興味がある。せいぜい楽しませてくれ」

「へっ、いいな、その余裕。でもいいのか？ 丸腰でよお。さっきの鎌借りといった方がいいんじゃないか？」

グリムが男を見やる。その手はいくつかの指輪をしているだけで、武器と呼べるものは身につけていないように見えた。かといって、指輪をしている手で徒手空拳とも思えない。

「ああ、武器ならば、あるさ」

ゆっくりと、男が手招きの動作をする。瞬間、グリム背後に違和感を感じ身を大きく逸らした。そこには、一本の剣が空間の歪のようなものから現れて、飛び出してきた。

「はっ、今日は随分と不意打ちされるぜ」

「それは貴様が隙だらけだからではないかな？」

空間の歪に視線を取られていたグリムのすぐ側に、男が一瞬の内に詰め寄っていた。

「なっ」

「もっと本気でやってもらわねば困るな」

グリムの首根っこを鷲掴みに、そのまま共に遙か上空へと昇る。雲も間近といった高度に達したところで、グリムがその腕を強引に引き剥がす。

「ちっ、やるじゃねえか。一応名前聞いとうるか」

「クオンだ」

「あん？」

聞き覚えのある名前にグリムが一瞬固まる。クオンはその隙を逃さず、再びグリムとの距離を零に、今度は背後を取った。グリムの背中に蹴りが入り、大きく吹き飛ばす。

「隙だらけだと言っている。一々動揺するな。既に二回死んでいるぞ」

「はっ、言うぜ。そういうのはな……実際に二回殺してからほざきやがれえ！」

ようやくスタートがかかったか、グリムが炎の鎧を形成する。大剣の柄を頭上に、剣先は下げ、両腕を交差する形で構えた。

「そうだ。それでいい」

クオンもそれに応えるように、手にした細身の剣を片手でグリムへと突き出す。

「お前……強いな」

その剣線に強大な霊気が籠っている事を見たグリムがそう口にした。

「自負している」

「……最高だ。なら、遠慮しねえぜ！」

狂喜とも取れる感情に満ちた笑み、歓喜の声を上げ、グリムが突撃する。彼の足元で爆発が起こり、超音速の加速と共に大剣を打ち込んだ。

けたたましい単一の衝突音と大気を吹き飛ばす衝撃を巻き起こすも、クオンは1mmも押されずにその場で打ち込みを受け切っていた。

「いい一撃だ。だが、まだまだ」

クオンの剣がグリムの大剣を弾く。それに怯まず、再びグリムの大剣が襲いかかる。それを身を逸らして避け、半回転の斬撃を繰り出すクオン。しかしそれは炎によって遮られた。

その瞬間を見逃さず、柄から片手を離れたグリムがクオンの服を掴む。

「おらぁ！」

気合と共に爆発が巻き起こる。黒煙の中から、グリムが飛び出した。

「余裕持ち過ぎじゃねえのお？ そんなんじゃ足元掬われんぜ」

欠伸混じりに語るグリム。しかし。

「その言葉、自分に言っているのか？」

冷やかな囁きは、またしても背後から。瞬時に振り向き、突き出された刃を避けようとするが間に合わず、剣は炎の鎧も肩当てもものともせずにグリムの肩に傷をつけた。

「ちいっ！」

「ふむ、浅かったか。反応は悪くないな」

「いいぜいいぜ、そうじゃなくっちゃなあ！」

雄叫びと共に、先程の初撃よりも遙かに速くグリムが突撃する。

が、またしても大剣は止められた。しかしそれを見越していたか、さらにグリムは攻勢に出る。彼の纏う炎の一部が防御を解いてクオンに襲いかかり、その身を焼いた。

「まだ足りねえだろお！？」

かち合っている剣を無理やり突き飛ばし、距離を離れたグリムが大剣を腰だめに構えなおす。巨大な刀身を覆い尽くす、それよりも大きな炎の渦。

「持っていきな！」

空をも焦がす灼熱の炎渦が、降り抜かれると同時に打ち出される。グリムの視界全てを焼き払うかの業炎が、火に包まれていたクオンへと追撃を加えた。骨すらも蒸発させる程の熱を放つ。

「悪いが、お断りだな」

それはまるで、直接耳に響くかの如くグリムに聞えた。気を抜いていなかったといえば嘘かもしれない。だが、クオンの存在は動きは、グリムの知覚の向こう側で起こっていた。

冷たい感触が彼を貫く。冷たい気がするが、熱い感覚もしていた。正体不明の感触の正体を知ろうと、違和感を感じた己の腹部を見る。そこからは、銀白の刀身が、嫌に紅い液体と共に抜き出していた。それを確認したところで、ようやくグリムの耳に、刃が肉を貫く嫌な

音が届く。同じく、痛みも。大剣がグリムの手から滑り落ちていった。

「ふむ。この程度か。残念だ」

「ぐっ……！ 痛ってえなコラあ！」

仕留めたと溜息を吐いたクオンの隙を逃さず、グリムは剣を失った手で、己に突き立てられている刀身を掴む。これまでで最も大きな爆発を引き起こし、生まれた火炎をさらに自分の元へ集め、クオンごと自分を包み込む、紅蓮の炎球を作り上げた。

「貴様っ！」

「まだだ……もっと上げんぜええ！」

炎の勢いがさらに増し、火炎の球体はさらに大きく、厚くその姿を為す。それはまるで、太陽のようであった。

剣を引き抜き、クオンが脱出しようとするも、剣身はピクリとも動かず、グリムの手により固定されている。柄から手を放して逃れようにも、既に退路は灼熱に包まれていた。

「この男……」

「さあ、消し炭になんな！」

「くっ、仕方あるまい！」

二人を包んだ炎流が迫りくる直前、クオンの持つ剣、グリムの身体を貫いているそれが光る。

同時、グリムが放ち続けていた炎の動きが止まった。消えたのではなく、そこにありながら、爛爛とした光りを放ちながら、しかし動かない。それはグリムも同じだった。

静かに、クオンが剣を引き抜き、炎陽の中から脱出する。その身は炎の中を突っ切ったというのに、焦げてすらいない。

「我に魔具を使わせるとは。褒めて使わずぞ、紅蓮の騎士よ」

言って、クオンはまだ光を放ったままの剣を中空に刺す。そのまま手を放し、翳した先に現れる空間の歪み。そこから黄金に煌めく三叉の槍を取り出した。

手にしたそれを振り翳す。風切り音に呼び出されたかのように、黒雲がどこからともなく現れ辺りを暗黒が包み、風が吹き、豪雨が降り始める。

「では、お別れだ」

クオンが槍を天へと掲げた。グリムが創り上げた太陽の真上の黒雲が割れ、そこから、炎球さえも呑み込む太さの雷が落ちる。炎掻き消し、海を砕く天雷。霧散する炎、落ちるグリムの身体。

「グリムーっ！」

海上からメルシアが飛び出し、雷を受けて煙を上げるグリムの元へ飛び立ってその身体に飛び付く。しかし、反応がない。腹部からは血を流し、眼は開いていなかった。

「グリムっ、グリム！」

術で彼の身体を浮かし、必死に呼びかけるがグリムは黙したままだ。

「時は紡げても時は戻れぬか、魔女よ？」

「お前ええ！」

クオンの台詞に一にも二にもなくメルシアが激昂の雄叫びをあげる。既に七冊の光る本を呼び出し、眼は血走っていた。雨と涙に濡れた顔を上げて。

「お前……お前お前お前えええ！」

「我はこのまま貴公と戦ってもいいのだがな？ 彼はいいのか？ まだ息はあるぞ」

クオンが指を差すグリムは確かに、絶え絶えだがまだ息はあった。それを確認し、二三秒歯噛みして、本の展開を納めるメルシア。

「この借りはいつか返す……！」

「さっさと行くがいい。間に合わないかもしれんぞ。ここで死ぬには、惜しい男だ」

強く噛んだ唇の端から血を滴らせながらも、メルシアは静かにグリムの手を取り、何事が詠唱を唱えると光に包まれて何処かへと一瞬で消えた。

その場に、光の粒子と戦いの痕の匂いだけを残して。

「クオン様。よろしかったので」

メルシアが瞬間移動を成した痕の光子さえも消え、ユレアがクオンの元へと上がってくる。

「ああ。当初の目的はナツが果たしていたからな。それに世門がこの辺りに有る事はわかった。あの騎士の力もな」

「クオン様がお相手するほどの男には見えませんでした」

ユレアのそんな言葉にクオンが苦笑を返した。

「しかし、手傷を負わされた。自分にも血が流れていると久々に実感したよ」

言って、クオンは自分の両腕を見下ろす。長袖に覆われているが、その手の先は両方とも真っ赤に染まり、肩か腕から大きく出血しているのがわかる。

グリムの最後の一撃の際、包まれた熱に体が耐えきれなかったのだった。

「お怪我を！？ 今治療致します！」

それを見て珍しく青ざめた顔をしたユレアがクオンの手を取り、治療術の詠唱をはじめた。

「頼む。……グリム、とか言ったな。あやつどうにかこちら側に与させる事は出来ないものか」

喉の奥でクオンは笑う。

「賛同し兼ねます。クオン様に手傷を負わせた者など……」

吐き捨てるようにユレアは呟く。血を拭ってもらい、治った片方の腕で、クオンはユレアの頭を撫でた。

「怒るなユレア。奴もそうだが、それ以上に魔女だな。あの形相……奴は次に我を見たら地獄の果てまで追いかけてくるだろう。それに交渉も一瞬で蹴られるくらいだからな」

そう言って、クオンはまた喉の奥で笑うのだった。

亡国 ― エトアール ―

――ギティア大陸西の果て。水恵都市マイラ。世界最大の砂漠地帯ムーゴの中央に位置する巨大なオアシスに人々が集まり、自然と出来上がって行った街だった。

砂漠という過酷な環境ながら、人が集まるのはこの地でしか取れない特産品が多くあり、それを求める人々が最初に、現在に至るまでにはこの岩と砂の世界を研究する人間が多く現れはじめたからだ。故に、マイラの街には荒涼とした周囲の風景に囲まれながらも、数多くの著名な学者が住んでおり、様々の独創的な知識や技術が集まっているとも言える場所だ。

「うー……なんかもう、全身が埃っぽい……」

オルヴスとアーノイスは砂漠を抜け、ようやくマイラの街に辿り着き、宿の部屋で一息入れようかという所であった。

大きな外套のフードの下で涙目になりながら咳き込むアーノイス。布で鼻と口も覆っているものの、少しの風で砂漠の砂は舞い上がる為、どうしても100%は防げないのだ。

「タオル濡らして来ましようか？ お風呂は零時からでないと貸し切れませんでしたので……」

少し申し訳なさそうにしながら、荷物からタオルを取り出すオルヴス。

潤沢な水が湧き出ている巨大オアシスであるとは言え、砂漠のど真ん中で水は何よりも大切なのは間違いない。水道は宿屋の部屋に通っておらず、一階の井戸から汲まなくてはならないのだ。

「ああ、うん。お願いするわ」

下手にアーノイスが動き回ると、セパンタの時のように騒ぎになってしまいかねない。ただでさえ、ここマイラは恵みや希望といったものに関する物を重宝する風潮が強い。厳しい環境だからこそ心の拠所を常に求めているのだ。だから、教会の信者も多く、街にはアヴェンシスに次ぐと言われる大きさの教会も建てられている。セパンタの二の舞はアーノイスとて御免だった。

「では、行って参りますね」

一礼して、オルヴスは部屋を出て行った。

宿屋は、というかマイラの建物は全て厚く巨大な石造りである。それは、風やそれに運ばれてくる砂、雨季に降る豪雨、昼間と夜間の温度差から人々を守る為である。堅固なつくりでなければすぐに風化して使い物にならなくなってしまう。それでは困るからだ。

オルヴスは階段を下り、一階のカウンターへ向かう。一人の若い女性、暇そうに肘について台帳を意味もなくめくっている。

「すみません。水をいただきたいのですが」

「え？ ああ、はい。こちらへどうぞ」

話し掛けられてはじめてオルヴスの存在に気付いたらしい女性は、台帳を閉じ、カウンター卓の端につけられた木の衝立をどけて、オ

ルヴスを案内する。勝手に水を持って行かれないように、井戸はカウンターの奥にあると、部屋を取った時に聞かされていた。

左側の扉の南京錠を持っていた鍵で開けて、中に招き入れる。そこに灯りはなく、扉から入ってくる光だけが唯一の明かりだ。水源があるからかひんやりと冷たい空気が感じられる。

「旅の方ですか？」

「ええ、まあ」

井戸から水を引き挙げながら女性がオルヴスに問う。なんてことはない。ただの世間話だ。

「珍しいですね。そろそろ雨季が来ますから、旅人は皆避ける時期ですのに」

「どうしてもこちらに用がありましたね。早めに済ませて発てば大丈夫だろうと判断したのですが」

「成る程……ああ、そういえば少し前にアヴェンシスから掲剣騎士の方々もいらっしゃっていましたね」

女性が井戸から引き揚げた水を大きな瓶に移しながらそう言う。

「アヴェンシスからですか？」

「ええ。偶に新しい騎士さんが何人か交代とかで来る事はあるんですけどね。何かあったんでしょうか」

オルヴスは女性から水の入った瓶を受け取り、微笑んだ。

「心配要らないと思いますよ。大方、偉い学者がどこか調査に行くのにも人員を欲したのでしょう。街から離ればフェルと遭遇する可能性もありますから」

それだけ言い、一礼してその場を後にしようとするが、一瞬足を止めて天井を見上げる。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いえ。水ありがとうございました」

怪訝に思った女性に再度会釈を返し、オルヴスは少々急ぎ足で借部屋を目指した。

「うー……あ痛っ！　もう、痛いゴワゴワ……」

その頃、アーノイスは部屋を出る事も出来ないので、椅子に腰かけて髪に櫛を通していた。砂が入り、櫛がなかなか綺麗に通らないのでひっかかってしまっていた。髪をとかそうとする度、少しからまってはパラパラと砂が落ちる。諦めて、アーノイスはオルヴスがやってくるのを待つ事にした。とはいえ、何もしないのも暇で仕方ない。服を着替えたが体を拭いてからじゃないと仕方がない。取り敢えず服の端に溜まっているであろう砂を取る事にした。あまり部屋を汚すのも嫌なので隅に移動してバサバサと服を軽く叩く。と、袖の部分から何かが転がりだした。

「あ、これ……」

それは出立前オルヴスから、正しくはメルシアから預かったガラス玉だった。拾い、天井に下げられた室内灯に翳す。相変わらず、不思議な光を放つ玉だ。

ふと、アーノイスの眼が、ガラス玉の奥に一筋の光を見る。明らかに不自然な光り方にアーノイスはより、見える筈のない玉の内側を覗き込もうとした。途端。

眩い閃光が室内を覆い尽くす。思わずアーノイスが手を放す、がしかしガラス玉は床に落ちずに宙に浮き、一瞬、より一層輝いて碎けた。

「な、何なのっ!？」

光の残像がまだちらつく中で、アーノイスは必死に状況を把握しようと思いを凝らす。先程まで、視界には無かった色を捉える。赤と白と金。とりわけ赤い色が多く見えた。

そして聞える声。小さな女の子がしゃくりあげて泣いている。何が起きているのか、アーノイスにはわからなかった。

やがて視界が元に戻り、状況を把握する。

「め、メルシア……?」

「アー……ノイスっ……う、うわああああああ」

そこに居たのはメルシアであった。メルシアは泣き叫びながらアーノイスの足元に飛び付き、泣き喚く。何故彼女がここにいるか、そんな疑問について思考が巡る前に、彼女の目線に飛び込んだのは。

「グリ、ム……?」

自身の髪よりも赤く染まり上がった、グリムの姿だった。

「アノ様、お水持って参りましたよ」

そこへオルヴスがやってきた。部屋で起きている状況を予測していたとは思えないが、取り乱しはしなかった。

「お、オルヴス! グリムが、怪我してて……メルシアが」

「アノ様落ち着いてください。とにかく、グリムに時を閉じる結果を。お早く」

あくまで冷静に、それでも要点だけを掴んだ要求を告げるオルヴス。アーノイスにしがみ付いたままのメルシアを放し、グリムの周囲の荷物等の物をどける。

「わ、わかったわ」

言葉に従い、アーノイスが横たわるグリムの側に立ち、瞳を閉じて瞑想をはじめた。そして、言葉を紡ぐ。

「悠久の流転より隔絶せよ。此処は連環から外れし異空なり! エイジェンスト!」

詠唱が完了し、グリムの横たわる床に術印が現れ、彼の身体を覆うピラミッド型の結果が出現した。

「すみませんアノ様。少しの間、お願いします」

「うん、大丈夫。任せて」

眼を開き、グリムの方を、結界を見つめる。集中を切らせば、すぐに結界は瓦解してしまうからだ。

「お願いします……ではメルシアさん。状況の説明、お願いできますね？」

長くは持たない。そう判断し、オルヴスはただちにメルシアに話を聞く事にした。

―不安―

レツアーン近くでの、故国エトアールの襲撃者の話を聞き終え、一先ずグリムの治療をする事にしたオルヴス。

とはいっても彼は治療術は使えない。アーノイスも同様で、結果メルシアが部屋のベッドに治療呪印を施し、そこへグリムを運んだ。傷が深く内蔵にまで達しているが、数日安静にしていれば命は助かる。

オルヴスが宿屋の人間に掛けあってもう一部屋貸してもらい、アーノイスと二人そちらの部屋へと移った。メルシアにも休んだ方がいいと諭したが、彼女はただ頷くだけでグリムの側を離れない。アーノイスはアーノイスで烙印術の行使で旅の疲れも相まって、移った方の部屋のベッドに横になっていた。

「エトアール……ですか」

椅子に座り、思索を巡らせていたオルヴスが呟く。アーノイスが寝転がったままで首だけを彼に向けて言った。

「知ってるの？　オルヴス」

「ええ、まあ。大陸の北方にある島国です。いえ、あった、と言った方が的確ですね。今から十年程前にフェルの大群に襲撃を受けて王家諸共滅んでしまったとか。ちょうどその少し前に先代の鍵乙女様が亡くなっていますから、辻褄が合わなくもない」

そうオルヴスは語る。聞いて、アーノイスは表情を曇らせた。

「……鍵乙女が居ないと、そんな事になっちゃうのね……でも、なんでその国の人達がグリムを？」

オルヴスは問いかけに少し黙し、言葉を選ぶようにしながら応える。

「以前、僕が始祖教会で会った侵入者と、今回の襲撃者及びその側に居た人物の特徴が一致します。話を聞く限りですが。それを考えると彼らの狙いは……」

言葉を切り、アーノイスの方を見つめるオルヴス。

「恐らく教会そのものでしょう。襲撃者はレッツァーン引いてはそこにある世門を見たいと言ったそうです。ただの研究者か信者が、グリムやメルシアさんと戦ってまでそうするとは思えない。理由はわかりませんが、エトアールの人間が教会に対して何かをしようとしているのは間違いないかと」

となれば鍵乙女たるアーノイスの元に現れても、悪ければ襲撃に来たとしても不思議ではない。

「じゃあ……門に現れたっていうのも」

「可能性はあると思います」

アーノイスの表情が沈む。それに、オルヴスは頬笑んで見せた。

「ご安心ください。アノ様は僕が命を賭してお守りします」

それは虚勢でもなんでもない、強い意志が込められた言葉。

「うん……でも、出来れば……戦わないで」

フェルとの戦いは彼女も身を持って知っている。しかし、今回グリムを襲撃し、教会を狙っていると思われるのは紛れもなく人間なのだ。そう簡単に割り切れる事ではない。

「ともかく、今日はもう休みましょう。明日は僕がまず門の周囲の様子を見てきます。アノ様はこちらで待っていてください」

「え、なにそれ聞いてないわ」

オルヴスの言葉に驚いてアーノイスが体を起こす。オルヴスはそれに苦笑を返した。

「それはそうですよ。今はじめて言いましたから。ともかく、そういう事で。何があるかわかりませんから、アノ様はメルシアさんとグリムの看病をしてください。あ、メルシアさんの事も適度に休ませてくださいね？」

「……そうね。わかったわ。メルシアを休ませるのは骨が折れそうだけど」

アーノイスも少し笑顔を返し、二人は明日に備える事にした。

――その夜。

同じ部屋の別々のベッドで、二人は横になっていた。時は既に二時

過ぎ。だというのに、オルヴスはアーノイスの方へ背を向けたまま、眼を開き虚ろに暗闇の部屋を見るときもなしに眺めていた。普段から眠り自体が浅い彼だが、それでも一睡もしないなんてことは早々ない。だが、今日は寝付けなかった。

オルヴスもグリムの実力は認めている節がある。しかし、その彼が瀕死の状態になるまで追い詰められたのだ。敵の目的は教会である事は明確。細部まではわからないが、教会の実質最重要人物であるアーノイスになんらかの被害がないとは言えない。それは、鍵乙女を護る従盾騎士である彼にとってもつとも懸念すべき事項なのだ。

「……ねえ、オルヴス」

そんな彼が起きているのを知っているのかいないのか、半ば独り言のような声音でアーノイスが声を掛ける。まだ起きているとは思わなかったオルヴスは一瞬、返事を仕掛けたが、無理矢理呑み込んだ。明日の夜には儀式をしてもらうかもしれないのだ。休んでもらわないと彼女の体に障る。そう思い、オルヴスは返事をしなかった。しかし。

「起きてるんでしょ……………もう」

黙っていれば諦めて寝るだろうと思っていたオルヴスの予定は外れ、アーノイスはベッドから降り、オルヴスの枕元に腰を下ろした。

「……どうして、戦う相手がフェルだけじゃダメなのかしらね」

命あるものに仇なす存在、フェル。古来より、人は力を合わせてその存在と戦ってきた。

いつから居るのか、何故いるのか、人々は知らないながらも、それが自分達を襲うからと、自分達を護る為に戦ってきた。

「皆、それだけで手一杯の筈なのに……なんで」

シートが引つ張られる感触で、オルヴスはアーノイスが手を握り絞めているんだとわかった。先程まで狸寝入りをしてしまおうと考えていたのを忘れ、体を起こし、主に向き合うオルヴス。音で彼が起きたのがわかったアーノイスだが、振り向かず、自分のベッドの方向を見たままじっとしていた。

「怖いんですよ。人は。色んなものが。今の平穏がいつか失われてしまうかもしれない。そんな漠然とした不安が、人を戦わせる。今が平穏でないのなら尚更です」

オルヴスは誰に言うでもなく、ただ自分の言葉を独白する。

「不安……平穏……」

その言葉の一部を反芻し、噛み締めるアーノイス。

「やれやれ。明日の夜には儀式をするかもしれないですよ？　それなのに夜更かしして」

真面目な語り言葉をやめて、オルヴスはいつもの、尚且つどこか気楽な声音でベッドから降りた。室内灯の灯りを弱めに点ける。

「それは貴方もでしょオルヴス」

膨れて半ば拗ねたように反論するアーノイス。

「僕は大丈夫です。一月程寝なくとも死にませんから」

「そ、そこまではどうなのかしら」

会話をしながらオルヴスは荷物を漁り、マグカップを二つ取りだした。底には発熱の呪印が刻まれているもので、液体を注ぐと温めるようになっている優れ物だ。

「眠れないのでしたらホットミルクでも作りましょうか」

「……うん。お願い」

「かしこまりました」

言って、宿の弱冷の呪術がかかった貯蔵庫からミルクの瓶を取るのだった。

―学術教会―

翌日。

グリムの看病をアーノイスとメルシアに任せ、オルヴスは一人、マイラの中心部にある教会へと向かっていた。

休むように言ったものの、メルシアは徹夜で看病していたらしく眼の下にはクマをつくり、グリムは未だ眼を覚ましていなかった。「大丈夫。私は問題ない」と気丈に振る舞うメルシアではあったが、その顔は明らかに無理の色が見え始めており、アーノイスとオルヴスはそんな彼女をどうか説得し、休ませる事に成功した。

かくして、昼頃の時間になり、ようやくオルヴスは本日第一の目的地であるマイラの教会、通称「学術教会」^{ヘコウ}へと辿り着いた。そう呼ばれるにはそれなりの理由がある。学術教会はその敷地が始祖教会に引けを取らない程に広い。しかし、始祖教会のように修練場がいくつも設けられているのではなく、大人数を収容できる豪華な礼拝堂の他は殆どが研究施設である。砂漠という特異で未だ謎が多い土地であるここムーゴの研究の為に集まった研究者達を囲う為だ。研究者達も砂漠の旅は危険を伴うので、教会傘下の掲剣騎士の助力を得る事が経済的にも実益的にも有用であるという事実も関連している。

ともかく、オルヴスは先に到着しているだろう始祖教会からの先遣隊と面会すべく礼拝堂の奥にある騎士団の詰め所へと足を運んだ。

「おお！ 従盾騎士オルヴス殿！」

詰め所に着くなり、顎髭を蓄えた恰幅の良い中年の騎士らしき人物がオルヴスに近づいてきた。

「お久しぶりですゴードン騎士長。お元気そうで何よりです」

一礼し、男に挨拶するオルヴス。ゴードンは大きな声で快活に笑うと、オルヴスを中へと招き入れた。

「いやいや、最近年のせいか体が重くなってきました……」

言って、自分の出た腹を撫でる。

「そいつぁピザの食い過ぎでしょうよ騎士長！」

奥の席で何やら書類を書いていた掲剣騎士の若い男が半ばからかうように言う。

「がっはっはっは！ そうかぁ最近どうも鎧がキツイと思ってたんだよなぁ！」

その言葉に詰め所に居た数人の騎士もゴードンも皆が大笑いをはじめた。オルヴスを取り敢えず苦笑を浮かべてその光景を眺めるにとどまる。彼はこういう雰囲気はどことなく苦手としていた。

「おお、そうだオルヴス殿。鍵乙女様は如何なさった？ いつも一緒だったと思うが」

「アノ様は今晚行う儀式の為大事を取って頂いています」

「そうかそうか。まあ、こんなむさつ苦しい場所にお呼びしちや失礼してもんだ！」

再び一同が爆笑をはじめた。オルヴスとしては若干その通りだなと思っている節があったが、敢えて口には出さない。

ゴードンは笑いながら詰め所の奥にある休憩所のソファをオルヴスに勧め、自身もその重そうな体を投げ出すように腰を掛けた。

「おいレイク！ 従盾騎士様にビールの一つでも出さねえか！」

大声で騎士の一人の名前を呼びそう告げる。

「え、いや僕は遠慮しておきます。これからまだ仕事がありますので」

「おお、そうか。確かに勤務中の飲酒はいけねえやな」

「どの口でそんなこと言うんですか。全く」

と、ゴードンに呼び付けられたらしい青年がビール、ではなく冷たい麦茶を入れたコップをオルヴスとゴードンの前に置いた。

「レイク、お前は固いなあ」

言いながらゴードンは一口にコップの中身を空にする。

ともかく要件を済ませてしまおうと口を開きかけたオルヴスだったが、隣に立つ青年が未だに自分の事を見ていたのに気付कि、視線を合わせた。

「何か御用ですか？」

「ああ、いえ、その」

普段通りの対応しかしていないオルヴスに対しレイクは何か言いたげな表情をしながらもそれを言葉にしない。

「あすみませんねえ。こいつ今年になってマイラに飛ばされて来たんですが、恐れ多い事にガキの頃から従盾騎士になる事を夢見ていたそうで」

「ああ……」

ゴードンの説明にオルヴスは嘆息を漏らす。彼とて、過去に例を見ない突飛な事で従盾騎士に選ばれた事は自覚している。それ故に奇異の眼で見られる事も少なくなかった。ここ最近ではそういう事も減ってはきたが、今でもたまにあるのだ。

「オルヴス殿は自分と同じ年ですよね？」

「いえ、貴方の歳を知らないんですが……」

オルヴスが彼の年齢を知らないのは、初対面なので当然と言えば当然だが、それに少々不服そうな顔をするレイク。いたたまれなくなつて逃がした視線の先でゴードンが顎を引くのを見て、オルヴスは目線を元に戻した。

「自分は以前、先代の鍵乙女様が行った儀式を間近で見た事があります。その光景に感動し、教会の騎士団へ志願しました。そして今

年ようやく掲剣騎士の新米として任に着く事が出来ました。オルヴス殿はどのようにして従盾騎士になったのですか？」

レイクのそんな台詞に、オルヴスは噴き出したくなるような、深い溜息をつきたくなるような気持ちをなんとか抑える。

「ご存じと思いますが、僕は御前試合の優勝者であるグリムに決闘を挑み勝利した。その結果をアノ様が認めたからですよ」

「……そんな事で……」

口惜しそうにレイクが呟いた言葉をオルヴスは聞えなかったフリをした。わざわざ突っかかって面倒になるだけだからだ。

「お話しはそれでよろしいでしょうか？ ではゴードンさん。始祖教会の方から派遣された先遣隊の方々ですが――」

「待ってください」

話をやっと本題に持って行こうとしたオルヴスの言葉をレイクが遮る。ゴードンが腰を上げかけたが、目配せでオルヴスはそれを拒否した。

「……では、貴方と決闘で勝てば従盾騎士になる事が出来ると見てよろしいですね？」

立ち上がり、オルヴスはそこではじめて笑みを消して眼の前の青年を見据える。僅かな挙動ながらも、レイクは少し身構える素振りを見せた。

「従盾騎士を決めるのは鍵乙女様です。貴方じゃない」

「おいやめねえかレイク。確かにオルヴス殿の選ばれ方は異例だったが、それはもう認められた事だ」

「自分は認めていません」

ゴードンの忠告も聞かず、レイクは腰に差した教団の剣に手をかける。

「自分は儀式をこの目に焼き付けたその日から、いつの日か従盾騎士となるべく己を磨いてきました。騎士学校でもここマイラの訓練でも負けた事はありません。手合わせをした事はありませんが、騎士団で常勝無敗を誇るグリム殿にも引けは取らないと思っています」

「成る程……それで、僕にも勝てる。自分の方が従盾騎士にふさわしい実力を持っていると?」

「はい。ですので、少し手合わせ願いたい」

ついにオルヴスは堪えていた溜息を盛大に零した。零してしまってから、笑ってしまうよりはマシか、などとどうでもいい事を考えていた。

「残念ながら僕は今忙しいんです。貴方の戯言に付き合っている暇はない」

溜息といい台詞といい、どこか小馬鹿にしたようなオルヴスの態度にレイクは激昂し、手をかけていた剣を抜き去る。しかし、その瞬間に一つの違和感が彼を襲った。

慣れ親しんできた筈の剣が軽い。それも異様に。抜き去り突きつけた筈の剣身が、彼の視界にはなかった。

「なっ……!!」

折れたのか、こんな場面で。そうレイクは歯噛みした。だが、すぐにそれが自分の思い違いであると知る事になる。

「お探しの品はこちらですか？」

声のする方――オルヴスを睨むレイク。その持ちあげた手には、剣の刀身だけが根元から無造作に折られて弄ばれていた。

不穏だった詰め所の雰囲気が一挙に驚愕の色に染まる。最も近くで見ていた筈のゴードンですら、眼を瞬いて事態の把握を測ろうと必死だった。

カラン、という無機質な何かが落ちる音が静寂を破る。それはレイクの腰元から落ちた、刀身と同じく折られた鞘の音だった。

「バカな……一体、何を……何の霊術を」

茫然自失として自分の柄だけの剣と刀身だけの剣を見やる。

「術など使っていませんよ。ただ……」

持っていた刀身を親指と、人差し指と中指との間に挟むオルヴス。

「こんな風に折っただけですよ」

そのまま、指先に力を込めるだけで刀身を真っ二つにし、床へ捨て

た。

またしても虚しい落下音が部屋に響く。

「騎士学校で、ここでの訓練で負けた事が無い？　ましてやグリムに引けを取らない？　笑わせないでください」

我を忘れて立ち尽くすレイクに背を向けて、オルヴスは詰め所を出て行こうとする。詰め所に居た全ての人間が何も言わず道を開けた。出口のすぐ手前でオルヴスは振り返り、思い出したように口を開く。

「ゴードン騎士長。始祖教会からの先遣隊は今どこに？」

「あ、ああ……一度こちらに寄って、四日前に門のところに行つて以来音信不通で……昨日うちのを二三人出したんですがそれも帰ってきてませんや。昨晚には戻る予定だったんですが……」

「そうですか。ありがとうございます。では失礼します」

それだけ聞き、オルヴスは詰め所を後にした。

―使命―

修道服や白衣の人間と幾度となくすれ違いながら、オルヴスは学術教会を出て行く。途中、信者や騎士に従盾騎士とバレて何度もその足を止められるのを少々鬱陶しく思いながらも、そこは鍵乙女に仕える者の建前として嫌な顔はせずにかやり過ごした。世界の救済の象徴である鍵乙女を、あらゆる息災から護るのが従盾騎士の役目であり使命だ。それに民衆が羨望や畏敬の眼差しを向けている事は熟知している。事自分に関しては、時折先程の青年のように腑に落ちないと反感を持っている人間と会う事もある。普通なら色々と心労がかかる所だが、オルヴスはそれらの事を小事と見なし、特に相手にしなかった。それが今回、予告なく相手の武器を破壊して戦力を喪失させるという愚行に至ったのは、今現在宿屋で療養中のグリムの名前が出たからと、もう一つ。彼が反応したのは彼を従盾騎士として認めなかった、からではなく「鍵乙女の儀式に感動」その点だった。それを再び思い返すと、オルヴスは齒噛みしたくなる。鍵乙女の儀式は決して美しいだけのものではないのだ。それを証拠に、アーノイスは昨晚も（グリムとメルシアの件もあったが）眠りが浅い様子だった。彼女が言う“声”が恐怖を煽る。それが安らかな眠りすら妨害しているのだ。

そんな事を考えて歩く内に、オルヴスは学術教会の外へ出ていた。オアシスがある場所とはいえ外は熱い。外套を着こんで暑さを凌ぐ。彼としては別にそんなもの着なくともいいのだが、服が埃っぽくなるのは嫌だし、フードも被れば姿も隠せる。教会を出てしまえばそう声をかけられる事はないと思う、とそんな事に多少の安堵を覚えていたそんな時。

「あ！　もしかして、従盾騎士の方ではありませんか？」

白衣を着た、十中八九研究者である男にそう声を掛けられた。安心と信頼のフードを一瞬の内に破られた事に内心若干落ち込みながらも、オルヴスは笑顔で対応した。

「ええ……そうですけども」

「ああ！ やっぱり。私はゼムケードと申します。ここマイラにて霊魂についての研究をしているもので……」

ゼムケードと名乗った男は学術教会にて研究室を持ち、十年以上前からこの地で霊魂に関する研究に没頭していたという。その辺りの事はオルヴスは詳しくなく、彼の名前は知らなかったのだが、一応世界的にも有名な霊魂研究の権威、である。らしい。

ともかく。彼がオルヴスに近づいたのは、どうやら研究の一環で門で行われる鍵乙女の儀式を拝見したいとの事で、その許可をもらいたかったらしい。無論、教会傘下の研究者とはいえど、最重要要件の儀式に部外者を入れるわけにはいかない。オルヴスは一にも二にも丁重に断った。

「そこをなんとか！」

「いえ、無理ですね。許可できません」

「邪魔はしませんから！」

「着いてこられる事事態が邪魔です」

オルヴスはゼムケードの事を半ば無視しながら街を出て行こうとする。それでも尚しつくく迫る男を、オルヴスはそろそろ巻く事を考

え始めた頃。

「……何をしているんですかオルヴス殿」

聞いた覚えのある声が、二人の間に割って入った。それは先程、オルヴスと詰め所で騒動演じた、彼と同一年の新米騎士のレイクであった。

「おや、これは掲剣騎士さんじゃありませんか。そうだ！ 騎士さんからも頼んでくださいよ。ね？」

「頼む？」

第三者まで現れ、オルヴスのフラストレーションが溜まっていく。もう説明するのも面倒になった。ましてや、ついさっきいざこざを起こした相手も一緒など御免だった。

「ええ、レイクさん頼みますね」

もうそれだけ言って、オルヴスはその場から姿を消した。有り体にいえば、その場から逃走した。

「オルヴス殿？ 話が見えないのですが——あれ？」

「一体どこへ……」

風も起こさずに消えたオルヴスを研究者と騎士は辺りを見回すのだった。

—双子—

——マイラ西。ムーゴ砂漠、街の姿が霞んで見える程に離れた場所。そこには巨大な石造りのドーム状の建物があった。

建物といってもそれは、かまぐらのような形を巨大な岩を削ってつくったかのような場所で、天井の一部に大きな孔があり、入口は一つで街の方向を向いている。

そこが、マイラの門のある場所だった。

中へと足を踏み入れるオルヴス。ドームの中は日差しを遮り熱風の通りも制限されている為か、もしくは門が放つ靈気の為か、ひんやりと涼しい大気が覆っている。天井は見上げる程に高い場所にあり、広さも500m直径はあると思われた。

普段の昼間ならば、旅人が避暑と休憩の為に立ち寄りそうな場所であるが、今のこの場所に人影はない。そもそもこの場所には常に数人の掲剣騎士が駐在して門の警護に当たっているのだ。部外者がそうそう立ち入る事は許されない。

しかし、今回オルヴスは一人足りとも騎士の姿を見なかった。いつもなら入り口の所に最低は二人は居て、検問をしているのだが。さらに始祖教会からの先遣隊の姿も見えない。砂漠という環境で砂嵐にでもあえば遭難する事もあるかもしれないが、ここ数日にそんな天気があったとは思っていない。そもそも、掲剣騎士がこの場所への路を間違えるとも思えない。距離があるとはいえ迷う程街から離れているわけではないのだ。

そんな不穏な状況に気を張りながら、オルヴスはドームの中央にある門に向かって進んでいく。門以外には何もない砂地。だというのに、オルヴスはどこか血の匂いの残滓を感じていた。騎士たちの不在及

びその感覚に従うならば答えは――。

門の直前まで進んだオルヴス。その真上が丁度ドーム唯一の天窓であり、青天から光が注いでいる。オルヴスが上を見ると同時。その光が、翳った。

咄嗟に飛び退き、影から身を引くオルヴス。そこに落ちる、3 m程の雑な形をした塊状の物体が砂を巻き上げた。

「あーん、外れちゃったー。ざーんねん。ねー？」

「ねー」

門裏手から二人の少年少女が、塊状の物体を挟んで出てくる。砂色の髪をしたよく似た双子。少女と思われる方が髪が長く、藍色の揃いの衣装がスカートであり少年はハーフパンツ。そのくらいの違いしかオルヴスにはわからない。霊気を探るも二つの存在から認知できる匂いは全く同一のものであった。

「でもこのお兄さんは少し遊んでくれそうだよマルガ」

「遊んでくれそうだねジェイ」

殆ど違いのない声で交互に喋る子供たちはどちらがどちらか区別が付きづらい。と、少年――恐らくジェイと呼ばれた方――が彼の横にある塊を蹴った。

「この人たちはつまらなかったから。ねー」

「ねー」

少年が蹴った場所が時間をおいて、泥の団子が崩れるように剥がれ落ちた。黒い塊。そう思っていたオルヴスだったがその認識を改めた。黒ではなく、赤過ぎる色。鼻を吐く異臭はまるで屠殺場のような血肉の腐臭。そして、その塊を形成していたのは土や砂や鉄などの無機物ではなく。五体どころか十にも分割された人間の体だった。それも一人分や二人分ではない。十人程の頭らしきものが塊には無造作に無理矢理に詰められている。もはや原型という言葉が思い浮かばない程に千切り散られたそれらは、よくは見えない物の鎧や剣が砕けた形で混ざっているようにも見える。

「いやはや……グロテスクですねえ……」

アーノイスを連れてこなくてよかった、とオルヴスは改めて思った。繊細な彼女にこんな凄惨な光景を見せるのは忍びない。

「お兄ちゃんすごいね。何考えてるか全然わからないよ!」

どうしたものか、と思案を巡らせていたオルヴスに、今度は少女と思われる声が話し掛けた。

「どういう意味でしょう?」

「駄目だよ! 秘密なんだ!」

次は少年。何が秘密なのか、気になる所ではあるが、要領を得ない双子の話を無視し、オルヴスは口を開いた。

「……その死体は貴方たちが?」

「うん、そうだよ!」

問いには二つの声がステレオで応える。嫌に快活な返事にオルヴスは眉を顰めた。

「無駄な気はしますが……何故？」

「この人たちは悪い人たちだから」

「だから僕達が教えてあげたの」

「「そうするよう言われたから」」

迷いなく笑ってそう応える双子に、オルヴスは嘆息する。教会の掲剣騎士をこの子供二人がやった事についてはそこまで疑問を抱かなかった。

「それは誰に言われたので？」

「それは言えないよ。言っちゃ駄目って言われたもん。ねー？」

「ねー!」

話にならない。そう、オルヴスが思った、その時だった。

「「うん……悪い人。お兄さんも、悪い人なんだよね？」」

双子の声音が代わり、霊力が溢れだすのが感じられ、二人の間にあった騎士たちの残骸で組まれた塊状が音もなく宙に浮く。

「悪人ですか、そうですね。素直にさっき聞いた誰かを教えてくれれば、優しく対応してあげる事も吝かではないのですが」

答えは無言。代わりに、塊がオルヴスに向かって飛び出して来た。身を逸らして躲すオルヴス。しかし避けた背後で塊は突如として碎け、バラバラになった騎士たちや鎧や剣の破片がオルヴスに向かって襲いかかった。風切り音と共に次々と襲いかかつては裂っし、さらに細かな礫となって迫りくる破片達。ドームの空間を逃げ回りそれらを避ける。勢いが余りぶつかった破片は、それが肉であれば飛散して壁や砂地に赤黒い痕を残し、鎧や剣であれば容赦なく砕く。

「やれやれ……死者を武器にするなど。教育がなってませんね」

「あはは！　すごいすごい！」

「全然当たらないよ！」

ドームの中心で逃げ回るオルヴスを見ながら嬌声を上げる双子。術を仕掛けている様子もなければ詠唱をしている様子もない。だが破片は明らかにあの双子の意志を持って動いていた。

「異能力、ですか。納得です」

この世界には霊術呪術の一定の法則から外れた力を持った存在がたまにいます。それは時に人間であり馬や犬などの動物であり、血筋によって生まれるものもあるらしいが、それらは全て特異なもので、時に敬われ時に蔑まれ遠ざけられる。例外としてフェルだけがその異能と思える力を全ての固体が持っている。双子の力はオルヴスが見るにそんな異能のものであった。

「ならば」

回避行動をやめて地面をこれまで走っていた方向と反対に突っ張り、左手に霊光を纏わせるオルヴス。そこを隙と見た破片が迫る中、拳が砂地を叩き、天井まで届く砂塵を巻き上げた。

「うわっ！」

「見えないよお！」

砂煙はドームを包み込み双子もオルヴスの姿も隠す。それに気を取られ破片のコントロールを手放したらしく、ぼたぼたと地面に落ちる欠片たち。

異能はそれによって作用が違う。この双子の異能が念動力と呼べるようなものであれば。

「そこですね」

視界零の煙の中から双子目掛けてオルヴスが飛び出した。二人の首根っこを無造作に両手で掴み、そのままの勢いを持って彼らの背後にあった門に叩きつける。

「「うわああ！」」

何が起きたかもわからず悲鳴を上げる二人だったが、枷のようにしっかりと食い付いたオルヴスの手は離れない。捕まったと理解して両手で剥がそうとするもピクリともしない。

「暴れても無駄ですよ。さて、先程の質問に答えてもらいましょうか」

「だ、誰が言うもんかつ！」

完全に絞め付けられてはいないものの息苦しさのある中で、双子の内右手側、少年の方がそう言い返す。

「う、ううっ！」

それと同時に左側に捉えられていた少女がうめき声を上げた。少年が必死に横眼で見た少女の首元、そこにオルヴスの指が先程よりも深く食い込んでいる。

「マルガッ！」

「答えたくないというなら仕方ありません。二人同時に口を割らせるのは面倒ですから、片方は喋れなくしてしましましょうか」

オルヴスの眼に虚勢の色は一切含まれていない。このまま少年が口を割らなければすぐにでも少女の首をへし折る。そんな意志が爛爛と見えた。

「うっ、あ、あゝ……！ ジェ、イ……」

少女の声がさらに苦しそうに、空気を求めて上げられる。焦点の定まらない、助けを求めるかのような眼で、同じく捉えられてる少年の名を呼び、瞳に写す。

「……なせ」

「おや？ 話す気になりましたか？」

「マルガを放せええっ！」

叫び声と共に爆発的に膨れ上がる少年の霊気。同時、少女を締め上げていたオルヴスの左腕が半ばから“爆ぜた”。力の伝達を失った左手が少女の首から離れ、少女の体が砂の上に放り出させる。咳き込み、うずくまる少女の上に、オルヴスの分かれた腕から流れる鮮血が降り注いだ。

「うわあああああ！」

収まらない少年の霊力が今度は彼を掴む右手ごとオルヴスの体をドームの壁まで吹き飛ばし、“力”をかけてめり込ませる。溢れだす霊力に体を浮かせたまま、少年はその放出を納めようとしていない。ドーム内に散った先程の塊と共に地面の砂や岩をも集め、先程よりも十倍はあろうかという巨大な砂塊を精製した。

「潰れろ！」

それを破片を操っていた時よりも速く、壁にめり込み礫のオルヴスに叩きつける。轟音がドームの壁の一部を砕き、オルヴスの姿を覆い隠した。

— 惨劇 —

「こ、これは……一体何が」

轟音が響き渡るのが収まった頃、ドームの入り口からレイクとゴードンが中へ入って来た。オルヴスが門へ向かった後、二人は彼を追いかけて様子を見てこようと思っていたのだった。

「こいつあひでえ……」

血が飛び散り辺りに塗られたドームの中の光景を見て、ゴードンが呟く。崩れている入り口横の壁もそうだが、一面にある血の痕がこの場での異常事態を表していた。

「騎士長！ あれは……」

そんな惨劇の中央。門のある場所で二人の少年と少女が居るのを見てレイクがゴードンに呼びかける。少女が少年に抱えられ横たわっていた。少年はそうでもないが少女は赤く染まっている。

「おい！ 坊主、嬢ちゃん！ 大丈夫か！」

そんな二人に駆けよって行くゴードン。

レイクは辺りを調べようと、まず入り口すぐ横の砂と瓦礫が積まれた場所に近づいた。

「うっ……これは酷い」

その山の所々に人の死骸が混ざっているのを確認したレイクが吐き

気を覚え、思わず口元を抑える。嘔吐は何とか堪えたが、人の死骸を見るのはこれが彼にとって始めてだった。原型が残り過ぎておらず、非現実的な光景にも見えるのが幸いだったかもしれない――と。そんな瓦礫と死体と砂の山から、一本の手が突き破るように天井を差して出てきた。

「うっうわああああ！」

悲鳴を上げて腰を抜かすレイク。無理もない。出てきた手は、山につくとそこから繋がっている体を無理やり引きだした。

「……やれやれ。やられましたよ……」

体に着いた砂を払い、そういえば左腕をやられた、と先のない自分の左腕を神妙な眼で見るオルヴス。

「お、オルヴス殿！？ い、一体何を……その怪我は」

立ち上がる事も忘れたまま、突如眼の前に現れたオルヴスに狼狽し、失われた左腕を見る。

「レイクさん？ 何故ここに」

最初に会った時とそう変わらない対応をするオルヴスに毒気を抜かれたのか、レイクは一つ咳払いをして立ち上がり、肩を竦めて見せた。

「は、はん。従盾騎士ともあろうお方が。鍵乙女様をお守りする為の腕を失ってどうするんですか。早く街に戻って治療してもらった

方がいいと思いますが？」

突き放した言い方をするレイクだったが、オルヴスは彼の方を見てはいなかった。その視線は、門の方へと向けられている。

「ここから早く去れ。レイク」

低い声音でそう告げるオルヴス。

「は？ 何を」

「去れと言ってるんだ！」

「ぐわあああああ！」

次にオルヴスが声を荒げたのと、ゴードンの絶叫が聞えたのはほぼ同時だった。

門のある場所。そこで、座り込んでいた筈の少年が少女を横に寝かせたまま立ち上がっている。その眼前では、彼らの様子を窺いに行ったゴードン、その身体が宙に浮いてもがいていた。

「騎士長！」

「お前も騎士……お前も……僕達を傷つける！ お前も悪い奴だ！」

「ぐっ、うおおお！」

少年の声と共にゴードンの苦痛の滲んだ叫びがこだまする。

「死ねええ！」

次に少年が叫んだ時。もうゴードンの声は聞えなかった。代わりにオルヴス達の耳に届いたのは、噴水が噴き出したような水音と激しい雨のような音だった。

未だ宙に浮かぶ、力の抜けたゴードンの体。その左胸には丸く削り取ったような風穴が形成され、止めどなく流れる赤い液体が地面を濡らす。

「騎士長！ 貴様っ——うわっ！」

激昂したレイクが剣を抜き走りだそうとしたが、それに気付いた少年により吹き飛ばされ、壁に背を打ち付けられて気を失った。

少年の視線が、吹き飛ばした対象の隣に居たオルヴスを捉える。

「お前、まだ生きていたのか！」

「あの程度でやったと思いましたか？ 甘いですよ」

少年の方へと歩を進めるオルヴス。少年は浮かせていたゴードンの死体への意識を解いて地面に落とし、迫る青年を見据えた。

「なら今度は！」

霊気が高まり、ジェイの周囲の砂が見えない圧力に押し退けられる。次の瞬間。彼の目線移るオルヴス、その首が千切れた。

頭部を失い、歩みを止めるオルヴスの体と重力に引かれて落ちる首。

「や、やった……うつ……はあ、はあっ！」

霊力を使い果たしたか、膝をつき肩で呼吸するジェイ。その側に、意識が戻ってきたマルガが寄り沿う。

「ジェイ、だいじょうぶ？」

「う、うん……」

マルガの視線がジェイから首のないオルヴスの方へと移る。

「気味が悪いよジェイ……まだ生きてるみたい」

頭が無いと言うのに彼の体は崩れ落ちず、二本の足でしっかりと立っていた。まるで、まだそこに命があるように。

「大丈夫だよマルガ。今、あいつもこの前の悪い奴みたいにしてやるんだ。そこのおじさんも、あっちの人も皆まとめて」

『それは歓迎し兼ねますね』

聞える筈のない声がこだまする。どこから聞えているのか、ドームの中では反響しているのか二人にはわからなかった。言い様のない恐怖に震え、双子はその身を寄せ合う。声は明らかにオルヴスのものであった。だが、彼は死んだ筈だった。首が千切れて生きている生き物なんかない。それは幼い二人でも当たり前のように知っている事だった。

「あ、あれ……！」

首のない体を指差すマルガ。その瞳に映るのは、死体から滲み出る漆黒の靄。闇そのもののような暗さのそれは近くに転がる首を巻き

込み、死体を覆い隠して、まるで生きているように集まる。

「強い霊力を持っていますね。正直驚きましたが……少々おいたが過ぎましたね」

次の声は靄に創られた闇の中から聞えた。闇が晴れて、現れる“魔狼”。満月のような双眸が、怯える双子を見据える。それから、手のない左腕を見やると、その先からまたしても闇が滲み、失われた筈の左手を形成した。握り、開いてその感触を確かめるオルヴス。そして、視線を元に戻した。

数瞬の沈黙が流れる。それを破ったのは言葉ではなく、大気が吹き飛ばされた衝撃音だった。

オルヴスとジェイの姿が同時に消え、先程までジェイが居た場所にオルヴスが現れて、右側の壁が碎ける。蹴り飛ばされ叩きつけられたジェイの体が一瞬めり込み、地面に落ちた。

「ジェイーっ！」

叫ぶマルガの方へと向きを変え、冷たい眼で見降ろすオルヴス。

「うっ、お、折れろ！」

後ずさりながらも力をぶつけるマルガ。だが、効果はない。力を受けているように、マルガが放った霊力が当たったと思われるオルヴスの箇所瞬間歪みが見えるが、それも何事もなかったかのように消える。それはまるで、霊力自体が効力を成す前にオルヴスに吸い込まれているようにも見えた。

「な、なんで……来ないで……来ないでえ！」

「マルガに近づくなああ！」

マルガの方へと静かに歩み寄るオルヴスの背後から、ジェイが突進する。そのまま激突するつもりであったが、しかし避けられると同時に胸倉を掴まれ、一回転して飛んできた勢いのまま地べたへと投げ捨てられた。

「うわっ！」

「……逃げられるのも面倒ですね」

吐き捨てるように言い放つと、うつ伏せに転がっていたジェイの左膝の裏に足を置くオルヴス。そのまま、踏み碎いた。

「うわああああああああっ！ あああああああっ！！」

「喚くな。こちらの問いかけに答えろ。そうすれば生かして返す」

「う、ううっ……！！」

絶望と恐怖で、言われるがまま唇を噛んで声を抑えようとするも、痛みがそれを漏らさせる。マルガはもはやあまりの戦慄に声を出すことすら忘れ、失神する寸前であった。

「君たちをここに寄越したのは誰だ？ その目的は？」

「……言う、もんかつ……！！」

問いかけに対する答えは反抗。この状況にあって尚、ジェイは自分

を何とか保っていた。だが。

「あゝああああっ！」

容赦なく、オルヴスは碎けた膝を踏みにじり、その答えを否として伏した。一度足を放して体に当てると、そのまま仰向けになるよう転がす。

「その気概は立派です、が。良いんですか？ 君が喋らなければ、先にそちらの少女から死んでもらう事になります」

「マルっ、ガに……近づくな」

やれやれ、とオルヴスは溜息を吐いた。

「児童虐待は趣味じゃないんですがねえ……」

「そこまでやっておいて何を言っているのじゃ」

オルヴスの独白。それに応えたのは、ジェイでもなくマルガでもなくましてやレイクでもない。声音は成熟した男の声で、年齢で言えばゴードンが最も近いが、それは有り得ない。新たな侵入者だった。オルヴスの倍はあろうかという巨軀を持つその男は、音もなく、オルヴスの背後に立っていた。

「三人目……ですか」

「ボーヴ……なんで、ここに……」

「お主らが心配になってな。見に来てみれば案の定じゃて」

「おじさん……」

「ジェイを連れて下がっておれマルガ。こ奴の相手はワシがしよう」

ボーヴの言葉に従い、マルガがジェイの側へと恐々として近づく。オルヴスを警戒しての事だが、彼は新たな侵入者の方へ向き直っており、双子の方は既に見てもいなかった。

双子がドームの端までなんとか移動するのを見届けてから、ボーヴは口を開く。

「従盾騎士というのは残虐な性格でなくては勤まらんのか？ 魔狼よ。それほどの力を持つてする事が、年端もいかぬ子供を虐げるというのはどうかとワシは思うのだがの」

「僕は彼らを敵と見なしました。それについて子供だからと、妥協を許すつもりはありません。僕には護らなければならない人がいる」

相手をすると言言して置きながら、問答を始める男。オルヴスはそれに少々の煩わしさを覚えながらも、それに付き合っていた。

「ワシも、その子らを救いに来た。ワシらはここは退く。それを邪魔してもらいたくはない」

「それを許すと思っても？ ふざけないでもらいたいですね」

逃がしはしなと言わんばかりにオルヴスが靈気を放つ。

「そう言うと思ったわい……」

そう残念そうに呟いたボーヴの口元が微かに歪んだ。そこではじめてオルヴスは、眼前の男の異変に気が付いた。ボーヴの姿が霞み、霧散する。霊気を探り、彼の位置を再度探り、振り返った。

「霊気の探知は素晴らしいものだ。だが、強過ぎる能力は過信を生み、そこに隙が生まれる。利用させてもらった」

「幻影か……こざかしい」

ボーヴの姿は既に退避した双子の元にあった。先程までオルヴスの眼前にいたのははじめから霊塊の幻影。霊気の探索を頼りにしていたオルヴスは裏をかかれたのだ。

「では去らばじゃ、魔狼よ」

ボーヴと双子を包みかのように厚い竜巻が巻き起こり、彼らを覆い隠す。暴風が止んだ頃には、既に三人はいなかった。

―各思―

レイクを起こし、ドーム内の清掃を軽く済ませた二人は、亡骸となつてしまつたゴードンと共に学術教会へと戻つた。

始祖教会の先遣隊にマイラの騎士、そして騎士長の死。さらには門の場所に現れた三人の襲撃者について、教会は騒然となり、マイラの詰め所からすぐに始祖教会に向けての使者が送られ、死んでいった騎士たちの追悼の準備もはじめられた。今回の件で死者は17人。フェルとの戦闘に匹敵する損害であつた。

オルヴスは現場の状況の説明や襲撃者の特徴等を挙げる為に拘束されてしまい、宿屋に戻れたのは日もすっかり暗くなつてしまつてからだつた。

静かに、借りている部屋へと戻つたオルヴスだったが、その中央にはアーノイスが仁王立ちしており「遅い！」と第一声にお叱りを受けてしまつた。

本来ならば今晚儀式を行う予定であり、オルヴスは夕方になる前には戻ると言つてあつたのだ。だが、オルヴスの顔を見るなり怒鳴つたアーノイスだったが、次の瞬間には彼の首元と左腕が視界に写り、顔を蒼白にして近寄つた。オルヴスの首元と腕の部分はジェイに引きちぎられた際の出血が服を染めており、一目に無事だと思えるようなものではなかつたからだ。オルヴスとはとにかく、動揺するアーノイスを宥めながら、昼間に起こつた事態の説明と弁解をはじめた。

「……そう。大変だつたのね……」

話を聞き終わり、オルヴスに怒っている場合ではなかつたと反省したように俯くアーノイス。

「すみません。本来ならすぐに報告に向かうべきだったのですが」

「さ、さっきは怒鳴ってごめんなさい！　でも、その……無事で良かった」

謝罪を述べながら、アーノイスの視線がオルヴスの左腕を見る。どう怪我をしたのかは聞かされていないが、彼の白いシャツに上半分と左側が血に染まる程だったのだ。今はちゃんと着替えてもらったものの、先程の血塗れの姿は彼女の眼に焼き付いて離れなかった。

「アノ、様……？」

オルヴスが心配そうな目つきでアーノイスを見る。俯き、両の手を握り締めている彼女の肩は震えていた。

「どうかなされましたか？　お体の具合でも悪いので？」

「悪いに決まってるでしょ！」

顔を上げ、潤んだ瞳がオルヴスを睨んで怒声が室内に響く。

「私、貴方が帰ってこない間、どこで油売ってるのかとか……何かトラブルでもあったのかとか、考えてた。でも、貴方が怪我をするかもなんて全然思ってた！」

彼女の瞳には憤りと後悔、それと恐怖の色が覗いていた。

「だけど、今……帰って来て、血塗れでっ、もしかしたら貴方もグ
リムみたいになっ——」

門を巡る旅をはじめて数年。アーノイスはオルヴスが負傷したのを見た事がなかった。幾度となく戦いはあったが、その度に彼は余裕のある態度のまま、傷一つなくそれを終わらせてきた。しかし、今回はそうではなかった。その不安を感じた心を曝け出すアーノイスの口をオルヴスの指が塞ぐ。

「大丈夫です、アノ様。大丈夫ですよ」

不安に泣く子供をあやすような声音でオルヴスが語りかけ、指を離した。

「儀式は明日にしましょう。何か食べ物買ってきますね。グリムとメルシアさんの様子も見てきます」

「……メルシアはまだ寝てると思うわ。昼間、グリムが一瞬だけ眼を覚まして……。それで安心したみたいで、あっちの部屋で一緒になって寝ちゃったから」

「おや、そうですか。目を覚ましましたか……良かったです」

アーノイスの言葉を聞いたオルヴスが、立ち止まりそう言って微笑んだ。そんな彼の元に、荷物から外套を引っ張りだしてアーノイスが近づく。

「アノ様？」

「ご飯、私を買ってくるわ。貴方だって疲れている筈よ。部屋で休んでて頂戴」

「い、いけませんよアノ様」

「い、い、の！」

先程の不安を拭いきれていない眼をしたまま、アーノイスは強くオルヴスに詰め寄った。否と唱えさせない剣幕に言葉を失くすオルヴス。彼女の厚意は有難いが、騎士として受けるわけにはいかないのだ。

どう説得しようかと言い淀むオルヴスを尻目に、アーノイスは部屋の扉に手をかけていた。

「大丈夫。すぐ近くで買ってくるから。それに、何かあったら大声で助けを呼ぶから。ご飯も買ってくるんだし、ちゃんと起きててよねー？」

「あっアノ様」

上手い返答の言葉が見つからないながらも伸ばしたオルヴスの手を、アーノイスはひらりとかわして扉の向こうへと行ってしまふ。所在なさに伸ばしたオルヴスの手は虚空を掻き、また一瞬、彼の思考も止まる。

だが、次の瞬間にはその部屋から彼の姿は忽然と消えていた。戦闘でもないのに全速を用い、今まさに階段を降りようとしているアーノイスの横を通り過ぎ、宿に居た他の客にも、店番をしている暇そうな店員にも気取られる事なく、そよ風だけを残して、オルヴスは宿の屋根の上に降り立つ。

今ここでアーノイスに着いて行っても、戻れと言われるだけだろう。

気配を殺して尾行をしてもいいが、彼女は着いて来るなといったのだ。その意志は彼としては尊重したい。

宿の出口から、フードを被ったアーノイスが出てくる。例えば外套を羽織っていたとしても、オルヴスが彼女を見紛う事も、人混み紛れたからといって見失う事もない

アーノイスが、どこか食べ物を売ってそうな店を探して右往左往する。砂漠の夜は冷えるが、ここマイラは温度変化を激しくしないよう、ある程度気温の上下を抑える結果が張ってある為、街中はそれほど冷気はなく、家路に着く人や酒場にでも出掛けるらしい人等でそこそこの人混みが出来あがっていた。

「やれやれ……これなら着いて行った方が安心なんですけどね」

アーノイスは勿論、その周囲、近づく人物でさえも逃さずに視認し、その全てを吟味する。いつでも彼女の元へ馳せ参じられるよう、靈力を常に全身に巡らせておく。

そうして彼女とその周囲にのみ集中をしていた為か、オルヴスは、背後から近づく気配に気づくのが、刹那遅れた。

「やあ！　また会ったね従盾騎士君！」

「……貴方は、昼間の」

快活に挨拶をする男の正体を、声と靈気だけで判断し、視線や体の向きも動かさずに返答した。白衣にモノクル、背後には何かの機材か、金属らしき物体で出来た筒状や箱型の何かを置いている。昼間、オルヴスに儀式を見たいと迫った研究者、ゼムケードだった。

「こんなところで何をしているんだい？」

オルヴスが自分の方を見向きもしないのを気にも留めず、機材をいじりながらそう話しかけるゼムケード。

「貴方こそ。宿屋の屋根なんかに登って何を？」

オルヴスは特に興味もないが、ゼムケードをあしらう上手い言葉も見つからないので、適当な返事をする事にした。

「天体の観測さ！ 月の満ち欠けが世界にある靈力に何か関係しているらしい、という記述を古い論文から見つけてね。そして今日は満月！ 快晴！ 観測には最高さ」

「そうですか」

「もー、相変わらず連れないねえ、騎士様は。そんなに鍵乙女様が心配かい？」

聞き流していた筈のゼムケードが、話してもいないアーノイスの事に触れて、オルヴスは動揺を隠しきれなかった。彼とは今ここで会話をはじめ、それも二三しか言葉を交わしていない。オルヴスは自分がここに理由も何も言っていないというのに。

「おや図星かい？ はっはっは！ 流石は騎士様だ」

アーノイスは今や店先に並び、群衆とほぼ一体になってその姿が確認出来ない。いつも側で見ているオルヴスならまだしも、彼女の姿を見た事もないゼムケードが認識できるかと言われれば、否だろう。

「鍵乙女様も大変だねえ。買物に行くのにもこうして、従盾騎士が

見守っているわけだ」

作業が終えたのか中断したのか、ゼムケードはオルヴスの隣に座り込んだ。

「……おや？　どうかしたのかい？　どこか思いつめた顔をしているね」

オルヴスにそんなつもりはなかった。それ以上に、今は突如現れたこの男の存在の方が気がかりであった。男の手が、オルヴスの肩を二回ほど軽く叩く。

「ふーむ……。昼間戦った双子の事でも気にかかっているのかな？」

心の奥底を見抜かれたかのようなその言葉に、オルヴスはほんの一時、横眼でゼムケードを睨んだ。確かに、それは正しい。相対していた時は無情な、彼らの敵として立っていたオルヴスだったが、その実、欠片もその心を痛めていなかったわけではない。ただ、そんな感傷を凌ぐ意志があったただけだ。

自分と同じ黒眼をした男は、その温和な人柄を表すように穏やかな笑みを浮かべている。何故知っている。何故そう思う。疑問ばかりが矢継ぎ早に出て、言葉にならない。

「まあ、確かに君のやった事は、些か残酷だったかもね。でも、そうしなければ彼女を絶対には護れない。ましてやこの世界は、優しい人間に程冷たい」

「……見ていたのですか？」

ゼムケードは昼間、オルヴスに儀式に立ち合わせてくれと懇願して

いた。その場にレイクが現れたことで、オルヴスは隙を突き、居なくなっただけだが。後にレイクと今は亡きゴードンが追い付くまで、オルヴスはあの双子と戦っていた。そこに彼が居合わせた可能性がないとは言えない。しかし、オルヴスとレイクが門を去った時には彼の姿はなかった。先に帰っていたか、身を隠していたか。後者についてはまずないだろうとオルヴスと思う。先程のように、アーノイスの方向のみに注意をやっていたれば、気配を隠す術に長けた者の存在はわからない。この飄々とした男がそうだとは思えないが。ともかく、門の場では常にオルヴスは全ての方向に気を配っていた。その中で、彼が隠れ切れるとも考え難い。ましてや、ドームがあるとはいえ、隠れ切れる場所は殆どない。

「それは秘密さ。理由を言ったら君が怒るかもしれないからね」

言って、ゼムケードは腰を上げた。恐らく、観測とやらに入るのだろう。アーノイスの方も、買物が終わり宿の方へと近づいてきていた。

「君の歩む道は辛く険しい。鍵乙女と同様に。もしかしたらそれ以上に。それでも君は止める気はないのだろうか？」

「無論です」

立ちあがり、ゼムケードの言葉に今日はじめて確固たる返答をして、オルヴスは姿を消した。屋根に來た時同様の速度。今度は部屋から一歩も出ていない風を装うつもりだ。

自分以外が居なくなった屋根の上、ゼムケードは嘆息して、これから観測をはじめる月を見上げて呟いた。

「オルヴス……か。そうまでして、お前は……」

その瞳は、何かを憂う色を帯びていた。

焰と誓い

深夜の森。

虫たちすら眠り、風もないそんな深い夜。鬱蒼と立ち並ぶ木々は空を隠して月明かりすら通さない。そんな暗過ぎる世界の中で、少年は膝を両手を地面に付いて、嘆いていた。

一つは、自分の浅はかさに。もう一つは、自分の無力さに。

少年の濡れた視線の先、地面に転がっているのは一本の大剣。それは、少年が扱っていたものではない。彼が慕い、彼が敬い、彼が愛していた人の持ち物だった。

主を失くした大剣。それは、つい先程まで息をしているかの如く軽々と振るわれ、主に襲いかかる魔物を打ち倒し、微かに漏れる月明かりに妖しくその刀身を光らせていた。だが、その持ち主も今はもういない。

どれほどの間、少年はそうしていたのだろう。深すぎる夜にあって、時間の流れはわからない。少年は徐に立ちあがると、転がっていた大剣を手取る。

——重い。少年はそう思った。少年は夢見ていた。いつか、この剣の持ち主のように強い存在になると。だが、目指していたモノは遥かに重たい。何の変哲もない作りのその剣は、無骨で巨大な鋼の刃。

「こんなところに居たのか。探したぞ」

声と共に、空から少女が降りてくる。暗闇に包まれた場所だというのに、白い衣装か金糸のような髪の色か、仄かに光っているようにも見えた。

「またお前は勝手にローラの任務について行って……ダズホーンとティレドが探していたぞ」

少女はふわりと少年の前に降りてくると、少々お冠のようにそう告げた。しかし、少年は顔を上げない。それを訝しんだ少女が、彼と一緒にだと思っていた人物の事を探す。が、彼の背後に広がるは黒い森ばかりで、少女が頭に描いていたような人影は露と見えない。

「おい、ローラはどうした？ まさかお前を先に帰らせるなんて事はあるまい……何かあったのか？」

少女が真剣な顔つきになって少年に問う。数秒して、少年はようやく顔を上げると、先程までの悲愴な面持ちから一変、焰の色をした瞳を、その色以上に滾らせた眼で応えた。

「フェルは討った。俺が、母さんと一緒に」

「う、うむ……勝手に付いて行ったのは駄目だが、お疲れ様だ。それで、ローラは」

「今言っただろ」

少女の台詞を途中で遮るように、少年が抑揚のない声で言う。少女ですらはじめて聞く少年の酷く冷たい声音に、少女は押し黙る。

「フェルは、母さんと“一緒に”に、俺が討った」

そして、続いて聞えた、先程と変わらない言葉の真意を理解して、改めて少女は言葉を失うのだった。

眼を見開いて硬直する少女の横を通り過ぎ、少年が再び大剣を引きずり歩みはじめる。少女を置いて数m程進んだところで、少年は再び足をとめた。

「メルシア」

振り向かず、少女の名を呼ぶ。彼女が踵を返す足音で、声が彼女に届いていると少年はわかった。

「俺は強くなる。誰よりも、何よりも」

「……ああ」

その言葉は、日ごろから口癖のように少年が言っているものだった。少女はよく聞いていた。だが、彼が目標としていた人物はもう。

「母さんのように、なんて言わない。母さんよりもっと、ずっと……どんな奴よりもだ」

そんなメルシアの心情を見透かすかのように、少年は言う。それは誓いだった。それを何故、今、ここで、メルシアの前で言ったのか、少年の中に答えは出ていない。だが。

決意の強さを表すかのように強く握り締めた母の大剣の柄には、熱い程の血が流れていた。

翳刃騎士 ―フューザー―

「……ここは」

マイラの宿屋の一室。そこに寝かされていたグリムは、灯りなく暗い室内の中で目を覚ました。室内灯も点いていないせいで、目を開けている筈なのに開けていないような、そう思える程だ。状況を確認すべく体を起こそうとしたところで、自分の左半身の妙な重さに気が付く。左腕を絡め取り、肩と左足に何か温かいものが乗っているというかしがみついているというか。左胸の辺りに当たる風で、それが呼吸であり、くっついているのが人間だとグリムは気付いた。その時点で正体はほぼ10割方わかっていたものの、取り敢えず確かめようと、右腕を重たそうに持ちあげて、一本だけ立てた人差し指に小さな火を灯す。柔らかな火の光が室内を照らした。

「やっぱお前、だよなあ」

左腕に両手両足を使って絡み付いている少女――メルシア。その姿を見た後で、ぼんやり照らされた部屋の中を見る。出来のいい洞穴とでも称そうか。そう言っただけは失礼に当たるだろうが、ここが宿等とはグリムの知った事ではない。無骨な岩の壁は剥き出しで、窓もない。テーブルも直接削りだされたようで、足が床と同化している。椅子は鉄製の骨組みに、着座部にだけ綿を詰めたものだ。唯一、一つだけある出入り口と思われる扉だけが木製であった。

ともかく、ここがどこかを知りたいグリムは、メルシアを起こそうと火を消して右手を持ち上げかける――が、躊躇い、止めた。妙に心地よさそうにしているからだ。

しかしこれではどうにもならない、と若干途方に暮れた時、扉が静かに開いた。

廊下の光と共に、水色髪の女性が様子を窺うように顔だけを覗かせる。だが中は真っ暗で様子がわからないらしく、首を巡らせている。

「おー、姫様じゃねえか。てことはなんだ？　ここはアヴェンシスカ？」

それを見たグリムが指から、先程より少し強めの火を出す。室内がぼんやりとした光りに包まれ、グリムとメルシアを――ベッドに横たわる一組の抱き合う男女（アーノイス視点）――照らしだした。

「お、おおお邪魔しましたーっ！」

白い頬を耳まで真っ赤にして、アーノイスは扉をそのままに廊下へと逃げ去っていった。理由と状況がまるで掴めないグリム。

「アノ様、お二人の様子は？」

「ぴっぴ、ぴぴぴっ！」

「？」

何だ壊れた機械のような、などとグリムがボーっとしていられたのは、ほんの一瞬。

「ぴっ、ピロートーク中だった……！」

「ちょっと待てえええい！」

姿は見えないが声は聞える。壁の向こう側のアーノイスに向けて、グリムが叫んだ。宿屋中に響くと思われた声量に、件の女性の方が眼を覚ましたのか、もぞもぞと動きはじめる。

「むう……うるさいぞグリム」

「それはそれは……では置き手紙でもしていきましようか？」

「う、うん。その方が、ね？ 邪魔しなくていいし、うん」

「だから待てって言ってんじゃん!？」

その後、メルシアの意識が覚醒するまで、グリムは無意味にも騒ぎ立てるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360u/>

白月に涙叫を

2011年11月25日07時45分発行